メイドは主人を殺したい

朱花

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔物たちは完璧な統率が取れており、人間界に魔物が迷惑をかけているはずはない――、のにも関わらず、人間の勇者は魔王を倒すべく攻めてきた。

屈辱のうちに倒れた魔王だったが、不思議な女の声がして、復讐を叶えてやると言われて!?

勇者の末裔のメイドとなって、ご主人を狙う暗殺転生ファンタジー!

目次

メイドの誕生 1
魔王、身体を手に入れます 8
新たなる協力者 15
魔眼解放 20
一難去ってまた一難 25
一難去ってまた一難② 31
一難去ってまた一難③ 35
便利な道具 40
新たなる目的 43
作戦準備 47
修行の日々 53
作戦開始 59
国王の矜持 64
悪魔討伐 68
悪魔討伐② 72
戦いを終えて 77
国王と暗殺 80
能力の使い道 85
能力の使い道② 90
能力の使い道③ 93
女神登場 97
女神潜入 101
勇者ＶＳ女神 105
勇者ＶＳ女神② 109

女の子部屋 112
魔王の狂信者 116
女神様のぬいぐるみ 118
種明かし 122
目標再確認 127
行動開始 130
魔王の伴侶？ 133
勇者のお仕事 138
新たな魔法（？） 143
メイドの嗜み 147
侍女のお茶会 151
『真実』との出会い 157
エイリは苦労が止まらない！ 162
プレゼントはあなたに?? 165

メイドの誕生

小鳥の囀りがどこからか聞こえてくる気持ちの良い朝。　思わず二度寝してしまいそうなほどポカポカとした、そんな気候の中僕は豪華に装飾されたとある扉の前に立っていた。

「失礼します！」

軽くノックしてドアを開ける。

目に映るのはシーツをぐちゃぐちゃにして眠っている男。その男に隠し持ったナイフが悟られないように近づき声をかけた。

「起きてください！　ご主人様！」

僕は笑顔で、未だ起きることの無いご主人様に向けて隠したナイフを振り下ろすのであった。

―――

この世界には、二つの区域に分けられている。　一つは人間達が生活する『人間界』。　もう一つは僕達魔物が生活する『魔界』。

ここは、そんな魔界にある魔王城の最深部。

その最奥、玉座の間にて金属と金属とがぶつかり合う耳障りな音が鳴り響く。

『お任せ下さい！　闇を払え！　破邪の光！』

青髪の聖女が聖魔法を放つと、眩い雷鳴が迸り、僕を守護する闇のオーラを消していく。

『小癪な！　』

剣で聖女を牽制しながら叫ぶ。

僕は魔王、ゴブリンやスケルトンなどを統べる魔物の王。　彼らの庇護者である。

そして今、僕は魔王城に乗り込んだ勇者パーティと最終決戦に臨んでいる。

『炎獄よ！　舞踊れ！　ファイアーグラウンド！』

防御の要、闇のオーラが消えた今が好機とばかりに桃色髪の魔法使いの払った炎の檻が動きを制約するように纏わり付く。

『正義執行（ジャスティスセイバー）！』

動きが制約され、動けない僕に金髪の少年が聖霧を纏った剣を振り下ろす。
守るのは不可能と判断し、得意技の影移動で少年の背後を取った。
『ちっ??』
そのまま首を撥ねんと払った剣も聖霧によって阻まれる。
振り向いた少年が、剣を再び振り下ろす。
それも再び影移動で回避する??
こんな状況がもう長く続いている。
『ええい！　魔王！いい加減に滅びやがれ！　』
痺れを切らしたのだろうか、その少年が声を荒らげて叫ぶ。
確か彼は自分のことを勇者と名乗っていた。
言葉通りかなり強い力を持ってはいるが、精神は子供のままである。
しかしながら??。
何故こんな状況に陥っているか、僕には納得が行かなかった。
人間たちが言うには魔物（ぼくたち）が彼らのテリトリーを侵害したらしいが??。
そんな事はありえない。僕の魔物たちの統率は完璧でトラブルを防ぐために魔界から人間界に渡るすべを制限し、人間界に渡った魔物も把握している。
それなのに人間たちはやって来た。
一方的に魔界の魔物たちを蹂躙し、魔領へ乗り込んできた。
無論、同胞を殺した人間たちを我らが許すはずがない。そうして、始まったのが魔物と人類の矜恃をかけた大戦争、『人魔大戦争』だ。
人類は基本的に、魔物に比べて生まれつきの魔力がほとんどない。その点で大きく勝っていた魔王軍は当初、優勢であった。
しかしある日を境に、形成は逆転した。　女神の寵愛を受けた人間がその力を借りて『聖法気』なるものを開発したのだ。『聖法気』は、僕たち魔物に対して最大の効力を発揮し毒となる。
その力を使った魔法『聖魔法』に対抗できず、魔王軍は一気に劣勢となり多くの屍が重ねられることとなった。

――散っていった同胞達のためにも、僕は負ける訳にはいかないのだ。
『落ち着きなさい、ヴァーチェ。　頭に血が上ったままだと??死ぬわよ?』
桃色髪の魔法使いがヴァーチェと呼ばれた勇者を諭す。余計なことを、と僕は思った。
勇者が冷静さを失ってくれることを狙っていたのだが??どうやら読まれていたようだ。
そもそも、彼女さえいなければもっと楽に戦うことができたはずである。
彼女はおおよそ人間とは思えない程の魔力を持ち合わせている。その魔力での魔法で僕の動きを制約してくるのだ。
『でも、ヴァーチェさんのおっしゃることも分かります。　流石にそろそろ鬱陶しいです。　魔物は滅するべし、早くトドメを刺しましょう！　』
今度は青髪の聖女が呼びかけた。
彼女の目には明らかな憎悪の色が伺える。
しかし、彼らは玉座にたどり着くまで多くの戦いを乗り越えてきている。
だから既に満身創痍のはず??このまま戦いが長引けば勝つのは僕である。
『おう！　ハマルが言うならやってやる！　おい魔王！　俺様と一騎打ちしやがれ！』
そう言ってヴァーチェが前に出る。本当に一騎打ちで決めるつもりなのだろうか。
なぜ????その問いに対する答えはすぐに分かった。　勇者が思い切り剣を振れる状況を作りたいのだろう。
彼は仲間との連携が苦手なようで、先程から窮屈そうに戦っていた。
本気の彼と戦うのは多少リスクがあるが????
これは、チャンスだ。

ヴァーチェという前衛を失えば残るは近接戦闘が苦手な女２人。
余裕で勝つことが出来る。
『いいだろう。僕が??魔王ヴァイスが相手だ。　行くぞ！』
言うが早いか、僕は剣を抜き打った。
――ギンッ！
それに反応したヴァーチェが立てた剣と僕の剣が噛み合い、喧しい音を立てる。
『甘いぜ！　喰らえ魔王！　正義執行（ジャスティスセイバー）！』
一撃を防いだヴァーチェは今がチャンスとばかりに切り札の正義執行（ジャスティスセイバー）を使用した。
ヴァーチェの周りに霧が立ち込めた。
この技術（スキル）はかなりまずい。
あの霧にはそれぞれに魔を滅する効果がある。いくら魔王といえど、長く喰らえばその命はない。
『魔剣解放（ブラッドセイバー）！』
負けじとこちらも切り札を切る。
辺りに闇のオーラが立ち込めた。
このオーラに長く触れていると、魔力の低い人間は滅びてしまうことであろう。
長く戦えば、まだ余力のある僕が勝つはずだ。
――だからここでヴァーチェが取るのは??
ヴァーチェは剣を水平に突き出す深めの構え、刺突の構えをとった。精神は子どもだが、勝負どころの嗅覚は持っているようだ。
その顔からも伺えるようにこれで決めるつもりだろう。
『どうした来ないのか？　それとも臆したのか？』
僕は余裕の表情で勇者を挑発した。
言葉とは裏腹に油断なく愛剣、『災厄（ディザスター）』を構え勇者の動きをしっかりと観察する。
勇者の持つ『勇者の剣』は、女神の力によって作られた神剣だ。
普通の剣ならば、打ち合った瞬間に粉々に砕かれてしまうことだろう。

しかし、『災厄（ディザスター）』なら大丈夫だ。　今は亡きものとなった配下が、僕の魔力の波長に適合するように作られた剣は魔物達の想いが詰まった魔剣。　負けることはないという自信がある。
瞬間、ヴァーチェが動いた。
視認できない程の速さで、刺突が迫る。僕はヴァーチェの視線から読み取った刺突の場所から飛び退いた。
完全な回避は不可能で、聖霧によるダメージは食らったが関係ない。
ガラ空きとなったヴァーチェの背に向けて一刀を振るう??それでも恐るべき反応速度でヴァーチェは防ごうと剣を背中へと回す。

――かかった！

内心ほくそ笑んだ。これはフェイント、本命はこっちだ。
影移動でヴァーチェの背後を取る。
『さらばだ、勇者ヴァーチェ！　』
渾身の一撃をヴァイスの脳天目掛けて振り下ろす。
――グシャ
耳に届くは、肉を切り裂く音。
それは、勇者の肉を切り裂いたものでは無い。
『なん??だと??』
僕の視界には、腹から生えた氷塊が映っている。
『ふぅ??危なかったわね。　魔王。　あなた????意外に素直な性格だったのね。　私たちが折角の数の有利を捨てるわけがないじゃない』
桃髪の魔法使いが歩み寄り、クスクスと笑う。
今更僕は、自分の失態を悟った。勇者の性格から、正々堂々来ると思い込んでいた。
勿論、油断していた訳ではない。
ただ、トドメを刺す瞬間に詰めを怠ったのだ。
『お??のれ』
『あら？　まだ息があったのね？　まぁもう持たな??』

上から突然の衝撃を加えられ魔法使いの声が途中で聞こえなくなった。
『さっさと滅びろ！　外道が！　お前さえ??お前さえいなければ！』
ハマルと呼ばれた聖女に踏みつけられる。
未だかつて向けられたことの無いような憎悪に、僕は久しく感じていなかった感情に出会った。
――その名は、屈辱。
悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい！
それなのに??
何も出来ない自分の無力さにただ震えていた。
『あれ？　もう諦めちゃうの？』
『??!』
途端に声がした。女の声だ。
『聞こえてるんなら何か反応が欲しいね??まぁいいや。君、ここで諦めるの？　あんな少女にバカにされたまま終わっていいの？』
『??ッ！』
『もし君が望むのなら、力を分けてあげても良いんだけどなぁ。』
女の声はどこか楽しそうだ。
どうやらこの状況を楽しんでいるらしい。
『もし生きたいと、彼らに復讐したいと願うなら私があげた力を使うといいよ。まぁその先にあるのは修羅の道だけど??じゃね、魔王様♡』
不思議と身体中に力がみなぎった。
あの女が言っていたことは事実のようだ。
修羅の道？　知ったことか。
僕は奴らに復讐を果たす。
『??ッ??キャア！』
思うがままにハマルを吹き飛ばます。
憎まれる対象。　自分を見下す対象。
それさえいれば、僕は幾らでも強くなれる気がした。
『未来（フューチャー）　同調（コネクション）！』

僕は全身の力を振り絞り、何故かあらかじめ知っていた魔法を行使した。

『なっ??コレは！　この魔法は！』

魔法使いはその正体に気がついたようだが??もう遅い。

『では、しばしの別れだ！　勇者どもよ！　』

魔王、身体を手に入れます

本日は晴天なり??
??よし、大丈夫だな。
視界は良好だし、どうやら上手く未来に到着できたようだ。
しかしながら、今の僕には少しばかり問題がある。
身体がないのだ！
うーん。死体とかあれば良いんだがなぁ。
何とも難しい問題だ。
流石に霊体のまま過ごす訳にはいかないしなぁ。

とりあえず僕は、身体を求めて行動することにした。
??ない。
ないのだ。
簡単に身体が見つからない！
適当にそこら辺の人間に憑依出来たら楽なのだが、そういう訳にはいかない。
憑依するには、いくつかの条件を満たす必要がある。
1．身体の持ち主の意思で動かすことが不可能な身体であること。
2．身体の持ち主が憑依されることに了承していること。
この二つだ。
二つ目については、魔力で反抗を押さえつけるという方法も存在するが??一つ目のことを考えると死体が適任である。
「ふふふっお困りのようだね～魔王様♡」
突如として、鈴のような美しい声が聞こえた。
振り返り、驚いた。
「あらあら？　忘れちゃったのかな～あんなに助けてあげたのに??」
そこに立っていたのは、黒髪黒目の魔性の女で会った。
「あっ??」
驚きのあまり声が出ない。
「むーもうちょっと反応して欲しいけど??その表情を見るに、覚えて

くれてはいるようだねぇ。でも～そろそろ何か言ってくれてもいいんじゃない？」
「??あぁ、すまない。少し驚いただけだ。」
　忘れるわけが無い。彼女の声、それはあの魔王城で聞いた謎の声と同じものだった。
「??それで、君はどうして僕を助けてくれたんだい？　その姿を見るからに、僕の味方をするような奴では無さそうだが??」
　彼女は辺りに溶け込むような、決して派手でない美貌の持ち主であった。
　それでも彼女には、普通の人間にはありえないものを持っていた。
　――背中から生える二対の羽。
　それが彼女が天界の住人であることを示す何よりの証拠だった。
　そして、彼女は僕の質問に少し考える素振りを見せたあと、指を口元に当てながらウインクをして??
「う～ん？　面白そうだから、かな？」
「んなっ」
　面食らってしまった。
「でも、貴殿は天界の住人だろ？　簡単にそんなことして大丈夫なのですか？」
「あ！　それは大丈夫だよ～だって私、天界で一番偉いですから～」
　再び面食らってしまった。
　まさか彼女が天界のトップ。　女神とは??
「それで??どうして僕の前に姿を表されたのですか？」
「あれ？　私の正体を知っても怯えないんだね～私、君より余裕で強いよ～？」
「ッ??!」
　全身が仰け反り、本能的に後ろに下がりたくなる。
　彼女がその力を解放したのだ。
　実力が違いすぎる??
「ハハッ冗談だよ～。自分から呼んでおいて始末するなんて無駄なことしないよ～」

一瞬で威圧感が嘘のように消え去り、能天気な声が聞こえた。
それでも、話の内容がマトモに入ってこない
まさに生きた心地がしないと言うやつだ。
「それで、貴殿の名前は何と？」
「あれ？　言ってなかったね～。　私はサヤ～。」
「サヤ殿か??以後、お見知り置きを」
「う～んなんだかなぁ??。そうだ！　私のことサヤって呼んででいいよ！　あと敬語も無しでいいから！　ヴァイスくん！」
ぬ??先程まで魔王様だったのに、いつの間にかヴァイスくんになっている。
「あっそ～だ！　本題なんだけど～！　ヴァイス君って今、身体無いよね～。こっちから呼んどいてそれは無いかなーって思って～身体用意してあげたよ～！」
「??!　それは本当か！」
僕が食いついた次の瞬間。
彼女がパチンと指を鳴らし、眩い光が放たれる。
目の前には、たくさんの身体が用意されていた。
「この中から好きに選んでいいよ！」
「では、ありがたく??」
そう言って用意された身体を物色し始める。

――――数分後
??うーん
僕は今、とても悩んでいる。
端的に言うと身体は見つかった。
しかも『読心』というなかなか優秀なスキル持ちだ。
これだけならとても優良物件なのだが悲しいかな、現実はそう甘くない。
この身体の性別??女性なのだ。
僕は男であったため、今更、性別を変更するのには抵抗があった。

というか??根本的な問題があるのだ。
サヤが用意した身体??女しかいないのだ。
絶対に謀られた！

??長い考慮の末、僕は覚悟を決めた。
僕はこの身体に決める！
「ヴァイスくーん！　身体決めた～？」
タイミングよく、サヤが声をかけてくる。
「ああ。　??これに決めるよ」
「ほうほう、その子を選んだんだね～。女の子だけど」
「仕方ないだろ、全員女だったんだから」
「ありりゃバレちゃった☆」
サヤは舌を出しながら、ウインクした。
内心イラッとしたがそれを表には出さない。
「んじゃ魔法かけるから～ホントにその子でいいんだね～」
僕は無言で頷く。
すぐにサヤの周囲に魔力が立ち込め、それが僕と彼女をかこう。
身体憑依の魔法だ。
身体に残り、長い時間をかけて輪廻の輪へと還る魂が反抗するがそれすらも魔力で黙らせる。
??成功だ。
改めて僕は魔法で自分の新しい姿を確認する。
首の下ほどまで伸びた黒髪と青色の瞳を持った幼さを残しながらも美しい少女が映る。
「おぉー！　なかなか美少女だね～」
「ありがとう、サヤ！　では、僕はこれで??」
そう言って立ち去ろうとして??
あることを思い出した。
「そういえば??どうやって過去の世界に戻ればいいんだ？」
身体を手に入れることができたが過去の世界に戻る方法が分からなければ結局、復讐することは出来ない。

振り向くと彼女は胸を張り、偉そうにふんぞり返っていた。
「お！　いい所に気がついたねぇ」
彼女はニヤニヤしながら腰ほどまである長い黒髪をいじる。
??それ以上彼女が口を開く気配はない。
「??それで、どうすればいいんだ？」
痺れを切らした僕はサヤに問う。
「ど～しよっかなぁ。　教えてあげようかなぁ？」
「いいから教えろ」
のらりくらりとする彼女に苛立ちを覚え、気がついたら胸ぐらを掴んでいた。
「はぁ??」
彼女が息を吐く。
その表情からは何を考えているのか上手く読み取ることができない。
呆れているのだろうか？　あるいは????
冷静になった僕はすぐさま胸ぐらから手を離した。
そして、先程の自分の行動を後悔する。
彼女は、今の僕より圧倒的に強い。　そんな彼女に本気を出されてしまうとすぐに倒されてしまうだろう。
もし彼女が怒っていたとしたら????僕はここで処分される可能性だって十二分に有り得るのだ。
ゴクリ。　僕は固唾を飲んで先程よりも顔を赤く染めたサヤを見つめるのであった。
そして??彼女が口を開く。
「??はぁ。　ヴァイスくんったら大胆！」
その口から漏れたのは、ひどく色っぽい吐息であった。
「は？」
唐突すぎてイマイチ理解できない。
「私、今までそんなにグイグイ来られたこと無かったんだよねぇ。こうやってされるのも悪くない！」
彼女は胸ぐらを掴まれる、という行為を気に入っていたのだ。

よく分からないが、怒っていないのなら助かった。
「よし！　特別に教えてあげようか。過去に戻る方法、??それはねぇ」
えらくご満悦な顔でサヤが胸を張って宣言する。
そんなに良かったのだろうか？
僕は無言でその方法を逃さないよう聞き耳を立てる。
「王都マグノリアの現国王様の暗殺だよ！」
――国王の暗殺？
「はぁ。　どうしてそれで過去に帰れるんだ？」
二つの事象に関連性が見られないため、その理由を問い返す。
「え～っとねぇ。暗殺すること自体はなんの意味もないんだ！　でも、王都マグノリアの王城にある図書館には過去に戻る方法が記されているらしくてねぇ。　それを見れる人が王様の血縁者か、王様を殺した人らしいんだ。　だから、だよ！」
「なるほど分かった。　あと一つ質問だ。　僕を過去に戻すことにおいて君にどんな利点があるんだ？」
納得はしたが、さらなる疑問が生まれる。
僕が王を殺したところでなんの利点が彼女にあるのだろうか。
さすがに、面白そうだから、という理由ではないだろう。
「それが私の為にもなるから、と言っても納得しないよね。うーん??あんまり言えないんだけど、このままじゃこの世界は滅ぶの。　だから何かを変える必要がある。　私はこの世界を残したいからね。
一応言っとくけど、君に拒否権はないよ」
「だったら僕じゃなくても??」
素直に思った言葉を口に出した。
「え～、君が適任なんだけどなぁ～」
その時、サヤが意地悪くニヤッと笑い、言った。
「だって??その王様って君と戦った勇者の末裔だったりするんだよねぇ」
「なんだって？」
「それに私もそのうち手伝いにいってあげるよ！」
勇者の末裔??。

そいつを殺せば、憎き奴らに復讐する機会すらも得ることができる??。

これでもかという好待遇に僕は内心ほくそ笑んだ。

「分かった。やろう！」

「いい返事だ！　では、ヴァイス君！　君に任務を与える！　王城に侵入して国王を暗殺しろ！」

新たなる協力者

「はぁはぁ??」
身体中から汗が噴き出す。
「迷ってしまったなぁ」
おかしい????サヤから貰った地図どおりに進んでいるはずなのに??。
僕は、サヤから国王暗殺の命を受けたあと必要最低限の物だけを急ごしらえで用意して王都に向けて旅立った。
本来なら到着している時間帯なのだが??一向に着く気配がない。
これは、あの駄女神（サヤ）が間違えたとしか考えられない。
「さてさて??」
恨み節ばっかり言っても仕方ないのでこの後どうするか、そう思案する。
持ってきた食料も残り僅か、オマケに森の中には魔獣、と呼ばれる存在がいる。
道を行く途中に何度も倒してきたが油断は禁物だ。　うかつには眠れない。
「炎柱（ファイア）」
周囲の枝を適当に集め、魔法で焚き火を作る。
この世界でも魔王時代に使えた魔法は使えるようだ。
おそらくコツが分かっていて、魔力があれば身体が違っても魔法を使えるのだろう。
「とりあえず、今日はここで野宿だな」
辺りも暗くなってきて来たので、今日はここまでとする。
持ってきたカバンの中から僅かな携帯食料を取り出し、かじる。
「不味い??」
この携帯食、長持ちする事のみが利点で全く美味しくないのだ。
魔王時代には決して食べることのなかった質素な食事だ。
固くて味のしない携帯食を何とか押し込んで、僕は腰を下ろした。
うーん??これからどうするかなァ。
はっきりいって目処が立たない??

「ん？　これは??」
―香ばしいいい匂いだ。
匂いのする方に寄ってみると、何やらパチパチと焚き火の音が聞こえる。
覗いてみると、何やら男たちが美味しそうな料理を食べているではないか??
思わずそちらに足が伸びたが、人間に物乞いをするなどあってはならないのだ。
クッ??さらば料理よ！
覚悟を決めて、料理との決別を果たそうとする。
――ぐぅぅぅ
静寂を切り裂く、腹の音が鳴り響いた。
言うまでもないが僕のものだ。
「誰だ！」
当然のように男たちに気づかれてしまった。
彼らは、油断なく剣を構えて警戒してくる。
仕方ないので、敵意が無いことを示しながら出ていくことにした。
「まぁ落ち着け??てください。　敵ではありません」
両手を上げながら、出ていった。
「人間の??女？」
「油断するな！　悪魔が擬態しているだけかもしれない！」
「それもそうだな！　おいお前！　さっさとここから立ち去りな！」
男たちが騒ぎ出した。
いくら女の子でも、出方が出方だと友好的にはして貰ようだ。
しかし、それより気になることが1つあった。
悪魔が擬態？　確かに奴らは擬態が得意だったが、人間に恐れられるほど強い奴らでは無かったはず??
これは、調べてみる必要がありそうだな。
とりあえず、ここにいても良いことは無さそうだし、戻るか??
そう思って彼らに背を向け、足を踏み出した時だった。
「おいお前たち！　何をしているんだ！」

奥から別の男の声がした。
声の主は、贅肉まみれの腹で腹部を固めた男であった。
「エイリさん??」
男たちがエイリと呼ばれた男に振り返る。
「何が悪魔だ！　こんな少女がそんな訳ないだろう！お前たちは、お腹を空かせている子供に何もせずに追い返す奴らなのか？」
エイリが声を荒らげた。
そう、僕は悪魔などでは無いのだ。
??魔王ではあるけど。
「ほら嬢ちゃん、コッチに来なさい」
エイリは僕を招き、焚き火の前に座らせ、暖かい料理を出してくれた。
見た目は少しあれだが??悪い奴では無さそうだ。
勿論、油断は出来ないがな。
「なんで君のような少女がここにいるのかは知らないが安心しなさい。私が責任をもって王都まで送り届けてあげよう」
僕は罠を警戒して料理を食べるのを渋ったが、エイリがしつこく迫ってくるので、他の男達が食べ始めたのを見て、料理を口に運んだ。
僕はこの世界に来て初めて、美味しいと思える料理を口にした。
「??ケッ！」
男たちは心底気に食わない様子だったがそんな事は関係ないとばかりに無視を決め込むことにした。
翌日、エイリは近くにあった集落に立ち寄り、魔道車を借りた。
なんでも彼は、王都で名のある骨董商人らしい。
ここに来ていたのは、商談で集落を巡る途中だったからしい。
「その??よろしいのですか？　まだその旅は終わっていないのでしょう？」
ここまでの好待遇には、何かしら裏がある。
そう考えての質問だったのだが??。
「私はね??。　孤児だったんだよ。子供の頃に親に捨てられてね。だから、君のような子を見捨てられ無かったんだ。　もちろん、信じて

くれなくても構わない。けど、私は君を王都に送るよ」
その真っ直ぐな瞳で見つめられて、何も言えなくなってしまった。
（これは、エイリさんだな。）
その日から僕の中でエイリがエイリさんに変わったのであった。

うーん！　風が心地よい！
なかなかに魔道車の旅は気持ちのいいものである。
気になる事と言えば、傭兵たちの僕に対する態度だが??。
僕やエイリさんに対して、邪魔な物を排除したがるような目をしているのだ。
まぁ見るからにガラが悪そうだし??。
気にしてもしょうがないだろう。
ここから1週間ほど森を進めば王都に着くらしい。
流石にタダで乗せてもらうのは悪い気がしたので、僕はエイリさんの暇つぶしの話し相手を積極的に務めた。
「そうか??嬢ちゃんはあの、調和国家プライトローズの住人だったのか」
「はい、それである日ロゼリアが焼け落ちて??」
怪しまれないように彼女の記憶を辿って、ここに来るまでのことを話すようにした。
「なるほど、状況は分かった。　最後にひとついいかな?」
「大丈夫ですよ?」
「嬢ちゃんの名前って何かな?」
「名前??ですか」
ヴァイス??と答えそうになって何とか留まった。
危ない危ない??
「言いたくなかったら大丈夫だよ?」
変に間が空いてしまったためエイリが心配そうに声をかけた。
僕は、サヤに付けてもらった偽名を思い出し、それを口に出す。
「セリカ??私の名前はセリカです!」
ふぅ??何とか違和感なく答えられた。

そういえば、セリカって名前聞いたことあるなぁ??なんの名前だったかな？

「セリカ。　いい名前だね。　昔の勇者様と一緒に戦った女神様と同じだ」

頭に衝撃が走った。

セリカ??そうだ。

この名前は、僕の時代に存在したあの忌々しい女神の名前だった。

一刻も早く改名したいがしかし??名乗ってしまった手前すぐに変える訳にはいかない。

僕の頭には、こちらを嘲笑うサヤの像が想像されていた。

その日から、僕はヴァイス改めセリカとなったのだった。

魔眼解放

魔道車の一角、骨董品の置き場にてガサガサと音が聞こえる。
音の中心では、骨董品が散乱している。
――その中心、僕は魔道車の広さに感心しながら本を読む。
事実、この魔道車はかなり広い。
どれくらいかと言うと、僕とエイリさん、傭兵3人に1人づつ部屋を与えても余る程、と言えば分かってもらえるだろう。

「セリカちゃん、明日には王都に着くから。その??なんと言うかそこ片付けといてね」
「あぁ??すいません」
うんまぁ流石にそろそろ言われるだろうとは思ってた。
僕はエイリさんに助けられて以来、暇を見つけてはエイリさんの持ってきた骨董品を見せてもらっていた。
そして一昨日！　探し求めていた歴史書を発見したのだった。この世界を全く知らない僕にとって歴史書はさながら聖典のようだった。
読みふけてしまったのも納得してもらえるだろう。
どうやらこの世界にはゴブリンやスケルトンなどの魔物がほとんどいなくなってしまったらしい。
もちろん、一部の魔物はしぶとく生き残っているらしいその代表例が悪魔だ。
悪魔は５００年前き魔王である僕が滅んで以来、しばらく息を潜めていたらしいが、１００年ほど前に大量に増加したちまち人間界に領地を拡大していったらしい。
しかし悪魔か??。
魔王時代の悪魔は狡猾だが大した力がない弱小種族だったのだ。そんな奴らが現在の世界の覇者だとは信じられない気持ちが大きい。
それともう一つ、魔術書を見つけた。
その中にはこの世界の魔力や魔法の仕組みについて事細かに書か

れていた。
？魔力、聖法気は訓練を積むことで使えるようになる。
？この世界に存在する魔法は基本的に、魔力を媒体として放つ「魔法」と聖法気を媒体として放つ「聖魔法」の二種類。
？どれだけ訓練を積んだとしても魔力、聖法気の大きさは共に生まれつき決まっている総量以上にはならない。
僕のいた過去の世界と変わったことは特には見られなかった。
――ただ一つの頁（ページ）を除いて。
その題名は『力の質について』
曰く　魔力、聖法気にはそれぞれその人だけの〝質〟があるらしい。
その判明のおかげで自分の魔力の質を覚えさせることでその人以外開けることができない扉などが誕生し、技術が大きく発展したらしい。
――まぁどうでもいいことだが。
感傷も程々に本格的に片付けを始めようかとしたその時だった。
魔導車がその動きを急に泊めたのだ。そのせいで大きく転倒してしまった。
「いてて??なんだ？」
起き上がって窓から辺りを確認した。
いつの間にか夜となっていてよく見えないが森の中だと言う事は分かる。
王都に着いた訳でも無さそうだな??
「さっさとこっちに来い！」
ん？　何か声が聞こえたな。
声のした方を注視してみる。
「お前たち??裏切ったのか？」
「へへっ！　馬鹿だなおっさん！　あんな財宝を俺たち傭兵の前に置いておくなんてよォ」
「あのセリカとか言う女は??骨董品のところか。あんなガラクタに興味があるなんて変なやつだな。」

「私はどうなってもいい！　だからあの子だけは……頼む！」
「うるせぇな！　あの女は美味しく頂くに決まってんだろ。
」
??どうやらエイリさんの雇った傭兵たちが裏切ったらしい。
（そうか！）
そう考えると彼らの今までの行動にすべて納得できた。
――傭兵たちのあの目線は、盗みを働くのに邪魔な僕を忌々しく思ってのものだったのか！
後悔したところで時すでに遅し。
うーん??どうするか。
結論から言って傭兵たちを倒すのは簡単だ。
ただ、それをした場合僕の正体が知れてしまう可能性がある。
確かにエイリさんには恩義を感じているが??。
誰しも、自分の身の方が可愛いのだ。
??逃げるか。
エイリさんに背を向けて窓から外に出ようとしたその時だった。
「黙れ！　あの子はなぁ！　お前たちのような下種の手で汚していい子じゃないんだ！　故郷を失い、親を失い、それでも前を向いて生きているんだ！」
誰かに大切に思われ、守られること。
今までにあっただろうか？
今まで、敬れ恐れられるだけの存在だったこの僕に
「うるせぇなお前。　もう死ねよ！」
エイリさんに向けて剣が振り下ろされる。
しかし、次の瞬間その男は地に伏していた。
「気が変わった」
僕は、倒した男を踏みつけながら他の男を睨む。
「んな！　テメェは！」
「嘘だろ??リーダーが」
狼狽える傭兵たちを尻目にエイリさんの方へ向かった。
「大丈夫ですか？」

エイリさんに歩み寄りながら問うた。
「あっ??あぁ」
差し出した手を取りながら立ち上がったエイリさんの目には明らかに恐怖の色が伺えた。
「少しだけ待っていてくださいね」
だから僕は、その恐怖をほぐすようにニッコリと笑いかけたのだった。
「おいセリカ！　てめぇ何しやがった!!」
そう言いながら傭兵のひとりが剣を振り下ろしてきた。
僕はそれを余裕もって躱す。
「まだ力の差が分からないのか、愚物が！」
そう言って心の中で念じる『魔眼解放（オープン）』と。
「うわぁぁぁ！」
「やめろ??やめろォ！」
一瞬にして大の大人たちが目の赤く染った少女に睨まれるだけで発狂し、失禁する地獄が展開された。
「お前たちに慈悲などない。上位者の名において命令する。『死ぬまで一生、そこから動くな』」
その囁き1つでの彼らの運命は決定した。
これが僕の元々の能力『魔眼解放』目に宿した魔力を相手に送り込む。それだけの能力だ。
しかし、その権能は強大で格下に対する絶対有利が例としてあげられる。
赤目に睨まれた格下はその瞬間生殺与奪の権を握られる。
阿鼻叫喚の光景を背に、僕はエイリさんと魔道車に乗り込もうとした。
「あの??セリカちゃん。　あの力は??」
うーん、やっぱり聞かれるよなぁ。
そうだ！
僕は浮かんだ作戦を履行するべく口元に指を近づけた。
「乙女には秘密の一つや二つはあるものです。　それを聞くのは無粋

というものですよ？」
ウインクしながらそう言った。
うん、我ながらなかなか??。
エイリさんもドギマギした様子で、あっあぁ、と言っていたし問題ないだろう。
傭兵(ゴ)たち(ミ)を下ろして魔道車は再び走り出した。
それに近づく巨大な影に気づかないまま??

一難去ってまた一難

傭兵(ゴミ)たちを下ろしたあと、これといった問題も無く魔道車は再び動き出した。

強いていえば、傭兵たちの生命反応が消えたことが気がかりだったが??。

この森、夜には強い魔獣と呼ばれる存在が徘徊するらしいし??その辺にでも食べられたのだろう。

「セリカちゃん！　もう少しで王都に着くよ～」

物思いにふけっていたところエイリさんが声をかけられる。

どうやら、この森林だらけの景色ともやっとオサラバできるようだ。

やれやれと思いつつ、僕はいつもの場所で骨董品を漁る。

エイリさんとの約束でこの中のうち好きな1つを貰うことになっているのだ。

何でも、命の恩人に恩を返しすぎる、なんて事はないらしく、僕にメイドになるという目標がなければ本気で自分の財産を与えるつもりだったらしい。

それはそうとして、

流石にそろそろどれを貰うか決めないと??。

――パン

何かが弾ける音がしたかと思えば魔道車が急にその動きを止めた。

――敵襲？

「ん？　パンクか。すまないねセリカちゃん。タイヤ交換するからちょっと待っててくれ」

――ぱんく？

ぱんく、と言うのはよく分からないがエイリさんの口ぶりからするに、よくある事なのだろう。

物置からゴムの輪っかの様なものを取り出している。

「良かった??敵じゃなかったんですね」

とりあえず、敵襲でなかったようで安堵する。

「ハハッ、セリカちゃんの実力なら恐れることもないと思うけどねぇ。」
冗談めいた声色でエイリさんが話しかけてくる。
ゴム輪っかを持ってドアを方へ向かっているところを見るに外で何か作業をするのだろう。
「まぁ??そうかもしれないです??エイリさん！　そこから動かないで！」
僕は何かを感じた自分を信じて、エイリさんに静止を呼びかけた。
そう呼びかけた瞬間、上から押し潰されるような衝撃を受ける。
「なんだ、なんだ！」
エイリさんが叫ぶ。
「上から何か巨大な生物の襲撃を受けています。」
「上からだって？」
――ｇｒｒｒｒｒｒｒｒ
上からその生き物の鳴き声が聞こえる。
僕は聞いたことがなかったが、エイリさんは青ざめた顔をしているところから強い生物なのかもしれない。
「そんな??ドラゴンだ」
「ドラゴン？」
どこかで聞いたことがあるその名前を思い出そうとする。
えーっと??。
そうだ！　歴史書に書いてあった魔獣だ！
確か、大きな翼と炎を吐くことが特徴だったはず??。
「セリカちゃん？　セリカちゃんならドラゴン、倒せるかい？」
「倒せるか、倒せないかで言うと倒せると思います。」
「じゃあ！」
エイリさんの顔が希望に染まる。
「ただし、それは武器があればの話です。武器はありますか？」
今の僕は、なんの装備も持っていない。
歴史書によるとドラゴンは膨大な魔力による防壁を持っているらしい。

流石に武器が無いと勝つのは厳しいだろう。
「武器??こっちだ！」
そう言ってエイリさんが案内した場所は、僕が知っているものとは違う骨董品の置いてある場所だった。
「ここなら沢山武器が保管してある。　まともな物が見つかるかもしれない。」
そう言ってエイリさんは骨董品を漁り出し、剣やら槍やらを取り出す。
僕もそれに習って漁ってみるが??
「うーん??これじゃあちょっと」
どれも武器としての質は良さそうだったが、古い物のため耐久性が無い。　正直言ってナマクラ揃いだ。
「ん？　これは??」
僕は、目に映った剣のようなものをとる。
コレからは何か魅力のようなものを感じるな。
「エイリさん??これって？」
「あぁ??それは、人魔大戦争の時に魔王が使っていた剣らしい。本人以外使い物にならないそうだ??え？」
――ピカッ！
僕がそれを握った瞬間、それは眩い光を放った。

光が引いた後、僕の手には1振の剣が握られていた。
「これは??」
その剣、魔剣『災厄（ディザスター）』は、勇者との戦いの時と全く変わらぬ形でそこにあった。
――この剣ならいける。
僕はそう確信した。
そしてその剣を下げたまま、未だ僕を見つめたままのエイリさんを尻目に悠然とドアの方へと歩み寄った。

ドアを開け、僕達を捕食せんとする生物、ドラゴンを視界に捕える。
――腹が減った。
同じく僕を睨みつけたドラゴンが、そのような目をしていた。
「悪いが加減はしない、思いきりいくぞ！」
人知れずそう呟き、ドラゴンに向かって攻撃を仕掛けんと動く。
――スカッ
虚しく空を裂く音が聞こえる。
次の瞬間、僕はドラゴンに上空を取られていた。
――ｇｙｙｙａａａａａ！
咆哮と共にドラゴンの口から炎が放たれる。
「??ちっ。」
舌打ちしながら、僕は回避に専念する。
遅まきながら誤算に気がついたのだ。
――空を飛べない。
魔王の頃は、意識すれば羽を出すことが出来た。
しかし、今は人間、空を飛ぶすべがないのだ。
ただ、ドラゴンだって生物、無限に空を飛ぶことは不可能だ。
仮に翼に穴などを開けられれば、それだけで飛ぶことが出来なくなる。
――だから今は耐えるしかない。
ドラゴンの放った炎が森に燃え移り被害が拡大する。
「クソっ！　召喚（サモン）！」
水の精霊を召喚し、消火に専念させる。
このままでは埒が明かない。
まずは体制を整えないと??。
「あまり人に知られたくはないが??魔剣解放（ブラッドセイバー）。」
魔王時代の技術（アーツ）を行使し、災厄（ディザスター）に魔力を馴染ませ強化する。
残念ながら人間の体では耐えられないため、相手の視界を封じ、その感覚で自分の視界に頼らずとも全体を把握できるようになる技、魔霧は展開できない。

できるだけ秘匿したい技だが、状況も状況だから仕方ない。
「これで準備ばんた??くっ！」
準備を終え、構えようかとしたその時、一迅の風が僕の横を過ぎ、頬を大きく裂いた。
その痛みに思わず膝をついてしまう。
風の正体??ドラゴンだ。
僕はもう1つの誤算に気がついた。
ドラゴンの知能が予想以上に高かったのだ。
相手の手の届かない上空で炎を吐き牽制、隙を見せたところで急降下し、鋭い爪で仕留める。
とても理にかなった戦い方だ。
そして今、ドラゴンは僕の周りを囲うように炎を吐き出す。
周囲に炎が立ち込め、視界が奪われる。
ここで仕留めるつもりだろう。
――ｇｒｒｒｒｒｒｒｒ！
ドラゴンの威嚇する声が聞こえる。
そちらの方を向くと、今度は背後から再び声が聞こえた。
「くっ??小癪な！」
どこから来るか全く予想がつかない。
――ｇｒｒｒｒｒｒｒｒ！
突如、炎の檻の一角が口を開ける。
一迅の風が吹く。
その檻の中の僕に向けて、その鋭い爪が振るわれる。
――しかし、その爪が僕を切り裂くことはなかった。
――スパッ
何かを切り裂く音がした。
――ｇｙｙｙａａａａａ！
それまで低空飛行をしていたドラゴンが吠えたかと思うと翼に大きな穴を開け地に伏していた。
計画通り、と内心でほくそ笑む。
「さて、これで条件は対等だ。」

その赤目でドラゴンをしっかりと捉えながら、呟いた。

――――さぁ、反撃開始だ！

一難去ってまた一難②

「さぁ、これで条件は対等だ。」

地に伏すドラゴンは、自分に何が起きたか理解できていないようだった。

「今なら殺しはしない、だから退け!??ッチ！」

ドラゴンに『魔眼解放』の『絶対服従』を使おうとしたのだが、効かなかった。

ドラゴンが僕より格上の存在ということなのだ。

「どうするか??おっと！」

翼を失い、いい加減諦めたかと思ったのだが??ドラゴンは今まで以上に鋭い攻撃を仕掛けてくる。

――速い！

ギュオっと空気を薙ぐ音が耳元で聞こえる。

「思った以上に速いな！　??クソっ！」

僕は、ドラゴンの目を見て察した。

今まで獲物としてしか見ていなかった僕を敵として見ていることに????。

爪牙を一撃、二撃と回避してく??。

避けながら翼に穴を開けるために投擲した災厄（ディザスター）を回収しようと試みたが????ドラゴンの吐いた炎がそれを阻む。

どうやら狙いを悟られているようだ。

仕方ないので、魔法を使って災厄（ディザスター）を回収する。

正直、僕にも余裕はあまりない。

魔獣という、魔族に近しい存在だったから殺したくは無かったのだが??。

??そう思案している間にも鋭い攻撃が放たれ続ける。

先程からその攻撃が肌を掠めるようになってきた。

――相手も本気だ。

このままだとそう遠くない未来にやられてしまうだろう。

相手が僕の目を見ていない以上、『絶対服従』も使えない。

（まずい）
再び、ドラゴンは僕の周りに炎を吐く。
またあの技を出すつもりだろう。
（いや??大丈夫か。）
落ち着いて考えてみるとドラゴンは飛べない、突撃してくるのならば、足音で来る場所が分かるのだ。
しかし??ドラゴンは全く予想していなかった行動をとった。
何かが、上から落ちてくる――そんな気がした。
僕は、自分の感を信じて魔法障壁を展開した。
（グッ??あぁ！）
瞬間、上から膨大な質量を加えられ楽々と障壁が破られる。
吹き飛ばされながら僕は状況を確認する。
先程まで僕がいた場所にドラゴンが立っている。
（ドラゴンは飛べないはず??まさか！　??状況的にそうとしか考えられない。）
ドラゴンがとった行動は純粋な跳躍。
質量で僕を押し潰したのだ。
魔法障壁が間に合っていなかったら今のでやられていただろう。
――傷はかなり深い。頭がクラクラする。
それでも僕は、自分の不利を悟られないようにドラゴンに向かう。
「強化（ブースト）！」
底をつきかけている魔力で身体強化魔法を唱え、剣を構える。
「はぁぁぁ！　せい！」
そして、大きく1歩を踏み込む。
――スパッ！
剣が、ドラゴンの身体を切り裂く。
――ｇｙｙｙａａａａａ！
激昂したドラゴンが炎を吹き出す――
「遅い！」
影移動を使用、ドラゴンの背後をとる。
悲鳴をあげる体をも意思で黙らせ、対象を見失い、呆然としている

ドラゴンに剣を突き立てる。
――ｇｙｙｙａａａａａ！
「――グッ！」
本当にトドメを刺す気なのか、ドラゴンが今までとは比べ物にならない程の力を発揮する。
（ハァハァ??）
対して僕の体はもう限界である。
もはや、剣を地面に突き刺し膝をつかないように立っているのが精一杯で、剣を振るのは不可能だ。
そう、剣を振るのは。
――ｇｒｒｒｒｒｒｒｒ！　ｇｒｒｒｒｒｒｒｒ！
大きな咆哮をしたドラゴンの身が、炎に包まれる。
「切り札を切ったか??。　お前も死にたくなかったんだな」
誰に言う訳でもなく呟く。
その間にもドラゴンは、炎を纏った突進を敢行している。
滅ぼすべき対象を逃がさないように、その双眸で対象を捉えながら??。
――それが最期の欠片（ピース）だった。
『死ね。』
――それが、ドラゴンの聞いた、最後の音声となる。
上位者の命令を受け、ドラゴンは緩やかに崩壊を始める。
――ｇｙｙｙａａａａａ！
ドラゴンは必死に抵抗しようと、地面に爪を食い込ませて歯を食いしばるが、死神の鎌は無情にも音もなくその命を刈り取っていった。
――
戦いの後に残るのは、常に静寂のみ????。
なかなかに紙一重な戦いだった。
「早く??戻らないと。」
戦いで受けた傷はかなり深い。
早く戻って手当てを受けた方が良いだろう。
「やはり??かなり弱体化しているな。」

戦っている間にかなり離れてしまった魔道車に向かいながら今回の戦いを振り返ってみる。
「あんな小細工をしないと、絶対服従を使えないとは??。」
あのドラゴンは今の僕より格上の相手だった。
だから僕は、ドラゴンの防御に対する意識が最も低くなる瞬間。
つまり、攻撃する瞬間に練りに練った魔力での『絶対服従』を叩き込む、そんな裏技でドラゴンを倒したのだ。
「そもそも、あそこで剣を投擲したのが良くなかったのか?」
1人でブツブツと呟く。
「うーん。　??でも。」
そんな反省会をしている間に、魔道車の前に到着した。
――ここからは元魔王ヴァイスでは無く、セリカの時間だ。
ドアを開けて、中で待っている人物に呼びかけた。
「ただいま戻りました!　エイリさん!」

一難去ってまた一難③

「次の者、前に来い」
野太い衛兵の声がして、列が前え動く。
ここまで来ると、大分はっきり門が見えるようになってきた。
ここは関門、勇者の末裔がいるという王都マグノリアへの入り口だ。
「あと少しで入れそうですね～」
僕は隣の席の運転手、膨らんだ腹を持つ悪面の男。
エイリさんに何気なく声をかけた。
「うっ、うんそうだね。　セリカ??ちゃん。」
その返答は心なしかぎこちない。
――まぁ仕方ないな。
こうなっているのには理由がある。
――時は僕がドラゴンを討伐して魔道車に帰還した時に遡る。
「ただいま戻りました！　エイリさん！」
僕は、元気にドアを開けた。
「セリカ??ちゃん？」
中にいたエイリさんは、怯えたような顔でこちらを振り向いて??
「どうしたんだい！　そのケガ！」
血相を変えて叫んだ。
「えーっと??ドラゴンに??きゃ！」
??変な声が出てしまった。
エイリさんに急に手を引かれたのだ。
「ほら、早く手当てをしないと??」
そう言ってエイリさんは傷口に消毒をペタペタと付け出した。
正直、そんなに上手い手当てではないが??。
なんだか心が温まる気がした。
「これでよし！」
出血が止まり、傷口に包帯を巻いて手当ては終了した。
「ありがとうございます！　助かりました」

素直にお礼を述べた。
これで終わってくれれば楽なのだが??
「それで??その、ドラゴンは？　倒したのかい？」
うーん。　やはり聞かれたか??仕方ない。
「えーっと??倒しました」
顔色を伺いながら述べる。
見るからにエイリさんの顔が青くなっていくのが分かった。
「ドラゴンを??1人で、か」
遠い目をして、エイリさんが呟いた。
「その??あまり良くないことでしたか？」
恐る恐る聞いてみた。
「ドラゴンは本来、安全に討伐するために国家ぐるみで相手するような存在だよ。それを1人で倒すとは??」
何やら、ドラゴンはかなり強い存在だったらしい。
まぁ事実かなり強かったが。
「それにその剣??セリカちゃんの正体って??」
エイリさんがドラゴンの血に染った災厄（ディザスター）を見つめる。
コレは??バレてしまったな。

「そうです。　私が??もういいか。　僕が古の魔王ヴァイスだ」
演技もやめて、自分から正体を明かした。
もはや、エイリさんの表情は絶望一色に染まっている。
「ま、ま??魔王様。　こ、これまでの無礼な振る舞い、まことに失礼しました！」
エイリさんはいきなり土下座をした。
その勢いは、これまで多くの謝罪を受けてきた僕といえど、驚く程であった。
――余談だがこの状況、傍から見ると大男が少女にひれ伏しているおかしな状況だろう。
「え??あの。」
「私めの財産は、全て捧げますゆえ、何卒！　何卒、命だけは！」

エイリさんは完全に萎縮している。
こちらの話を聞く気配がない。
「面を上げよ??そして、『落ち着け』」
僕は、『絶対服従』を使ってエイリさんを落ち着かせる。
魔力が欠乏して、立ちくらみがする??。
「安心しろ、僕は君の命を奪うつもりは無い」
その言葉を聞いて、エイリさんの顔は明るくなる。
「そして、僕は君を尊敬している。　誰にも分け隔てなく接する君の人柄を高く評価している。　そこで提案だ。　僕の目的に協力してくれないかい？」
「目的??」
エイリさんは急にこちらをまっすぐと見つめた。
――これは、商売人の目だ。
エイリさんは、魔王である僕をビジネス相手と考えているのだ。
その根性??気に入った。
「その目的とは？」
エイリさんが問う。
僕は、ニッコリとして答えた。
「これから向かう王都マグノリアの国王。　勇者の末裔の暗殺だ」
エイリさんは、目をぱちくりさせてこちらを見た。
ここまでするとは、思っていなかったのだろう。
「どうして??どうしてそのようなことを？」
「あーそれはだな。僕の復讐、が主な理由なんだが。一応大義名分もある」
そうして僕は、エイリさんにサヤから受けた天啓について話した。
「なるほど??。そういう事なら協力しましょう。私めの持てる力、全て捧げますぞ、魔王様」
話を終えた途端、エイリさんは僕に協力すると言い出した。
コレは少し驚いた。
「こちらから誘っといてなんだが??いいのか？　孤児とはいえ、君の故郷はマグノリアだろ？　その国王を暗殺するんだぞ？」

「問題ありません。むしろこれは、マグノリアの為になるのです。今の国王は愚王ゆえ、このままでは国が滅びます」
キッパリとエイリさんは言った。
なるほど??愚王なのか。
コレは、サヤが僕に天啓を言い渡した理由が何となく分かった気がした。
「分かった。　これからよろしく頼む。　そして、これからの僕はセリカだ。　そして君はエイリさん。　先程までの関係に戻る。　だから、あまり私が魔王だってことを意識してはいけませんよ、エイリさん」
「分かりまし??分かった。　セリカちゃん。」
??と、このような成り行きでエイリさんと僕は協力関係になったのだ。
まぁ正体を明かしてから、何となくエイリさんの対応がぎこちなくなった気がするが。時間の問題だと割り切った。

―――

「次の者、前に来い」
衛兵が再び声をかける。
僕たちの番だ。
「要件は？　」
「取り引きからの帰りです」
「許可証は？」
「コチラに」
「よし、通れ」
あっさりと通された。
門が開き、そこに入る。
「それじゃあセリカちゃん。　また後で」
そう言ってエイリさんは、魔道車をどこかへ持っていった。
僕は、眼前にある大きな城を見据えて小さく呟いた。
「勇者め、首を洗って待っていろ」
その日、世界の運命を動かす小さな暴風がマグノリアの地に足を踏

み入れたのであった。

便利な道具

僕は、まだ見ぬ勇者暗殺のための行動を開始する。
「まずは知識を深めないとな」
そう呟いて歩き出した。
目指すは図書館。
エイリさんが言うには、この先に大きな図書館があるらしい。
この国、ひいてはこの世界について、僕はもっと知る必要があるのだ。
「ここを右に曲がって??っと」
この路地裏を通れば、中央通りに出ることができる。
そう思っていたのだが??
「??!」
後ろから感じる、こちらへの視線に気がついた。
ここからでもひしひしと感じるその魔力??。
その量は僕よりもはるかに多かった。
（これは??あのドラゴンより大きいかもしれない。）
動揺を隠しつつ、僕は路地裏の奥、行き止まりに向かった。
そして??
「何か用ですか？　お兄さん？」
こちらから声をかけた。
長い沈黙の後??
「バレていたのか??。おまえ、やるな」
何やら胡散臭い見た目の青年が出てきた。
「貴方??私にここで何をするつもりですか？」
そう問いかけるが、出る答えはある程度予想ができる。
――犯罪だ。
「ん？　何だったっけ？」
そう青年は答えた。
「は？」
思わぬ答えに間の抜けた声が出る。

「あーれ？　思い出せねぇな??」
　再び、僕に答える。
「そう言って??油断させるつもりですね？」
　僕は、剣を抜き構えた。
　こんな不審者は切り捨てるべきと判断したためだ。
「おいおい??あっそーだ思い出した。　その剣、しまっとけって言おうと思ったんだった。　この国でそんな物騒なもん持ち歩いてたら、騎士達にいちゃもんつけられるぞ??なんてったって??」
　――あいつらめんどくせぇからなぁ。
　そう言った気がしたが関係ない。
　僕は、剣を抜き打ち放った。
　しかし現実は、考えもしなかった方向に動いた。
「危ねぇって??。　おい、ここでやめとこうぜ。　お前の実力じゃあ俺も手加減できねぇからさぁ。　な？」
「??ッ！」
　僕の目に写ったのは、災厄（ディザスター）の一撃を易々と素手で受け止め、眠そうな目のまま立ち尽くしている青年の姿であった。
　――かなわない！
　そう判断した。
「失礼しました。　長旅で少々気が立っていたようです」
　剣を収めながら、謝罪の言葉を述べる。
　無論、僕にとって危険な男を放っておくはずが無く、虎視眈々と『絶対服従』発動の機会を狙っている。
「ん。　まぁいいや。　次から人の話をちゃんと聞くようにしろよ」
　そう言って青年は立ち去ろうとした。
　――が、すぐに振り向いて。
「そーだった。　これ、やるよ」
　青年は、何処からか取り出した鞘を僕に向かって投げた。
　それを、掴み受け取る。
「コレは???」

ただの鞘のように見えるが、何やら魔力で刻印がされている。
「それに魔力をこめ続けていれば、その鞘に入っているものの存在が隠蔽される??ふぁぁぁ眠い」
――じゃあな。
そう言い残して、青年は去っていく。
「ちょ??ちょっと待て！」
声をかけるが青年が振り向くことは無い。
『絶対服従』発動の魔力をこめ続けて、赤くなった瞳が哀愁を漂わせていた??
――
僕は、不思議な青年から貰った鞘に災厄（ディザスター）を入れ、魔力を込めた。
――消えている？
見た目にはよく分からなかったが、刻印から何やら術式が発動しているようなので、大丈夫だろう。
僕は不思議な青年について考えながら、中央通りに向かうのであった。

新たなる目的

「スーッ??ハッ！」
僕は、一瞬で意識を覚醒させ突っ伏していた机から起き上がった。
そんな僕を見る周囲の人からの視線が痛い。
「??寝てたのか」
僕の目の前には、大きく開かれた歴史書があった。
えーっと??どこまで読んだっけ？
そう思ってパラパラと本をめくるが??
長旅で疲れていたこともあり、なかなか集中できない。
「もういいか」
本をパタンと閉じて棚に返す。
ドアを開け、外に出た。
いつの間にか日が落ちかけ、夕暮れとなっていた。
「さて、そろそろ戻るかな」
僕は、エイリさんと約束した場所に向かうべく足を踏み出した。
??その時だった。
「オラッ！　直属騎士様のお通りだ」
??なんだ？
声のした方向を向くと、鎧を身にまとった男たちが偉そうに歩いてきた。
「おいおい、アイツら今日も来たのかよ??」
「国王様が変わられてからずっとこうね」
「あんなやつは国王じゃねぇよ。　クソが」
――ヒソヒソと話す声が聞こえる。
よく分からないがあまり良い状況では無いらしい。
面倒くさそうな相手なので、僕は無視することに決めた。
――が。
「おい、そこのお前！　お前だよ！　黒髪の女！」
男のひとりに声をかけられた。
1回はスルーしたのだが、そこまで特徴を言われては無視するわけ

にもいかない。
「何か用ですか？」
振り向きながら男たちに問いかけた。
「へへっ中々の上玉じゃねぇか」
また別の1人が僕の全身を舐め回すように見る。
「少し貧相な身体だが??。　なんてったって顔がいい」
そんなことを口走りながら、僕に近づいてくる。
――僕でも、流石にこれは寒気を感じた。
「だから、何ですか？　私、貴方たちのこと知らないんですけど」
少し、イライラしながら再び問いかける。
男たちは少し驚いたような顔をした後、笑いだした。
「ハハハハ、何だあんたよそ者かい。　じゃあ教えてやろう。　俺たちは王宮直属騎士、この国では騎士様には従わねぇといけねぇんだよ。」
王宮直属騎士か。
厄介な相手だ。
――あいつらめんどくせぇからな。
頭の中で、謎の青年が言っていた言葉が思い出された。
(??やるか。)
このままだとロクなことにならないので、力を少しだけ誇示することにした。
腰の剣に手をかける。
――その時だった。
「ちょっと待てって・・・　お前らの相手は俺だ」
気だるげな声がした。そちらの方を振り返るとそこにいたのは先程の青年。
「またお前か！　何度も俺達の邪魔しやがって！」
リーダーっぽい男が声を荒らげる。
「うるせぇって。　ソイツには、俺が先に目つけてんだから横取りすんな。」
そう言って青年は眠そうな目のまま構える。

――拳法の構えだ。
「やってやる！　野郎ども！」
リーダーっぽい男の一声で、他の男たちが剣を抜き、男に襲いかかった。
「お前たちってホントに学ばねぇな」
そう呟いた青年は、軽いステップでその攻撃を躱した。
そして、攻撃を外した男たちは勢い余って互いが互いに攻撃して、自滅していった。
「どうする？　まだやるか？」
気だるげな声のまま青年が残ったリーダーっぽい男に言った。
「??くそっ！　覚えてやがれ！」
男は、三下っぽい捨てゼリフを残して去っていった。
「うぉ！　兄ちゃんやるな！」
「スゴーイ！　つよーい！」
「アンタは英雄だよ！」
成り行きを見守っていた市民達が湧く。
しかし、青年は意に返した様子もなく、僕の方へ歩み寄った。
「??ありがとうございました。」
僕一人でも倒せたのに??とは言わなかった。
「な？　アイツらめんどくせぇっていったろ？」
青年は、面倒くさそんな口調で僕に言った。
「どうして貴方がここに？」
僕は、思っていたことを聞いた。
偶然にしては出来すぎている。
明らかに、この青年は僕を付けていたのだ。
「なんだ??尾行してたこと気づいてたのか？」
「いいえ、気づいてはいませんでした。　私が聞いているのは、そんなことをした理由です」
別に、尾行されたことは気づかなかった僕が悪い。
僕が聞きたいのは、その理由だ。
――理由？あぁ??

すると青年は、僕をキッパリと見て言った。
「お前に、国王の暗殺に協力して欲しい」

作戦準備

「お前に国王の暗殺に協力して欲しい」
青年は、真面目な顔でそう言った。
――国王を殺したい？
初めに思いついたのは、自分の本来の目的が悟られているのでは、という懸念だった。
だから僕は??
「えーっと??どうしてです？　確かにここの国王は愚王のようですが??私には関係ないのですよ？」
何も知らないかのように白を切ることにした。
その返答を聞いた青年の表情は途端に、先程までの面倒くさげな顔に変化した。
「えー。　頼むって！　お前しかいないんだよー」
唇を尖らせながら子どもの様に駄々をこね始めた。　大の大人が僕の服の端を引っ張りながら不平を述べるその姿に、周囲の人々からの痛々しい視線が容赦なく突き刺さった。
「分かりましたよ??。　協力しましょう。　ただ、これ以上の話は、別の場所で」
その羞恥に耐えかねて僕は渋々承諾し、場所の変更を提案した。
彼は依然、僕の服の裾を掴んだままで周囲を見回した。
「あーな。　そうするか??で？　どこに行く？　俺は、アンタについて行くぞ」
ようやく状況を理解したようで、彼も僕の案に賛成した。
「こっちです」
「おいおい??痛いって」
僕は、小さく呻いている青年の手を乱暴に引きながらエイリさんとの約束の場所に向かうのであった。
「なぁ??お前の名前なんて言うんだ？」
向かう途中で青年が質問してきた。
「??人に名前を聞く時は、自分から言うのが礼儀ですよ」

僕は、彼のことを危険人物認定しているため自分から情報を明かすつもりは無い。
「おう。　確かにそうだな。　俺はサーチェ??だ」
ポンと手を叩いて青年――――サーチェは胸を張りながら宣言した。
何やら言葉尻が濁っていたことが気になるが??まぁいい。
「セリカ??です」
名乗られた以上、仕方ないのでボソッと呟いた。
「セリカ??セリカな。??あれ？　なんだっけ？」
「??」
名乗って十秒後も経たないうちに彼は僕の名前を忘れてしまったようだ。　ジトーっとした目で彼を睨みつけるが、どうやら本当に忘れてしまったようだ。
「??セリカです！」
その体たらくに思わず叫んでしまった。
それを見たサーチェは小さく笑って??
「ははっ嘘だよ。　覚えてるから！　セレナだな。　よろしく」
そう言って頭を撫でられた。
??堂々と僕の名前を間違えているのは、もはやわざとなのだろうか？
「だから??セリカです！」
「うおっ！　ちょっ！　痛い痛い痛い！　やめろやめろ??悪かったよ、セイナ！」
「セリカだぁぁぁぁ！」
サーチェの頬を引きちぎらんばかりに引っ張る。　彼は涙目になりながら、何度も僕の間違った名前の数々を連呼していた。
彼の体たらくに叫んでいた当時の僕は知らなかった。
この男が??どうしようもない、ろくでなしのサーチェとの関係が予想以上に長くなることを。
――――
場所は変わって王都内屈指の高級料亭。

その個室の一角にて??
「??という訳で、この人と協力することになりました。　不本意ですけど」
「ほほひく」
「あっあぁよろしく」
僕は、エイリさんにこれまでの経緯を話した。
紹介されたサーチェは、エイリさんの視線を気にすることなく食事に集中している。　おかげさまでエイリさんが困惑しているじゃないか??
「それで??国王を暗殺するのか」
サーチェの食事がある程度終了したタイミングでエイリさんは真剣な目をして、彼に問いかけた。
「あぁ。　このクソみてぇな国を取り戻す」
それにサーチェも真剣な目で答えた。
エイリさんは、それを聞いた後に顎に手を当てて少し考えるような素振りを見せる。　しばらくして、その顔を上げた。
「なるほど??。　セリカちゃん。　悪いけど、少し外してくれないかな？」
エイリさんは、僕に退出するよう促した。
??同郷のもの同士で話したいことがあるのだろうか？
「分かりました。　私はここで」
このままゴネても仕方ないので、僕は、一礼して席を外すことにした。

――――

「これで、誰も聞いておりません。それで、どうしてこんなとこにおられるのですか？　マグノリア様？」
私は、黙ったままの青年に切り出した。
青年は、少し驚いたような顔をして。
「おっと??俺のことを知っているやつなんて、もう殆どいないと思っていたんだけどな。　能力か？」
サーチェは驚いたような顔をしてエイリを見た。

「さぁ？　どうでしょうかね？　それで??どうしてこのような場所に？　??王が変わられてから二年になりますが」
　上手く誑かしたエイリにサーチェは「ハハッ。　食えねえやつだ」と、グラスに並々と注がれたワインを一気に飲み干して笑った。
「あ？　??この二年間、俺はとある師匠の元で修行しててな。　正直国なんかどうでもよかったんだが、同門のやつに諭されて、気が向いたからだ。　まぁ俺がやろうとしてることは本気だから??あいつ、借りるぜ？」
　ニヤッと笑いながらサーチェがエイリさんを向いた。
　そこに、先程までの飄々とした空気はなく、至って真面目な顔であった。
　それに対して??
「??分かりました。　セリカちゃんが協力すると言うなら私は、全力でバックアップしますぞマグノリア様？」
　エイリも酒を飲み干し、ニヤッと笑って返すのであった。

――――

　冷たい夜風が肌を撫で、「くしゅんっ！」と小さくくしゃみをもらす。　しかし、その音は周囲の沈黙に呑まれて消えていくのであった。
「??ふむ。　なかなか暗いな」
　既に当たりは暗く、闇に包まれていた。
「??ん？」
　遠くの方からカチャカチャとした音がこちらに近づいてくる。その方を注視してみるが、夜の闇のせいではっきりと見ることは叶わなかった。
　――そして、その正体が目の前に表れる。
「ん？　お前は??昼間の女じゃねぇか！　へへっまた会えるとはなぁ。料理の後に、美味しくいただくとするか　」
　昼間の騎士であった。　あの時は子分らしき奴らを連れていたが、今は一人のようだな。　夜の巡回??では無さそうだが、まぁいい。
　??どうやらか弱い少女だと思って油断しきっている様子だ。

（そうだ！　??あれを試してみようか）
「貴方??。　来ないでください」
作戦の第一段階として僕は、騎士をキッと睨みつける。
彼はそんな言葉に聞く耳も持たず、下卑た笑みを浮かべながら近づいてきた。
あと少し??あと少しで罠にかかる。
「へへっいいねぇ。　そういう奴がどんな風になるのか??想像しただけでそそるぜ」
男は剣を構えつつ、コチラに歩み寄ってくる。
その手際の良さから、彼が何度もこのようなことをしている事が伺える。
――武器を持っていない相手を武器で脅す。
実にくだらない。　小者だな。
「消えろ」
僕は、腰の災厄（ディザスター）を抜き打つ。
殺さないようにかなり速度を抑えているため、普段なら絶対に防がれるような攻撃だが??。
「ぐぇ」
僕が武器を持っていないと油断しきっていた彼に対応出来るはずもなく、短い呻き声と共に男は遥か後方に吹き飛ばされるのであった。
（ふむ??）
相手が雑魚だったから断言は出来ないが、武器を見えなくする鞘の威力はなかなかに強大のようだ。
「そろそろ戻るか」
思案もほどほどに、僕は男を常備している縄で縛り、料亭に戻るのであった。
――
「セリカちゃん。　悪かったね」
「はい。　寒かったです」
「遅せぇよ、セリ??カ」

「??名前、ちゃんと覚えてくださいね?」
戻ると、エイリさんとサーチェが変わらぬ様子で料理を食べていた。
どうやら話し合いも終了したようだ。　サーチェも何とか僕の名前を覚えたようだし??まぁいいだろう。
「セリカ」
「なんでしょう?」
座席に腰掛けた僕に、いきなりサーチェが声をかける。
サーチェの方を向くと、彼は不敵ににっこりと笑って??
「一週間後、暗殺計画を決行する」
そう高らかに宣言したのだった。

修行の日々

「ういー。　セリカ～。　そこ、右に曲がれ～」
「??あの。　重いんでさっさと降りてくれませんか?」
　僕の背中に背負われるサーチェは調子に乗って、三本ものワインを一人で飲み干したのだ。
　サーチェはあまり酒に強くなかったようで、案の定酔っ払った彼は現在僕に背負われて住処へと向かっている最中だ。
　というのも、彼が「??お前は秘密基地に案内してやる」と半ば無理やりに決定してしまったのだ。
　まぁ??彼の口ぶりからも恐らく仲間がいるのだろう。　何せ国王暗殺なんて大それたことをやるのだからな。　それならば、やはり作戦前に面識のあった方がいいだろう。
　ひと組の男女が、人々が寝静まった王都を歩いていくのであった。
「??おーい。　セリカ～そこで止まれー」
「??ここ、ですか?」
　サーチェが呼び止めた場所は王都にある、ゴミ箱が乱立する路地裏であった。
　周囲を見回しても、視界に入るのはゴミを漁る野良猫のみで、棲家になりそうなところは見受けられなかった。
「??何処ですか?」
「ここだ」
　サーチェは僕の背から飛び降りた後、ゴミ箱を掻き分けてその下にある扉のようなものを指さした。
「??地下ですか」
「そうだ。　カッコイイだろ?」
「あーはい。　そうですね。　??疲れたので早く休みたいのですが?」
「へいへーい。　ちょっと待ってろよー。　??ひっく!」
　サーチェは赤い顔でフラフラと安定しない千鳥足で何とか立ちながらポケットを漁り、何かを探していた。

恐らくは鍵だろうな。　疲れているから早くして欲しいものである。
僕はそう思いながらサーチェを待っていたのだが??
「??どうしたのですか?」
「あはは??あれ?　おかしい??確かにここに入れた筈なのに??」
五分ほど待っても、彼が鍵を取り出す気配は一向になかった。
僕が問いかけると、彼は先程まで赤かった顔を真っ青に染めながらそう呟いていた。
「??もしかして、無くしたのですか?」
「??」
サーチェは黙って答えない。　しかし、その表情と彼の顔から滝のように流れ落ちる汗が、悠然と事実を語っていた。
――――彼が鍵を無くしたのだという事実を
「??もういいです。　ここは私に任せてください」
眠い??物凄く眠いから早くして欲しい。
その一心で、僕はサーチェを押しのけて扉の前に立った。
「ん?　なんだセリカ、お前鍵開けが上手いの??」
「えいっ!」
何やら見当はずれな見解を示すサーチェを気にすることなく、僕は全身の力を使って扉を力ずくでこじ開けた。
「ぎゃぁぁぁ!　おいセリカ、てめぇ何やってくれてんだぁぁぁ!」
「??うるさいです」
深夜であることを気にすることなく、サーチェは力の限り絶叫した。
耳を劈くその大声を苛立たしく思ったが疲れている僕は、扉の奥に続いていた地下階段を降りていく。
「??ちょっ、おいセリカ!　待ちやがれ!」
サーチェが何かを言っていた気がしたが、気にしない。
(ここは??ベッド??か?)
やがて部屋らしきものに着いた僕は、明かりのない室内を手触りで確かめ、何かふわふわしたものを見つけた。

その正体は分からなかったが、とりあえず眠ることに決めたのだった。

――――

どこからか微かに小鳥の囀りのようなものが耳に届いた。

「うーん」

小さく呻きながら、僕は少しだけ目を開く。

（まだ??眠い。　もう少しだけ??ん？）

僕が再び夢の世界へと意識を手放そうとしたその時、何かが僕の身体に触れたのに気がついた。

「???」

不審に思いながら周囲を見回す。

まず目に飛び込んできたのは知らない天井であった。

真っ白に染め上げられたその天井には、眩い光を放つものが埋め込まれていた。

あれは確か??魔照明と呼ばれる魔道具であったはずだ。

今はそんなことはどうでもいい。

一体その正体は??

「！」

僕が自分の横に視線をやった時、それは見つかった。

「へへっ。　??良いではないか～良いではないか～」

その男??サーチェは何故か僕と同じベッドの上でよく分からない寝言を呟きながら眠りこけていた。

「??死ね、変態が」

「ほえ？　??ひゃぁぁ！」

有無を言わずに僕はサーチェをベッドの上から突き落とす。

彼は奇妙な声を上げながら綺麗に床に激突した。

その大きな音が部屋中に響き渡っていく??

「??おいセリカ。　なーにしてくれてんだ？」

「何って??変態を成敗しただけですが？」

頭を擦りながら恨めしげな視線を浴びせてくるサーチェを冷たく斬り捨てる。

彼は「仕方ないだろ??お前が俺のベッドで寝てたんだから??」という彼の呟きを聞くと、何とも言えない気持ちになった。
??ふむ。　少し悪いことをしてしまったな。
「??それはすいませんでした」
「あー。　??もういいよ、仕方ねぇからな。　俺も悪かったから」
サーチェは依然頭を擦りながらも、気丈に笑って見せた。
その器量に少し感心したのも束の間??彼は指をピンと立てて「ただし、罰として今日の朝飯。　お前が作れよ」と小さく笑いながらそう言った。
「??え？　私、料理作れませんよ？」
「??は？」
僕の返答に気まずい沈黙が流れた後に??サーチェが驚いたような顔を向けてくる。
仕方ないだろう。　僕は今まで料理なんて自分でしたことがないのだから。　旅の最中もエイリさんが色々と作ってくれて、僕はもっぱら狩り専門だったからな。
しかし、サーチェはそれが以外だったようで「嘘だろ？」と鬱陶しく何度も聞いてきた。
「??他の仲間の方に頼んでください。　それ以外は手伝いますから」
少しぶっきらぼうにそう言うと、サーチェは何とも形容し難い表情を見せた後に「もう一回言ってくれ」と言う。
「ですからここにいる別の仲間の人に??」
「別の仲間？　いねぇぞそんなの。　ここにいるのは俺とお前だけだ」
「??え？」
「え？」
再び沈黙が場を支配し、僕とサーチェは黙って見つめ合う。
非常に気まずい状況ではあるが、僕の頭にはそんな些細なことを気にする余裕はなかった。
「??嘘、ですよね？　まさか??国王暗殺を企てているのに仲間が私以外にいないなんて??」

「いいや、本当だぜ？　逆に、どこに居住する場所があるんだよ？」
サーチェにそう言われて周囲を見回す。
確かにこの秘密基地には僕たちが今いる部屋と台所、そして??もうひとつの小部屋があるのみの小さな場所であった。
「??」
そんな彼のどうしようもなさに呆れていたのも束の間、彼は「よいしょ！」と言って立ち上がった。
「??ほら早く支度しろー」
「??どちらへ？」
ベッドの横にあるクローゼットを開けた彼は何着もある昨日と同じコートを羽織るサーチェは「まぁ着いてこい」と言って足早に部屋を出ていってしまった。
(??まぁここにいても埒が明かないから、着いていくか)
僕は既にかなり小さくなった彼の背を追いかけるのであった。

ここは王都最大級の骨董品店。
そこを中心に、気持ちのいい朝を邪魔する無粋な音と大声が響き渡っていた。
「おーい！　エーイーリー！　いるだろー！」
「やめてください！　なんですか！　朝っぱらから??」
「??おう。　なんか、お前の寝巻き凄いな」
扉をゴンゴンと叩くこと早三分。
三角帽子を被った以外にも可愛らしい寝巻きに身を包んだエイリさんがようやく現れた。
少し不機嫌そうなエイリさんは、どうやら僕が視界に入っていないようで、サーチェを見つめたまま目を離してしなかった。
「ふふっ。　お目が高いですな??。　これは我が妻が結婚記念日にプレゼントしてくれた??」
「あぁ。　そういうのいいからさ??」
サーチェは無言で右手をエイリさんの前に突き出す。
何のことかと首を傾げるエイリさんに「金くれ。　飯食う金がね

え」と言い放った。
「朝っぱらから??金の話ですか??」
もはや怒りを通り越して呆れたようなエイリさんは一度店の中に入った後に、ジャラジャラとした音を立てる袋を持ってきた。
「??とりあえずこれをお持ちください。　当面はこれで足りることでしょう」
「恩に着るぜ」
サーチェは渡された袋の中身を確認して、満面の笑みを浮かべながらそう言った。
「すいませんエイリさん。　ありがとうございます」
そう言って僕も礼を述べる。
「あれ？　セリカちゃん。　いつからそこに？」
「??最初からいましたが？」
僕の返答にエイリさんは「あ」と小さく呟いた後に、みるみるうちに顔を青くさせた。
??その不審な挙動から何となく察してしまった。
「まぁセリカはちっこいからな。　見えなくても仕方ないぜ」
しかし、そんな空気を気にもとめずにサーチェが言った言葉で場が凍りついた。
彼は、僕が転生以来ずっと気にしていたコンプレックスを堂々と穿ち抜いたのだ。
しかし、当のサーチェはその自覚がないのか、嬉しそうに袋の中の金を数え始めていた。
「??九十九、百！　おいセリカ！　すげぇぞ！　これ金貨百枚も入って??えぇぇぇ　！」
僕は黙って彼の溝内に肘打ちを喰らわせた。
綺麗に攻撃を喰らった彼は崩れるようにその場に蹲る。
「??やるじゃ??ねぇか」
「さっさと立ってください。　朝ごはんを食べに行きますよ？」
未だ苦しそうに呻く彼を足蹴りしながら、気分の良くなった僕は朝食を食べる場所を探し始めるのであった。

作戦開始

サーチェと出会ってから早いもので、もう一週間が経過した。
この一週間、僕たちは作戦成功のために修行を積んできた。
目立たないように町娘が着るような服を買いに行ったり、武器を買う出費を抑えるために自炊の練習をして結局外で食べるよりも高くついたり??思い返せば過酷なものばかりであった。
??まぁ流石に遊んでいたばかりではなく、毎日サーチェと手合わせを続けてきた。
一週間もの時を共にして、僕はサーチェの人となりをかなり理解出来たと思う。
彼はどうしようもなく、ろくでなしだ。　栄養バランスの偏りしかない食事に加えて朝寝坊なんて当たり前で、酷い時には昼過ぎに起きてきたこともあった。
??しかし、それを補ってもあまりあるほどに彼は強い。
この一週間の手合わせで僕は彼に一撃すらも入れることが出来なかった。　未来予知にも近い完璧な読みと圧倒的な戦闘センス。
災厄（ディザスター）を封じていたことに加えて得意技の影移動を封じていたとはいえ??いや、それを使っても恐らく勝つことはできないだろう。
平和な時代にはそぐわない??彼はそれ程の化け物なのだ。
これは余談だが、サーチェの師匠は彼以上の実力を持っていたらしい。
最も、彼はそれを頑なに認めないため僕の憶測でしかないのだが。
「セリカ?　最終確認だ」
「??分かりました」
皆が寝静まったであろう王都の夜道を歩きながらサーチェが語りかけてくる。
「俺の分身体は既に大臣たちの救出に向かっている。　??だから、俺の今回使える力は五割分だ」
「ふん。　??私との戦いでも三割程しか出していなかったのでは?」
サーチェが言う分身体というのは、彼の能力の『分身』のことだ。

一度だけ見せてもらったことがあるのだが、分身にも実体があり攻撃が可能なのだ。　更にサーチェ曰く、分身を通じて状況の把握も可能らしい。
強力無比な能力ではあるが、当然デメリットも存在する。　それこそが「使用者の力が半分になる」というものだ。
ひとつの分身を出すと半分、もうひとつ出すとその半分??といった塩梅で弱くなってしまうのだ。
最も、サーチェは元々の力が半端では無いのであってないようなデメリットではあるのだが。
兎に角、彼の能力は今回の任務でとても重要な役割を果たすのだ。
それこそが、大臣たちの救出である。
国王の暗殺の最中に、関係ない人物を巻き込むのはあまりに残虐だからな。
「??あ？　そんなことないぜ？　??三割五分くらいだな」
飄々と笑いながらそう言い放つサーチェからは一見微塵の緊張感も感じられない。
しかし??それは見かけ上の話である。
（ものすごい集中力??だ）
普段は眠そうに半開きの目を全開にしたサーチェは正しく極限の集中状態であった。
「んじゃ??行くか。　??死ぬなよ？」
「ふふっ。　??私がそう簡単に死ぬとでも？　寧ろ、サーチェさんこそ変な罠にかからないでくださいね？」
「言ってくれるぜ。　??やるぞ。　エイリの犠牲を無駄にしないためにもな」
「??ええ」
僕たちの装備や回復薬の仕入れによって総額２６７枚もの金貨を浪費することとなったエイリさんを思いながら、程よい緊張感で僕たちは深夜の王都を疾走するのであった。
――――
「??止まれ」

ある程度進み、闇の中でも王城がはっきり見え始めたところで、サーチェがおもむろに立ち止まった。
「??なんですか?」
このまま、突っ切ればいいのに。　そう思ったのだが??王城近くを巡回する騎士たちがいることに気がついた。
こんな時間帯に彷徨いている僕たちなど、少なからず不審がられるだろう。
「アイツらを相手取るのはめんどくせぇな」
僕も同意見だった。　騎士たちは、昨日までの三下共とは違う。本当の実力者達だった。
まぁ勝てなくはないが??。　こんなところで無駄に力を浪費したくないのだ。
「でも??どうしますか？　あれだけの数の巡回を掻い　潜るのは至難の業ですよ」
「うーん??上、いくか」
「??は？　ちょっ??ちょっと！」
「うるせぇ。　??ちょっと黙ってろ」
サーチェは僕の身体を横にして抱える。　一体何をしているのだろうか？
――――メキリ
そんな音がして下を見ると、サーチェの立っている辺りの煉瓦で作られた道が不自然に壊れていた。
（まさか??）
「よっと！」
「??は？」
僕がその可能性に気がついたのも束の間??跳躍した。
掛け声こそ軽々しいものであったが、その距離は馬鹿げたもので、あっという間に城門すらも超えてあっさりと王城こ侵入に成功したのだった。
「??俺！　参上！」

サーチェは綺麗に着地しながら奇怪な叫び声を上げる。
「??さっさと下ろしてください」
「へーへー。　分かったよ」
彼はそう言って僕の身体から手を離した。
全く??彼の唐突すぎる行動も考えものである。
「「敵襲だ！」」
そんなことを考えていた矢先、どこか遠くの方から大群が走ってくるような音が聞こえてきた。
そちらの方に視線を向けると??甲冑に身を纏った騎士たちがこちらに向かって来ていた。
「??まじかよ」
苦々しく呟くサーチェ。
流石にあれほどの派手な動きをしたら悟られてしまう、か。
「??サーチェさん。　ここは私に任せてください」
「??は？　いやいや、ここは一緒に倒した方が??」
「ダメです」
サーチェは驚いたような顔を僕に向ける。
「ここで時間を稼がれてしまっては国王に逃げられるかもしれないでしょう？　今回で成功させないとおそらく、次からは成功しません。
??だから行ってください」
「??」
サーチェは黙って答えない。
しかし、その表情には明らかな迷いが伺える。
「??分かった。死ぬなよ」
とっくに騎士たちに包囲された中、サーチェが絞り出すように呟いた。
??愚問だな。　僕を誰だと思っている？
「??大丈夫ですよ。　??私ですから」
「ははっ。　そうかよ。　だったらお前に任せるぜ？　セリカ」
「承りました」
サーチェは再び脚に力を込めて跳躍する。　一直線に王城へと飛

んで行った。
「??ひとり逃げたぞ！　追えー！」
　そのサーチェを追いかけようと走り出す数名の騎士たち。
「??ダメですよ？　私の相手をしてもらいます」
「??ッ！」
　僕は彼らの行く先を炎の壁によって封鎖した。
　上手く止まることができずに、何人かの騎士が業火に焼かれて亡きものとなる。
「お前たち！　敵は女一人だ！　逃がすな！」
　数十名の騎士の中、馬に乗った一人の女騎士が号令を掛ける。　彼の号令に合わせてじわり??またじわりと包囲網を詰めていく。
　騎士の得意な集団戦法である。
　しかし??
「わざわざそんなものに乗ってやる義理はない」
　僕はすかさず影移動を発動させて一人の騎士の背後をとる。
　そして??抜き放った災厄（ディザスター）の腹の部分で首元を思い切り叩く。
「ぐあっ??」
　その騎士は思いもよらぬ角度からの攻撃に反応出来ず、意識を刈り取られた。
　僕はその近くにいる何人かの騎士も同じように気絶させていった。
　極力殺さないように注力する。　彼らは自分の仕事を果たしているだけ??罪はないのだから。
「何人かやられているぞ！」
「馬鹿な??どうやって??」
「馬鹿者！　隊列を乱すな！」
　騎士たちに動揺が生じて包囲網が崩れ始める。
　こうなってしまえばもはや影移動を使うまでもない。
「??狩り尽くす」
　そう小さく呟いて、僕は騎士たちに向かっていくのだった。

国王の矜恃

闇の中を俺は疾走する。
「ふっ??!」
その途中で見つけた騎士は片っ端から殴り倒していく。
「ここだ！」
遂に城の入り口に辿り着いた俺はその中に走り込もうとする。
（???）
――何かを感じた。
その感を信じ、別の場所に飛び移る。
瞬間、元いた場所が爆ぜる。
（――！）
爆裂魔法だ。
「おいおい、危ねぇだろ??」
そうボヤきながら、跳ぶ。
目指すは魔法を発動した対象がいる場所。
近くにある草むらだ。
「??よく来たな」
そこに隠れ潜んでいた男が口を開く。
「うるせぇ黙ってろよ。　さっさと死にやがれカイナ。お前が一度でも俺に勝ったことがあったか？」
俺はその男――幼なじみで、今回の討伐対象であるカイナに言い放つ。
「ふっ??相変わらずの傲慢さだな、サーチェ。　生憎だが――そのつもりは無い！」
「そうかよ！」
言うが早いか俺はカイナに向けて走り出し、正拳突きを繰り出す。
「その愚直さも変わらない。　だから、王国を乗っ取られるんだよ」
俺の突きは、易々とカイナに受け止められる。　今までだったらこれで終わっていたはずなのに??
そして??

「??ッ！」
どこからか剣が現れ、俺の腹を横から裂く。
「てめぇ??!」
俺は追撃を仕掛けんとする幼なじみを見つめ、叫んだ。
「ふんっ！」
振り下ろされる剣。　それをバックステップで回避した俺。　追撃を仕掛けようと体制を整える。
しかし、そこに先程までいた場所にカイナはいなかった。
「これで終わりだ！」
「??!」
声が聞こえたのは??背後。
いつの間にかそこにいたカイナが俺に向けて剣を振り下ろしている最中であった。
反応が間に合わずに背中を斬られてしまった。
派手に飛び散る血飛沫と激痛がそれを証明していた。
「これが??これが勇者の剣か！　素晴らしい！　素晴らしい力だ！」
そう言ってカイナが剣を見せつけるようにして歩み　寄る。
「てめぇ??馬鹿な真似しやがって」
勇者の剣が、普通の人間に使えるはずがなく??
この馬鹿が何かをして魔力を増幅させているのは明らかだった。
更にいえば、先程の背後をとった行動。
あれは恐らく影移動だ。　あの技を使うことができるのは、一部の限られた存在と魔族のみ。
つまりこれは??
「馬鹿な真似？　あぁ悪魔契約の事か。悪くないものだよ？　これも」
「悪魔に乗っ取られるかも知れねぇのに??良いのかよ！　そんなこと！　お前の成し遂げたい正義は、そんなもんだったのかよ！」
俺が思い出すのは、幼き頃の日々??
『僕、大きくなったらこの国を、正義を守る騎士になるんだ！　祖国のためにサーチェを守れるくらい強くなるんだ！』

そんな純粋な目標を抱えていた彼が、二年前のある日――――

「サーチェ??この国を君には任せられない」

そう言って俺をマグノリアから追い出した。

俺にはその理由が分からなかったのだ。

「正義??だと？　」

みるみる彼の顔が激昂の色に染っていく。

「そんなものが何の役に立つんだ！　正義だけでは誰も守れない！大事だった人も！　サーチェだって??弱いから誰も守れなかったんだ！　弱さは罪だ??だから僕は力を得たんだ！どうしてそれが分からないんだよ！」

「ぐっ??」

カイナは再び俺に斬り込む。

回避が間に合わずに何発か貰ってしまった。

??まずい。　非常にまずい状況だ。

依然背中から溢れ出る大量の血液が俺の神経をすり減らしていく??

「これこそが力の照明！　勇者の剣だ！　僕は認められたんだ！　そして??強くなったんだ！」

うわ言のように呟きながらカイナは攻め続ける。

「うるせぇよ。　お前は??借り物の力で威張ってるだけの雑魚に過ぎねぇんだよ」

こちらからも攻撃を仕掛けるが??勇者の剣に触れたら拳が斬られてしまうため、思うように攻撃が通らない。

「そうか??もういい。　散れ！」

そう言ったカイナの魔力量が急に高まる。

――――大技が、来る！

そう思って身構える。

「黒破壊（ブラックバースト）！」

カイナが唱えたのは、古の魔王が開発した大魔法。

俺の身体を闇が捉える。

そして??その闇が一瞬で崩壊する。

その崩壊エネルギーが全て、俺にかかる。
「ぐっ??ァァァ!」
大きく吹き飛ばされ、遥か後方の床に叩きつけられる。
その衝撃が身体に伝わり、もはや動くこともままならない。
「終わったな??。　僕の勝ちだ、サーチェ」
カイナも、俺に向かって悠然と歩み寄ってきた。
「ま??だ??終わっ??」
喉がまともに働かず、声が上手く出ない。
「これ以上動くんじゃない。　僕は君を苦しめたくないんだ」
カイナは剣を振り上げる??
「後は、僕に任せて大人しく死ね」
そう言って勇者の剣を振り下ろした。

悪魔討伐

「??ふぅ」

僕は騎士たちが倒れ伏す場所にて小さく息を吐く。

何とか全員を倒すことができたが??やはり殺さないで無力化したため時間がかかってしまったな。

それ以上に??一度に何十人もの相手をして疲れたな??

「そろそろ行かないと??」

僕は、身体を起こして歩き出した、王城へ向けて。

まぁもしかしたら既にサーチェが倒してくれているかもしれないが??

「??ん?」

何かが崩壊するような音が聞こえる。

続いて聞こえるは何かが地面に落ちる大きな音。

――何か良くない予感がする。

僕は迷わず、影移動で最短距離を進みながら音の発生源へと走り出すのであった。

――

「後は、僕に任せて大人しく死ね」

辿り着いた僕の目に飛び込んできたのは、金髪の男が地に伏したサーチェにトドメを刺さんとするその瞬間だった。

男がサーチェに眩しい光を放つ剣を振り下ろす。

見間違えるはずがない。

――あれは勇者の剣！

間違いない。　あの男が勇者の末裔だ。

(間に合え！)

僕は、サーチェに向けて走り出す。

そして??

「障壁(バリア)！」

――ガキン！

魔力の障壁が展開され剣の動きが一瞬止まる。

しかし、すぐにその障壁にヒビが入る。
――その一瞬で十分だった。
障壁を破り、阻むものが無くなった剣がその動きを再開する。
――ガキン！
金属と金属が噛み合う鋭い音がする。
勇者の剣と僕の災厄（ディザスター）が噛み合う音だ。　サーチェに攻撃が当たるすんでのところで防ぐことが出来た。
「セ??リカ？」
地に伏したサーチェが虚ろな目で僕を見つめる。　かなりの重症だ??一体何があったのだろうか。
「大丈夫??この人は私が倒します」
そう言って恐らく国王で、勇者の末裔である男に向き直った。
サーチェを倒すほどの相手に勝てるかどうか??そんなことは関係ない。　僕は全力を果たすのみだ。
僕を見た男は、少し驚いた顔をして問うた。
「見ない顔だね??誰だい？」
男の冷たい瞳が僕を睨みつける。その瞳に光はなく、どこか悲しいものを感じさせた。
「その人の協力者??です！」
話しながら勇者の剣を押し返した。
「邪魔者かい？　今なら許してあげるから早く退くんだ。　君の魔力量では僕に勝てないよ？」
男が僕に警告するが、それを無視して僕は、斬り付ける。
「セイッ！　テリャア！」
右、左と放った二連撃を放つ。
――僕は、地面を蹴って一旦後ろに下がり??
「はァァァ！」
全身のバネを使って前に斬りつけた。
が??
「甘い！　甘いよ！魔力の防御を崩せていない！」
その全てが魔力防壁で防がれる。

（??くそっ。）
内心で悪態をつく。
魔力防壁。
僕が使う「魔法障壁（バリア）」とは似て非なるものである。
魔力障壁は凝縮した魔力を展開する技で、タイミングさえ掴めば少ない魔力しかない者でも使える技だ。
それに対して魔法防壁は自分の魔力を周囲に展開し、自分を守らせる技だ。　こちらを使用するには、強大な魔力が必要なのである。
ちなみに??現在の僕では魔力防壁を使うことができない。
ここから導き出される結論それは――――『絶対服従』が通用しない、ということである。
（どうするか??）
突破口を見つけるべく、僕は防御に徹することを決定した。
「喰らえ！」
魔力を纏った剣が突き出される。
――――速い！
僕は、紙一重でそれを回避する。
「ぐっ??ァァ！」
かすり傷だった。　しかし??剣に纏われた魔力が避けきれずに大きく広げたのだ。　開かれた傷口から血が滝のように溢れ出す。
「これが??これこそが力だ！　僕の力だ！　ハハＨＡＨＡハハｈａｈａｈａｈａｈａｈａ！」
――――何やら彼の様子がおかしい。
頭を掻きむしりながら、狂ったように笑い続けているのだ。
途端に彼の魔力の質が変化する。
そして??いつぞやの歴史書に書いてあった内容を思い出した。
『魔力の質は人によって違う』という新たに判明されたこの世の絶対条件を。
「――――ッ！」
少し離れたここからでも感じる、圧倒的で押しつぶすようなその魔力（オーラ）。

それは、先程までの彼のものとは大きく違い禍々しいものだった。
「カイ??ナ??もう、や??めろ！　これ以上やる??と、悪魔に??意、志を乗っ取ら??れるぞ！」
サーチェが口から血を吐き出しながら叫ぶ。
しかし、カイナと呼ばれた男は意に返した様子もなく狂ったように笑い続けている。
――悪魔に意志を乗っ取られる？
（現在の悪魔は勇者も支配できる程に強いのか？）
「どういうことです？」
僕は、この隙にサーチェと自分にエイリさんが用意してくれた回復薬を使いながら問う。
かなり高価な回復薬だったようで、一瞬で傷がいえる。
もうしばらくすれば再び戦えるようになるだろう。
「カイナは??勇者の剣を使う力を得るために悪魔と契約している。悪魔契約とは悪魔に魔力を借りるために自分の魂を捧げる禁断の契約だ。　おそらく、カイナはもう??カイナじゃねえ。　悪魔だ」
――やるぞ。
おもむろにサーチェがふらふらと立ち上がった。
「ちょっと待ってください。　まだ完全に動ける状況ではないでしょう？　ここは私に任せ――むぎゅ」
話している途中で口を塞がれた。
「バーカ。　さっきも聞いただろ？　そう何度もお前のわがままを聞くかっての。　次は俺の番だ。　というか??一緒にあいつを倒そうぜ？」
少し気恥しそうに頭を掻いたサーチェは構える。
――悪魔討伐　開始だ。

悪魔討伐②

「俺が前衛、セリカが援護だ」
それだけ言い残してサーチェは、回復薬によって塞がった傷のあった部分を少し触って確認した後、カイナだったものに向かって走り出す。
異論は無い。　僕の魔力量は、あの悪魔と比べて遥かに劣っているため不意をついても『魔眼解放』が効かないと考えたからだ。
サーチェは悪魔に乗っ取られたカイナを見据える。
そして――――
「てりゃァァァ！」
跳躍からの渾身の蹴りを放った。
「――――はははっアンタ、強いね」
その一撃を??悪魔は笑って魔力の防壁で防ぐ。
「たく??その姿でアイツらしくねぇこと言ってんじゃねぇよ。　調子狂うだろクソが」
サーチェは防壁に臆することなくさらに鋭い拳打を放つ、放つ、放つ。
――――が。
その全てが防壁によって無情にも阻まれる。
「めんどくさいなぁ。　めんどくさいから――――本気出してあげるよ。」
そう口走った悪魔の魔力が一気に増幅する。
「その魔力??さっきの大技か！」
そう言ってサーチェは身構える。
そして??
「セリカ！　張れるだけの障壁を展開しろ！」
僕に向かって叫んだ。
「分かりました！　障壁（バリア）！　障壁（バリア）！　障壁（バリア）！」
僕はサーチェの指示に従い、張れるだけの魔力障壁を展開する。
しかし??それを聞いた悪魔は微かに笑った。

「無駄だよ！　そんな障壁、全て破るから」
悪魔の魔力が高まっていく。
――あの魔法は！
その魔法は僕にとって、とても見覚えがあるものであった。
何故なら、それは魔王時代に僕が創り出した魔法だったからだ。
そして悟る、この程度の障壁で防ぐことは不可能だと。

――そう、防ぐことは

「滅びろ！　黒破壊（ブラックバースト）！」
詠唱が完成し、溜め込まれた魔力が放たれる。
しかし、その魔法が発動することは永遠になかった。
「何故だ！　なぜ魔法が発動しない！」
悪魔が叫ぶ。
「なっ??何がおきた？」
サーチェも起こった状況がいまひとつ理解できていない様子だった。
「解呪（ディスペル）です」
僕は、その答えを告げる。
悪魔は僕を睨みつけ??
「ディ、解呪（ディスペル）だと！　ありえない！　『黒破壊（ブラックバースト）』は、人間には理解できない程の高位魔術だぞ！」
そう喚き散らす。
（うるさい??）
内心で苛立ちを覚えるが、喚き散らすその理由が僕には理解できるため、何とも言えない気持ちになる。
――解呪（ディスペル）
魔法の発動のタイミング、その一瞬にのみ使用可能な魔法。
その効果は――魔法発動の停止――

しかし、魔法発動のタイミングはどの魔法も絶妙に違う。
つまり、その魔法の術式を完全に理解していないとできない芸当。
それが――解呪（ディスペル）――だ。
『黒破壊（ブラックバースト）』が人間に理解できない程の高位魔術でも関係ない。
――なぜなら、その製作者は僕なのだから。
「お返しだ。　滅びろ!!　」
僕は、黒破壊（ブラックバースト）を発動。
その崩壊エネルギーが一気に悪魔へとかかる。
「クソっ！　！　」
悪魔は魔力防壁に加えて障壁を展開し、被害を最小限に抑えた。
それでも威力の封殺はままならなかったようで、少しよろめいていた。
そのまま前に切りこもうとしたが??
魔力の大量消費により猛烈な吐き気を感じる。
お互いに満身創痍の状態だ。
――たった一人を覗いて。
「サーチェ！　」
僕は、サーチェに呼びかける。
呆然と立ち尽くしていた彼は軽く頷いた後??
「おう！任せろ！　全力で行ってやる『正義執行（ジャスティスセイバー）』　！」
サーチェの身体が白いオーラ、聖霧に包まれる??
（は？）
――内心で驚愕する。
サーチェが行使したのはあろうことか、過去の世界で勇者が行使したものと同じものであった。
（まさか??サーチェは??）
――サーチェは勇者の末裔なのでは？
そんな懸念を心の中に抱いた。
しかし、それについて考える余裕などなくサーチェが悪魔に肉薄する。
「くらいやがれ！」

――パリン！
高い音がして悪魔の魔力防壁が崩れ落ちる。
一度対峙した僕なら分かるが、正義執行（ジャスティスセイバー）を前に魔法など無力に等しいのだ。
――正義執行（ジャスティスセイバー）。
魔を滅するために作られた技術（アーツ）。
言い換えればそれは『聖魔法の絶対領域』なのだから。
「おのれ！　おのれおのれ！」
悪魔は叫びながら勇者の剣を一閃する。
その切っ先は、完全にサーチェを捉えていた。
剣がサーチェに近づく??
しかし、サーチェの身体が切り裂かれることはなかった。
「バカが」
サーチェは余裕の表情で剣を掴んでいた。
「どうして??どうして切り裂けない！　勇者の剣だぞ！」
悪魔が驚愕して叫ぶ。
――サーチェがその問いに答えることは無い。
ただ黙々と殴る、殴る、殴る??
（勇者の剣は、聖法気で戦う剣だ。　魔力で代用したところでたかが知れてる。　ただ??サーチェ??彼は??）
魔力で使われた勇者の剣など、本来の力に比べればなまくらに等しい。　しかし、剣としての性能は本来のままのため剣の腹を掴むのは決して容易ではない??
おそろしい程の見切りの目に僕自身、恐怖を覚える。
「テリャ！」
サーチェの蹴りが悪魔の腕に見事に炸裂しその手から勇者の剣が滑り落ちる。
サーチェはそれを拾う。
途端に勇者の剣が鋭い光を放つ。
そして――光の剣となった。
「ほらよ！　落し物だ、受け取れよ！」

投擲された光の剣が悪魔目掛けて飛んでいく。
その剣に纏われるは破邪の光??喰らえば即死だ。
それを察したのか悪魔は無様に這いつくばって剣の投擲を回避する――だが、後手だ。
サーチェはその行動を読んでいたようで既に悪魔目掛けて疾走している。
その手に強大な聖法気を宿らせて――
「終いだ。　カイナ(あいっ)を唆した罰、その命で償ってもらうぞ」
サーチェの貫手が悪魔の胸を貫いた。
悪魔の体内で聖法気――魔を滅するが炸裂する。
「がっ??おの、れ！貴様ら??いつか魔皇様が貴様らを??　」
不穏なことを吐き捨てて悪魔??もといカイナは事切れた。
「うぇー汚ぇ。　これだから貫手は嫌なんだよ」
サーチェは手に付着した返り血を服でゴシゴシと拭いている。
彼自身の血もあって服は赤黒く染まっている。
「終わったな。正直俺一人でも余裕だったが」
ある程度拭き終えたサーチェがニヤニヤしながらそう呟いた。
――何を馬鹿な。　強がりめ。
「冗談はやめてください。　ヘロヘロだったじゃないですか」
「ぬ??俺にはあそこから勝算があったんだよ！　ほら！　俺は全力じゃなかったし？」
顔を赤くしてサーチェが叫ぶ。
何が勝算だか??まぁいい。
――僕達は国王暗殺を成し遂げたのだ。

戦いを終えて

「カイナ??後は俺に任せろ」
サーチェは遠くを見つめ??悲しそうな顔をしていた。
「??よし！　そろそろ行くか　」
しばらくして、彼は僕の方を見てそう言った。
「どちらへ？」
「この国を、取り戻すんだ。　まぁ元々俺の国な訳だが??」
サーチェは頭を掻きながら言いづらそうに言った。
（やはりな）
僕は先程まで抱いていた懸念に確信を持った。
――彼が、彼こそが勇者の末裔なのだ。
「サーチェさんの国??とは？」
僕は、意味が理解できない風を装ってサーチェに問うた。
「実のことを言うと??俺はこの国の本当の王。　勇者のまつえ??っと。　なんの真似だセリカ？」
言葉を聞き終わる前に僕は、サーチェに剣を突き立てる。
「??殺す」
僕は、サーチェを睨みつけて吐き捨てた。
しかし、サーチェは気にした様子もなく飄々とした態度で??
「おいおいやめとけよ。　お前の魔力量、限界だろ？」
そう言った。
「これでも同じことが？」
僕が取り出したのは一つの瓶。
――それを飲み干す。
飲み干した途端に魔力が完全復活した。
「魔力回復薬??エイリから貰ったのか??めんどくせぇな。　でも??」
――お前がそうするって事は何かお前なりの考えがあるんだろうな。
そう言ってサーチェは勇者の剣を構えた。
「いくぜ？　希望（ラジエルダ）！」

サーチェは圧倒的な魔力を放ち、僕を威圧する。
それと同時に勇者の剣――――希望(ラジエルダ)が眩い光を放つ。　それこそが、彼が勇者の末裔である何よりの証拠であった。
「??はァァァ!」
まずは前に、体重を乗せた全力の斬り込み――――
「軽いな」
それを無情にも楽々と弾かれる。
――――力で勝つことは不可能だ。
「ならば??!」
僕は、右に左にと剣を切り降ろし、速さでサーチェを撹乱する。
「遅せぇよ」
それすらも、サーチェは軽いステップで躱していった。
「ここらで手打ちにしねーか？　」
サーチェがそう提案してくるが、聞く耳を持たない。
――――僕は身体中に魔力を溜める。
ここで放つは、サーチェを二度も苦しめたあの技だ。
そして??身体中に魔力が巡ったその瞬間??唱える。
「滅びろ！　黒破??ッ！」
しかし、その魔法が放たれることはなかった。
魔法を放つ前に目の前に現れたサーチェによって口を塞がれたのだった。
「終わったな。　俺の勝ちだ」
そのまま地面に叩きつけられた。
十分に距離をとっていたはずなのに??気がついたらサーチェが立っていたのだ。
あまりにも速すぎるその動きに、僕は内心で驚愕した。
「まだやるか？」
そうサーチェが聞いてくる。
頭では分かっている??勝てないことぐらい。
でも、退く訳にはいかないのだ。
――――僕は立ち上がり、再び彼に向かって走り出した。

――――
「ハァハァ??」
呼吸が整わない。
「バカが。　限界超えすぎなんだよ」
隣でサーチェが吐き捨てた。
――――返す言葉もない。
僕がサーチェに走り出した後、勝負は一瞬でついた。
――――僕の敗北という結果で。
「これから私をどうするんです?」
やっと呼吸を整えてサーチェに問うた。
「そうだな??お前は俺を殺したい。　俺は国を興したい??ふむ　」
サーチェが考えるように口元に手を当てた。
そして??
「よし!　お前、俺の護衛になれ!」
何を血迷ったのか、そう言い放ったのだった。

国王と暗殺

「なぜ??護衛に?」
僕はサーチェの言ったことの意味がわからず、問い返した。
「だ・か・ら　それがお互いの要望を限りなく果たした最高の案だからだよ」
めんどくさそうにサーチェが言った。
「??なぜ私を処分しないのです?」
素直に疑問に思ったことを問うと、サーチェはニヤッと笑って。
――女に手を挙げるのは紳士の恥だ。
と真面目な顔で言い放つ。
「??御託はいいので、真意をお伝えください」
それを冷めた目で切り捨てて、再び問う。
すると??
「??言ったろ?　俺はカイナのためにも国を興したいんだ。　その為には力強い協力者がいた方がいいだろ?　俺の護衛、というかメイドにセリカがなればお前はいつでも俺を狙える。　俺はお前を国興しに利用できる。　悪くないと思うんだが??」
サーチェは再び真面目な顔で僕に答える。
そして??
――協力しないんなら、ここで処分するけどな。
最後にそう呟いた。
(これは??協力するしかない、か)
まぁ??元々はこうする予定だったから??いいだろう。　それに殺されてしまっては元も子もない。
「分かりました。　よろしくお願いします。　サーチェ??様?」
僕は、渋々サーチェの案に乗った。
「あぁ、よろしくな。　セリカ。　あと、俺のことはご主人様と呼べ!」
ニヤニヤと気持ち悪く笑いながらサーチェは手を差し出した。
「よろしくお願いします??ご主人??さ、ま」

僕は、勇者をご主人様と呼ぶ屈辱に耐えながらその手をとった。
そして??
「おい！　ちょっ！　痛い痛い痛い痛い痛い痛い！　痛いって！」
差し出された手を全力で握る。
そうしてヴァイス、改めセリカは勇者の末裔のメイドとなったのであった。
――――
「起きてください！ご主人様！」
渡されたメイド服に身を包みながら呼びかける。
が、起きる気配はない。
（いける！）
シーツをぐちゃぐちゃにして眠っているサーチェに向かって、僕は笑顔でナイフを振り下ろす。
――スカッ！
（は？）
虚しく空を裂く音がした。
あろうことか彼は寝返りでその振り下ろしを避けた。
そして??
「セリカ～！　あと少し??いや、一日ぐらい～」
変わらぬ気だるげな声を出した後、彼は再び夢の世界に飛び込んで行った。
（この！　勇者め！）
僕はナイフを納め、腰にかけてある災厄（デイザスター）に手をかける。
――斬り捨てる！
確固たる意志を持って、僕は抜刀しようとしたのだが
「陛下！　まだ起きていないのですか！　セリカ殿！　早く起こしてやってください！」
（??チッ！　邪魔が入った）
内心で舌打ちをする。
それを表情には出さず、僕は寝室から出てドアを開ける。
「おはようございます。　ライラ様」

僕はその先にいた頭の毛がかなり寂しいことになっている男に挨拶をする。
これでも彼は大臣なので無下にする訳にはいかない。
「そんな事はどうでもいいのですセリカ殿！　もうすぐ始まってしまいます！　早く起こしてください」
彼も忙しいようで、それだけ言って去っていった。
僕は、それをやれやれといった様子で見送る。
彼はサーチェが救出した大臣のひとりだ。
なかなかに正義感の強い男のようで、混乱する政治を何とか上手く纏めてくれているらしい。
彼らと出会ってから早いもので十日だが、何とか打ち解けて来たような気がする。
初日なんて酷いものだった。元々カイナは騎士団長だったようで、騎士団への迫害が物凄いことになっていたのだ。
それを沈めたのはサーチェで、彼は皆で新しい国を作り出す決意を伝えた。
そして??今回の件の責任を全て自分とカイナが背負うということも。
そうして何とか纏まった王城内ではあったが、それでも課題は山積みであった。
特に酷かったのは??王城内の掃除。
一昨日にやっと終了したが、五日前に新しく募集したメイドたちのがやってくるまでは少人数で執り行っていたのだ。
まぁ??たくさんのメイドが採用されたようで僕の仕事も楽になって暗殺に専念できる??。
――しかし現実はそう甘くなかった。
結論から言うと彼らは僕の暗殺に邪魔な存在なのだ。
サーチェとの約束で、僕がサーチェに暗殺を仕掛けられるのは人目がない二人のみの場所、と決められている。
メイドや衛兵、大臣など王城を常に彷徨いている彼等の目を掻い潜りサーチェに暗殺を仕掛けるのは至難の業なのだ。

（おっと??そんなことより早くサーチェを起こさねば）
思わず思考に耽っていた僕は自分の仕事を思い出し、振り向いた。
しかし、そこにサーチェはいなかった。
――どこに？
周囲を見渡すが??いない。
（??!）
その時、下から何か気配を察知した僕は下を向く。
「??何を？　されているのですか？」
その視線の先には床に伏し、こちらの様子を伺っているサーチェがいた。
――はぁぁぁ！
その返答の代わりにサーチェは大きなため息をつく。
「何だよ??タイツ履いてんのかよ。　前までは私服だから履いてるのは仕方なかったけど??今は制服だろ？　せっかく覗いてやろうと思って昨日から考えてた作戦だったのによぉ??」
「??死ね」
僕は躊躇なく剣を抜き、サーチェに切りつけた。
「障壁（バリア）っと。　危ねぇなァ。　そんなに怒ると折角の美しさが台無しだぜ？」
「??早く準備してください。??チッ」
露骨に舌打ちをしながら剣を納め、部屋の外に出た。
（あの変態勇者め??）
僕はこれからずっと、タイツを履き続けることを固く決心したのであった。
――
「セリカ殿。　そろそろですぞ！」
ライラが呼びかける。
そろそろ僕の出番か??
現在執り行われているのは、国王が変わったことを国民に伝えるための儀式――
平たく言えば、国王から国民への挨拶だ。

サーチェは国民からの人気が高いようで、先程から歓声の嵐が止まない。
まぁ??彼が活動し始めたのは半年程前からで、それからはほぼ毎日市民を守るために戦っていたらしいしな。
サーチェを見知っている人も少なくないのだろう。
「??ここで、俺の王国奪取に協力してくれた頼もしい護衛を紹介するぜ！　その名前は～セリカだ！」
サーチェが国民を煽るだけ煽り、僕の登場の舞台を整える。
(??行くか)
やかましい歓声が僕の登場によって更に大きくなる。
「どうだ？　なかなかの美人だろ！　よし！　コイツからも挨拶を貰おうか！　頼むぜ～セリカ！」
そう言ってサーチェが話を僕に振る。
観衆の視線が僕に集まるのを感じた。
僕は受け取った拡声魔道具を口元に当てて、ゆっくりと語り出す。
「えーっと??初めまして、セリカと申します。　皆様！　サーチェ様と一緒に再びマグノリアに栄華をもたらしましょう！」
おぉ！っと僕の挨拶に観衆が湧く。
(我ながら中々にいい挨拶だ)
どうだと言わんばかりにチラッとサーチェを見た。
――――合格点だな。
サーチェが口の動きでそう伝えた。
生意気なヤツめ。
「よーしお前ら！　マグノリアの時代の幕開けだー！」
サーチェがしばらく話した後国王変更の儀式は終了したのであった。

能力の使い道

「??ふぅ。　今日も疲れたな」
　僕は一糸まとわぬ姿となり湯船に浸かる。
「魔王の頃にも水浴びはあったが??それを湯に変えるだけでここまで劇的に変化するとはな」
　与えられた部屋に風呂というものがあり以前から気になっていた。
　ちょうどサーチェに勧められたということもあり試しに入ってみたのだが、これがとても気持ちい。
「しかし??サーチェは強いなぁ。全く当たる気がしない」
　時が経つのは早いもので、僕がメイドになってから一ヶ月が経過しようとしていた。
　僕は毎朝、訓練という名目でサーチェを殺そうと仕掛けているのだが??等のサーチェは、その最中に余裕の表情で僕にアドバイスを繰り出してくる。
　かなり悔しいが、サーチェがするアドバイスは的を射ているため聞くべきところがあるのだ。
　それが更に悔しいのだが??
（さてさて??）
　僕は訓練の最中、サーチェに貰ったアドバイスを思い出す。
　――お前、タイツやめた方がいいぞ。　そんな貧相な胸なのに脚まで隠してちゃあ、そそらねぇからな。
（違う??何を思い出しているんだ）
　一瞬自分の胸を確認して、首を振った後に再び思案する。
　――お前??あの能力使えよな。　あのドラゴンを滅ぼしたやつ。
（??これだ！）
　去り際に彼が言っていたことを思い出した。
　そう??彼は知っていたのだ。　僕の『魔眼解放』を、そしてそれでドラゴンを討伐したことを。
「けどなぁ??多分通じないしな」
　ぽつりと呟く。

多分、と言うがこれは確信だ。
彼には『魔眼解放』が通じない。
僕の魔力量も平均的にはかなり多い方なのだが、それでもサーチェには遠く及ばない。
それほどまでに彼の魔力量は大きいのだ。
魔王時代の不敗神話は見る影もなく、今の『魔眼解放』は大した効力もない駄能力に成り下がってしまったのだ。
「どうするかなぁ??」
そうボヤきながら風呂を出た。
エイリさんに貰った可愛らしいフリルの着いた寝巻きに着替えようかと思ったその時??洗濯物の籠をぼんやりと見つめてひとつの事に気がついた。
――ない。
ないのだ。　僕の下着が??。
「??盗まれたな」
僕の王城の中での地位はかなり高い。
それこそ、大臣に匹敵するほどだ。そんな僕にこんなことをする奴は恐らく一人しかいない。
――そう、サーチェだ。
僕は寝巻きを一度仕舞い、クローゼットからエイリさんに送ってもらった服を適当に見繕ってサーチェの部屋へと向かった。
――バン！
ノックもせずに派手にドアを開け、部屋に入る。
「よぉ。　来ると思っていたぜセリカ」
僕はその中で脚を組み椅子に座って、何故か格好をつけているサーチェを見据え??
「変態が??死ね！」
思いっきり災厄（ディザスター）を振りかぶった。
「よっと！　危ない危ない」
サーチェはそれを軽く避けた。
僕の剣は勢い余って椅子を粉々に破壊した。

「あぁ！　てめぇ??!　やってくれるじゃねえか。　そんな事したら俺がライラに怒られるだろ！」
サーチェが喚き散らす。
どうやら彼はライラに苦手意識を持っているようだが、そんな事は関係ない。
「黙れ。　変態に慈悲などない！」
そう言って再び剣を構える。
するとサーチェは手を挙げて。
「前から思ってたけどキャラ変わりすぎだろ??わかった??わかったよ。　俺が悪かった。　ただ、どうしてもお前に来て欲しい理由があったんだよ」
そう言ってサーチェは僕を見つめる。
そして??
「お前のドラゴンを討伐したあの能力（スキル）を使え。　それの上手い使い方を教えてやるよ」
「??良いんですか？　死ぬ可能性もありますよ」
「安心しろ、覚悟の上だ」
「分かりました??」
僕は、心の中で『解放（オープン）』と念じる。
「行きますよ??」
赤くなった双眼で、何やらそわそわと落ち着きのない様子のサーチェを見つめる。
「あぁ、来い！」
「上位者の名において命令する。　『死ね』」
僕は、迷いなくサーチェに命令する。
――しかし、何も起こらない。
やはり彼には『絶対服従』は通用しないようだ。
「よし。　睨んだ通りだったな。　セリカ、お前そのスキルのこと命令するだけのスキルだと思っていないか？」
「??違うのですか？」
僕はサーチェに問う。

彼は少し考えた後??
「あくまで仮定だが。　そのスキル、上手く使えば色々な用途に応用できる。　そのスキルは身体中に巡らせた魔力を目に集中させてそれを相手に叩き込めるスキルだろ？　だから、それを応用するんだ」
「??応用とは？　具体的にどうすれば良いんですか？」
「近えよ??。　それは分からねえ。　答えは自分で見つけろ。　んじゃそろそろ寝ろよ」
――ふぁぁぁ。
そう欠伸して彼は寝室へと向かおうとする。
「待ってください。　最後に一つだけ」
僕が声をかけると、サーチェがビクッと肩を震わせ、恐る恐るといった様子でこちらを振り返る。
少し気になるところがあったが、僕は自分の質問を優先した。
「どうして??私がドラゴンを討伐したことを知っていたのですか？」
「??ん？　あぁ、それか。　そいつは俺が倒そうとした獲物だったから、だ。　そこでたまたまお前に会って興味を持ったからその鞘を渡したんだよ。　ただの偶然だ。」
――早く寝ろよ。
そう言って今度こそ彼は寝室の中へと消えていった。
「ただの偶然??か？」
やはり引っかかる所はあるが、そう言われた以上、気にしても仕方ない。
「『魔眼解放』の使い道??か。」
それを思案しながら僕は睡眠をとるべく自室へと向かっていった。
――
「はぁ??はぁ。　危ねぇー！」
王城の一角、国王の部屋の寝室にて荒い息が聞こえる。　その部屋の中で、サーチェはベッドの上でブツブツと呟いている。
「さっきセリカに呼びかけられた時は終わったかと思ったぜ??」
そんな彼の手に握られているのは白い布。
「よし！　ここなら邪魔者はいないし、心置き無く楽しめるぜ??。

ただ、今日は眠いから明日にするか??」

――そうしてサーチェは眠りについた。

翌朝、憤怒の形相のセリカに半殺しにされることなど知る由もなく??。

能力の使い道②

「失礼します」
今日もメイドに休みはない。
僕は主人であるサーチェを起こすために、部屋に向かう。
寝室に入り、眠っているサーチェを見つめる。
――今が好機だ。
僕は『魔眼解放』を使う。
目が赤く染った。
サーチェが起きる瞬間。
おそらくそれが、最も抵抗が弱くなる瞬間だろう。
『起きてください！』
練った魔力を僕は、サーチェの僅かに開いた目に叩き込む。
「うーん。　起きる??起きるから??グゥ」
そう言って再び夢の世界へ旅立っていった。
（はぁ??。やっぱりか）
やはり、サーチェには『絶対服従』が通用しないようだ。
（しかし??どうするか）
サーチェは本当に朝が弱いのだ。
これのせいで毎朝起こすのに苦労する羽目になっている。
「起きてください！　朝ですよ～」
身体を強く揺さぶるが、彼が起きる様子は無い。
（やれやれ??ん？）
呆れて周囲を見回していたところ、視界の先に白い何かが映った。
気になり、それに向かって手を伸ばす。
――感触を確かめ、掴む。
（これは！）
僕の手に握られているのは、白い布。
昨日使った僕の下着（パンツ）であった。
「??ご主人様？　これは??何でしょうか？」
僕はサーチェにそれを見せながら問う。

「ん？　んだよ??。　??あ」
　サーチェはそれを視認した途端、それまでの薄らと開いていた目を全開にして鋭い目付きとなる。
「見ちまったな??セリカ。　禁断の箱（パンドラボックス）を」
　よく分からないことを口走ったかと思うとサーチェは昨日までとは比べものにならない程の魔力を解放した。
（これは??悪魔討伐の本気程ではないが??かなり強い！）
　サーチェは普段から自分の力を常にセーブして戦う。
　そんなことをする理由は、余裕を持って対応することが勝利への秘訣だから??らしい。
「行くぜ？」
　そう呟いたかと思うと、サーチェはいきなりトップスピードで僕の横を駆け抜け??下着（パンツ）を掠めとろうとする。
「あ？」
　サーチェが怪訝な声をあげ、自分の手元を見る。
　――そこに僕の下着は無い。
「渡しません！」
　そう叫んだ僕は、下着を固く握りしめてサーチェを睨む。
「マジかよ??。　よく避けたな??っと」
　そう呟きながらサーチェは僕の放った一閃を躱す。
「おう、どうやって避けたんだ？　今までだったら対応できないくらい速く走ったつもりだったんだが??なるほど、そういう事か」
　そう質問してきたサーチェは、僕の赤く染った目を見つめてひとりで納得した。
「お前のスキルの新しい使い方を見つけたんだな。良くやった。　でも??」
　――ソイツは返してもらうぜ。
　そう呟いてサーチェは再び構える。
「近寄るな！　変態め！」
　眼前のサーチェは先程より更に魔力を高め、肉食獣のような瞳で僕の下着を見つめている??。

しかし、こんな男に僕の下着を渡す訳にはいかない。
（どうするか??そうだ！　今ならあれが使えるかもしれない。）
僕は頭に浮かんだ作戦を実行すべく、災厄（ディザスター）を再び構えるのであった。

能力の使い道③

時は少し遡って、サーチェが僕に飛びかかる前となる。

「見ちまったな??セリカ。　禁断の箱（パンドラボックス）を」

そう口走ったサーチェの身体を今までとは比べ物にならない程の魔力が包んだ。

（これは??まずい）

サーチェの狙いが下着（パンツ）だと言うことは分かっているため、彼が来る場所は分かるのだが避けきれる自信が無い。

僕は悪あがきをするべく、身体強化魔法をかけられるだけかける。

魔力が巡り、身体を強化する。

（この感覚って??もしかしたら！）

僕はその感を信じて『魔眼解放』を発動して魔力を巡らせる。

――魔力を目に集めるのではなく、身体中に巡らせることによって

（予想通り）

内心でほくそ笑む。

『絶対服従』発動の魔力を、目にでは無く身体に巡らせる??そうする事で身体強化魔法と同じ効力を得られるのだ。

僕の身体は現在、二種類の身体強化を受けサーチェに負けず劣らずの運動量を備えている。

今なら――――回避可能だ。

「行くぜ？」

そう言ってサーチェが走り出す。

（速い！　??が）

突風のように迫り来るサーチェの手から逃げるべく、僕はその場から横に飛ぶ。

――――ギュン！

僕が元いた場所にサーチェが立つ。

――――こうして僕はその一撃を避けきったのだった。

――――

僕は赤く染った双眸でサーチェを捉える。
「無駄だ。　俺にそれは効かねえよ」
「そうですか??それは残念です」
両手を大きく広げながらサーチェはそう言った。
しかし??残念だな。　僕の目標はそれじゃない。
「はァァ！」
「??うおっ！　いきなり来るかよ！」
一瞬の虚を突いて僕はサーチェに向かって走る。　それが予想外だった様子の彼は、その攻撃の回避に専念する??
（右とみせての左への回避！）
しかし、僕にはその回避先が手に取るように分かっていた。
「??は？　??嘘だろ？」
サーチェは驚いたような声をあげて??咄嗟に剣を抜いて攻撃を受けた。
「よく??分かったな！」
「??ッ！」
鍔迫り合いの状態からサーチェが力だけで僕を押し飛ばす。　そして??攻撃に転じた。
（右からの横薙ぎ??左への返し斬り！）
サーチェの打つ手が、僕には全て手に取るように分かる。
これこそが僕のもうひとつの能力??『読心』であった。
「??マジかよ。　??よく避けたな」
「これで負けません！」
冷や汗を浮かべるサーチェに向けて大きく一歩を踏み出す。　そして??そのまま飛びかかろうとして??
「あ??れ？」
まるで糸が切れたかのように、僕の意識は途切れたのだった。
――――
「??は？」
ちょっと待ってくれ。　情報量が多すぎる。
セリカの動きが急に気持ち悪いくらい良くなったかと思ったら

ぶっ倒れたんだが??。
「おーい。　セリカー？　生きてるかー？」
ペシペシと頬を叩くと、微細ながら反応があった。
??どうやら生きているようだ。
多分だけど??魔力の使い過ぎだな。
全くこいつは魔力の使い方が下手くそだぜ??。
やれやれと思いながら俺はセリカから下着（パンツ）を奪還する。
「へへっ。　??手間かけさせやがって」
劇に出てくる山賊のようなことを口走りながら、俺は箱の中にそれを仕舞い、鍵をかけた。
??これでよし。
「さーて。　飯でも食いに行くかなーっと」
朝から動き過ぎてもうヘトヘトだ。
早く飯にありつきた??
「陛下！　何を騒いでいるのですか！　メイドたちから苦情が来ておりま??」
「あ」
顔を赤くして俺の部屋に飛び込んできたライラは、倒れ伏すセリカを見て更に顔を赤くした。
「何をされているのですか！　陛下??こちらに来てください！」
「えちょっと??待って？　誤解??誤解だぁぁぁ！」
弁解の余地もなく、俺はライラに連れて行かれて事情聴取を受けた。
その時は俺の身の潔白（ウソ）を説明して何とか信じて貰えたものの??後に目覚めたセリカによって真実が語られた上に、箱をこじ開けられて証拠品まで押収されてしまった。
「陛下！　今日は飯抜きです！　しっかり反省してください！」
――――飯抜き
それが俺に下された刑罰であった。
――――
「ふふっ。　面白いなーヴァイスくんは」

暖かみを感じさせる木造の屋敷の中で、水晶玉を見つめながらポツリと呟く妖艶な美女がいた。
「待っててね～！　もうすぐそっちに行くから～！」
その女――――サヤは、机の上に置かれた紅茶を口に含みながらそう叫ぶのであった。

女神登場

いやはや早いもので、僕がメイドになってから今日で四十日が経過した。

この短期間で僕がサーチェに仕掛けた暗殺は合計で七十六回。

ちなみに、その内で攻撃に成功したことは一度もない??。

当初は自分の力不足を嘆いていた僕であったが、最近ではサーチェの異常さを前以上に感じるようになっていた。

普段は隙だらけで腑抜けただらしない顔をしているくせに、いざ攻撃を仕掛けてみると神がかった反応速度で確実に回避し、反撃してくるのだ。

平和な時代に生まれたのが不思議な程の、正しく天災であった。

??とここまで後ろ向きな話ばかりしてきた僕だが、勿論収穫はあった。

それこそが能力である『読心』である。

この能力を言い表すとしたら『燃費の悪い高速魔導車』である。

相手の思考を読む、という強力な能力の代償として物凄い量の魔力を消費するのだ。

サーチェには及ばないにしろ、この時代では強大と言える僕の魔力量でさえも、五回も使えばすぐさま魔力欠乏症を起こして倒れてしまう程に。

ちなみに、この身体の持ち主の少女も数ヶ月に一回程しか使えていなかったようだ。

ただ、使っていく度に本当に少しづつではあるがコツが理解できて消費魔力を抑えることに成功している。

もしかしたらその内、連発できるようになるのかもしれないな。

「お！　セリカちゃん！　今日も可愛いねぇ！」

「??え？　あっ！　ありがとうございます！」

思考の最中に掛けられた声に、少し怪しい挙動をとりながらも何とか笑顔を作りながら返答した。

蛇足だが、この短期間で愛想笑いもかなり上手くなったと思う。

「今日も買い出しかい？　頑張るねぇ！」
「いえいえ。　これも仕事ですので」
「国王様の護衛もしてメイドとしての仕事もこなすなんて??凄いねぇ。　おばちゃん感動したよ！」
「ふふっ。　ありがとうございます」
目に腕を当てながら、感極まった様子の彼女。
彼女は、僕がメイドとしての買い出しの仕事でよく向かう食料販売店の店主だ。
僕はそんな彼女から、指定された食材を購入していく。
「しっかし??セリカちゃんは力持ちだねぇ」
「そうですかね???　まぁ鍛えておりますので」
多くの食材が入った袋を担いだ僕に、そう言い放った店主へ向けて僕は腕を曲げて、ぷにぷにの二の腕を見せる。
ほんの小さなジョークだったが、店主は手を叩きながら大笑いしてくれた。
「ところで??セリカちゃん知っているかい？　あの話」
「あの話??と言うと？」
世間話好きの店主に付き合ってしまうと、長話になることは目に見えていたが、戻っても特にすることがないので、暇つぶしに聞いてみることにした。
店主は客への対応をするつもりがないのか、近くの椅子に座り込んで話し始めた。
「最近、王都で話題の占い師がいてねぇ」
「占い師??ですか」
「聞かれたことは、何でも答えが出せる。　って言われてるんだ」
「なるほど??」
占い師??か。
胡散臭いことこの上ないが、それほど当たるというのも気になるものだ。
いくら優れた占い師と言えど、人間ならば失敗もあるはずだ。
それなのに??必ず答えが出る、という噂が広がっているのは奇妙な

ものだ。
　店主が語る、質問に対する占い師の回答を聞いても、偶然に答えられるとは考え難いものばかりであった。
「その占い師はどこに？」
「それが分からないらしいんだよ！　急に現れたかと思ったら、急に消えたりするらしいんだ！」
「はぁ??」
　なんだか一気に胡散臭さが増した。
　そんな神のような人間が果たしているのだろうか？
「??他に何か、その占い師についての噂はないんですか？　外見の特徴とか」
「そうそう！　外見がまた凄くてねぇ！　黒髪で絶世の美女らしいんだ！」
「黒髪の??美女？」
「そうそう！　腰ほどまでの長い髪らしいよ！」
「??なるほど。　もしかして、能天気で軽い言葉遣いとかではありませんよね？」
「いや、その通りだよ！　なんだいセリカちゃん？　もしかして知り合いかい？」
「??いえ、ただ聞いてみただけです。　中々に不思議な方ですね」
　口ではそう言った僕だったが、内心ではその占い師の正体に確信を抱いていた。
　??サヤだ。　その占い師はサヤである。
『私もすぐにそっちに向かうから！』
　僕が出発する前に彼女が言っていた言葉を思い出した。
　彼女の軽口だと思っていたから、まさか本当に来るとは思っていなかったな??
「そんな目立つ真似をしているのも、有名になって僕に会うため??なのか？」
　僕が思考を巡らせ始めた正にその時であった。
「そこのお姉さん！　占い、やっていかない？」

鈴のように美しい声が耳に届いた。
「あれ？　ねぇ??聞いてる？　お姉さんってば！」
必死に僕を振り向かそうと声をかけてくるその女を無視する。
ここで振り返ったら絶対に面倒くさいことになると確信していたからだ。
「ねーえってば！　ヴァイスくん！　いや、魔王のてんせ??」
「??なんだ」
「お！　ようやく振り向いてくれたねぇ」
ニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべるその女??サヤを見て振り返ったことを心底後悔する。
??仕方ないことだ、あのまま振り返らないと僕の絶対に守り通さねばならぬ秘密を暴露され金なかったからな。
そんな僕を他所に、気がついた時には遅く、既にサヤは僕を抱き締めていた。
彼女の豊満な胸が僕に容赦なく襲いかかり、何故かえも言えぬ敗北感が感じさせられた。
「ふっふっふ～！　ヴァイスくん、お待たせ！」
そんな僕の気持ちなど露知らず、心底嬉しそうに言い放つサヤであった。

女神潜入

「??一体何をしに来たんだ、サヤ」
「うん？　いやいや、私言ったでしょ？　すぐにそっちに行くって」
　長い黒髪をクルクルと弄るサヤは、何を当たり前のことをと言わんばかりの表情だ。
「??聞いてはいたが、唐突すぎる。　もう少しどうにかならなかったのか？」
「ふ～む。　それは難しいねぇ。　そもそもこんなに早く会うつもりは無かったし」
「そうなのか？」
「うん。　も～ちょっと王都で有名になってからにするつもりだったんだけどねぇ。　ヴァイスくんが正体に勘づいたみたいだったから仕方なく、ね」
「そんな腑抜けた顔で言われても信憑性がないぞ」
　口角を緩ませてそんなことを言われたところで、全く申し訳なさが湧いてこない。
「え～？　??まぁいいや。　そんなことより、ヴァイスくんもメイドとしてちゃんと働いているようで感心だよ～！」
「ん？　まぁ??な。　暗殺の方はさっぱりだが」
　メイドとして働いている、と言っても本職は護衛だから息抜き程度に手伝っているだけなのだが。
「まぁ??僕のことはいいとして、だ。　わざわざ会いに来たってことは、僕を手伝ってくれるんだろ？」
「う～ん？　仕方ないなぁ！　特別に私が手伝ってあげるよ～」
「??いや。　別に嫌だったら大丈夫だ。　悪かったな」
　そんなことより、早く王城に戻らなくては。
　余計なところで道草を食ってしまった自分に反省しながら、僕は振り返って足を踏み出す。
「ちょっと～！　ごめんって！　手伝わせてくださいお願いします～」

そんな僕の足を抱き締めて、離さないとばかりのサヤ。
ふっ。　最初から素直に言えばいいものを。
まぁ人手が足りないことは事実だから、協力者が多いに越したことはない。
「分かった。　そう言うことなら仕方ない。　??着いてくるんだ」
「わ～い！　ありがとう！」
屈託のない笑顔を浮かべたサヤは、そう言ってピョンピョンと跳ねながら僕の後を着いてくるのだった。

――――――

「??さて。　入るぞ」
「??え？　こんなに堂々と入って大丈夫なの？　ほら、あそこに衛兵さんいるし」
王城の目の前にある城門に辿り着いたその時、今更ながら怖気付いたように青い顔で問うサヤ。
「??まぁ見てろ」
「え？　ちょっと？」
答えることも煩わしく感じた僕は、黙ってサヤの手を握る。
何を勘違いしているのか、彼女は顔を赤らめて「そんな急にされても心の準備が??」と甘い吐息を吐きながら呟いていた。
そんなどうでもいい事など気にせずに、僕は頭を動かして目当てのもの??影を探す。
??お！　あれがいいな。
僕は、城門に出来た影へと意識を集中させる。
「いくぞ、サヤ」
僕は影移動を発動させ、始めに自分の下にできた影へと潜る。
そのまま影の中を泳ぐようにして、先程狙いを定めた影へと移動する。
「でも??ヴァイスくんがどうしてもって言うんなら??って、え？　今なんて言ったのぉぉぉぉ！」
慣れない影移動に奇怪な声をあげるサヤを無視して、僕は城門の上へと影移動を成功させた。

「??これで侵入成功だ。　あと、少し黙ってろ」
「いやいや！　だって前触れもなくいきな??むぎゅっ！」
　僕の言葉を聞く素振りもないサヤの口元へと手を当てて強制的に黙らせた。
　そんな状態でも、ふごふごと忙しなく口を動かして何かを喋ろうとするサヤ。
「事情とか不平不満とかは後で聞くから、今はとりあえず僕の部屋を目指すぞ。　とりあえず、城門から降りよう」
　首を縦に動かして肯定の意を示すサヤ。
　僕はそれを確認した後に、安全性を考慮して、彼女を背中に抱えて近くにあった大木に向かって飛び込むことを決意する。
　影移動は、今の身体だとそこそこの魔力を使うから、あまり連発はできないのだ。
「ちょっとヴァイスくん！　危ないよ！　下に人がいたらどうするつもりなの？」
「大丈夫だ。　この時間、皆が仕事をしている時間。　平時でさえ殆ど人が訪れないこんな場所にいるはずがない」
　本当なら安全に木を伝って降りたいのだが、サヤを抱えた状態でそれは不可能だし、葉っぱが生い茂った大木の下を覗き込むことも難しい。
　まぁ??サヤは恐らく聖魔法が使えるだろうし、最悪の場合は治療を任せることにしよう。
「??いくぞ！」
　意を決した僕はそう小さく呟いて、離陸して宙を舞った。
　やがて大木の葉っぱに突入し、それがクッションとなって勢いを弱める。
　あとは地面に着地するだけ??
　僕がそう思案した、その時であった。
「ん？　お!?　うぉぉぉ！」
　どこか聞き覚えのある間抜けな声が聞こえたような気がした。
　それについて考える余裕もなく、大きな音と砂埃を立てながら地面

に着地する。
「おーい？　誰だよ??こんな馬鹿な真似をしやがったのは??ってお前かよ」
「??ご主人様」
砂埃が去って視界が晴れたその場所に立っていたのは、国王の正装を着崩した端正な顔立ちの青年。
サーチェであった。
「??ったく。　いいかセリカ。　幾らお前が俺を殺したいからっていつでも俺を襲っていい訳じゃ??って誰だお前？」
「??ギクッ」
サヤを認識したサーチェが問いかける。
??まずい。
顔を真っ青にして言い訳を考えるサヤを尻目に、僕も必死で頭を働かせるのであった。

勇者ＶＳ女神

「え～っと??私はねぇ??」
「おう。　なんだよ??」
　しどろもどろになって視線を巡らせるサヤを、サーチェは訝しげに見つめる。
　先程からチラチラと僕に救いを求めるような視線を向けてくるのだが??僕の頭にも妙案が浮かぶ気配はなかった。
「??おい。　なんか言えよ」
「あはは??」
　愛想笑いを浮かべるサヤを明らかに不審がるサーチェは腰の愛剣に手をかけていた。
　これは非常に宜しくない状況だ??どうにかしないといけない。
　サヤが女神だと悟られないように上手い嘘をつかなくては??そうだ！
「??ま、魔法顧問です。　ご主人様の」
「魔法顧問？」
　僕の言葉にサーチェは振り返り、疑問の目を向ける。
　僕は嘘であることが表情に出ないよう心血を注ぎながら続ける。
「ご主人様は大量の聖法気と魔力を有しているのに、魔法は障壁（バリア）くらいしか、ましてや聖魔法など少しも使えないではありませんか。　魔法に関しては私も少しばかり教えることはできますが??聖魔法は無理ですので、この者を連れてきた次第にございます」
「ふーん。　そうなのか？」
「え!?　うっ??うん！　そうだよぉ！」
　僕の言葉に納得したように頷きつつ、サーチェはサヤの方へと向き直って彼女へと問いかける。
　明らかに怪しく返答した彼女だが、サーチェは意外にも頷くのみであった。
　しかし、僕が胸をなで下ろしたのも束の間、サーチェは予想だにしない行動に出た。

「??!」
「だったら、俺の相手をするくらい訳ないよな？」
いつの間にか希望（ラジエルダ）を抜いたサーチェがそれをサヤの喉元へと突きつけていた。
思わず一歩仰け反った彼女に合わせて、サーチェも一歩間合いを詰め直す。
緊張で空気が張り詰め、一触即発の状態となった。
「??ご主人様？　何をしているんですか？　あくまで彼女は客人なのですよ？」
「??ハハッ。　冗談だよ。　そんな怖い顔すんなって」
僕の言葉に、サーチェは小さく笑いながら剣を収めた。
やれやれと思いつつ、心の中で安堵した僕を他所に何を思ったのかサーチェは軽く身体を引いて拳法の構えをとった。
「安心しな。　剣は使わねぇよ」
「??え？　いやいや。　そう言うことではなくて??」
「ん？　客人だから剣は使うなってことだろ？　分かってるって」
何を当たり前のことを、と言わんばかりの表情のサーチェの間違いに頭の痛い思いである。
「そうではなくて、戦うことをやめろと言っているのです！」
「いやいや。　それはねぇだろ？　だって俺の顧問になるってことは、セリカと同じで国王直属になるってことだ。　だから選ぶ権利は当然俺にあるし第一、戦いに関して弱いやつに教えられてもしょうがないだろ？」
「??はぁ」
「俺がセリカを護衛にしたのも、お前が強かったからだしな。　本当だったらぶち殺してるところだったからな？」
「そうは言っても??」
「??もういいよ、ヴァイ??じゃなくてセリカちゃん」
僕がサーチェに依然噛み付こうとしたその時、サヤの美しい声が静止を促した。
振り返ると、そこには銀色の杖を構えたサヤが悠然と立ち尽くして

いた。
「やる気だな？　手加減はなしだ。　本気で来いよ？」
「むしろ、手加減ありで勝てるなんて甘く見られたくないんだけどね～」
「ハハッ。　おもしれぇな、お前。　名前は？」
「サヤ、だよ。　んじゃ、やろっかサーチェくん」
ニヤニヤと微笑を浮かべ合って見つめ合う双方。
お互いに後ろに下がり、ある程度の距離をとったところで武器を構え合う。
??先に動いたのはサーチェであった。
軽い動作で走り出し、恐るべき速さでサヤとの間合いを詰めていく。
そして??サヤとの距離が最初の半分ほどに迫ったその時、サーチェは大きく跳躍した。
そして??渾身の蹴りを繰り出す。
『清めたまえ神の御業よ。　虚偽を打ち砕き真理を示せ』
それと同時に恐るべき速さで詠唱を完成させるサヤは、身体を捻ってその一撃を躱す。
「??テリャァ！」
「ふふふ！　甘いよぉ！」
着地したサーチェが繰り出す拳打を、サヤは時に躱し、時に捌き、時に杖で受け止めることで完全に見切っていた。
「??やるな、お前」
「へへんっ！　そう弱くはないよぉ！」
鼻を擦りながらそう言い放つサヤ。
彼女の美しく長い黒髪は、彼女自身の溢れ出る聖法気を受けて眩く輝いていた。
「??セリカ」
「はい？」
そんな彼女の髪をぼんやりと眺めていたところ、サーチェに声をかけられた。

「わりぃ。　やっぱり全力で行くわ」
「は？　それはどういう??」
僕の質問に答える前に、サーチェは行動でその答えを示した。
彼はサヤに勝らずとも劣らない聖法気量を解放して??腰の愛剣に手をかける。
そして??抜き放った。
彼の言う全力。
つまり、勇者の剣である希望（ラジエルダ）の使用。
「さぁ??二回戦と行こうか」
「いいねぇ。　ゾクゾクするよ！」
互いに笑い合いながら、再び聖法気を纏った武器を構え合うのであった。

勇者ＶＳ女神②

「??厄介だな。　お前の魔法」
サーチェは鋭い剣撃を繰り出しながら、苛立たしげに呟いた。
双眸にサヤを捉えながら、何度もサヤへと切りつけるがサヤはそれをそよ風のようなステップで華麗に躱し続けていた。
「いやいや。　こっちだって困ってるんだよ？　私がどれだけ魔法撃っても全部捌いてくるんだから！」
「??っと！　そう言いながら攻撃してくるとは、なかなかに強かじゃねえか」
「ふふっ！　隙は狙わないとね～。　でも、しっかり躱してるじゃん！」
「遅せぇんだよ。　杖向けて撃つ攻撃なんざどれだけ早くても来る場所が分かってるんだから」
サーチェはその言葉通り、先程から一度の掠りすらもなかった。
サーチェの体力は底なし沼と言えるほどに強大だ。
それに比べてサヤは回避や攻撃のために多くの聖法気を使用しているから??この勝負長引けばサーチェの勝ちが確実となることだろう。
「え～。　しょうがないなぁ」
しかし、状況が理解出来ていないのか唇を尖らせたサヤの顔に浮かぶのは満面の笑みであった。
次の瞬間、彼女は杖を突き出す。
『聖なる光よ。　槍となりて我が敵を貫け！』
サヤが完成させた詠唱は、先程から彼女が多く使用する攻撃魔法と全く同じものであった。
光速にも迫る速度で光の槍がサーチェへと放たれる。
しかし??
「俺の話を聞いてなかったのか？　同じことばっかしても意味がな??っ！」
その攻撃を、跳躍で易々と回避したサーチェの顔に苦悶の色が浮か

ぶ。
次の瞬間、地面に崩れ落ちるように着地した。
何があったのかとサーチェを観察すると、脇腹の辺りに焼け焦げたかのような跡があった。
まるで激しい雷光に刺し貫かれたかのように。
「何をしたんだ？　今のは明らかに詠唱した魔法とは別のものだったはず??」
「ん～？　どうしょっかな～。　まぁいいや！　特別に見せてあげるよ！」
子どものような悪戯な笑みを浮かべたサヤは黙って指先をサーチェへと向けた。
そして??その指先から雷光が放たれ??サーチェ近くの地面へと着弾した。
その部分に生えていた雑草は黒く焼け焦げ、その魔法の威力を物語っていた。
「「無詠唱??魔法」」
「そっ！　せ～かい！」
僕とサーチェが導き出した同じ答えに、サヤは嬉しそうに肯定の意を示した。
『無詠唱魔法』それは『解呪』と同じように、魔法の論理を完全に理解した者のみが使用できると噂されている技のことだ。
しかし、その難易度は『解呪』の比ではなく、あくまで存在が確認されているのみの正しく絶技であった。
僕たちが魔法障壁（バリア）のことを障壁とするような詠唱短縮で唱えることとは、一線を画す難しさなのだ。
「??まっ私が使えるのは本当に初級の雷魔法だけだけどね～」
何事もないかのように呟くサヤであったが、先程の魔法の威力は初級魔法だとしても絶大なものであった。
ましてやそれを無詠唱で撃てるなど??背筋が凍る思いである。
「??いーや。　凄いな」
サーチェも同じことを感じたのか、素直な賛辞を述べる。

パチパチと手を叩いてサヤを賞賛していた。
「あれ？　もうお終いかな？」
それを敗北宣言だと受け取ったサヤは気がついていない。
背後から近づく一つの影に。
「終いだ」
「??あら」
奇妙な声を上げながら背後から近づくもう一人のサーチェに拘束されるサヤ。
首元に短刀を突きつけられて完全に身動きを封じられていた。
「え～！　ねぇちょっとズルくない？」
「うるせぇよ。　油断する方が悪いだろ」
サヤは身体を揺らして脱出を試みるが、豊満なそれが揺れるだけで拘束を解くことは出来なかった。
??別に悔しくなんかはない
「もしかして??ワザと私の無詠唱魔法喰らったの？」
サヤが恐る恐るといった様子でサーチェに聞く。
いやいやまさか。
いくらサーチェといえどあんな初見殺しの技に反応できるわけが??
「あ？　当たり前だろ。　なんか狙ってるのは分かってたからずっとお前の視線を追ってたし」
「「うそ??」」
当たり前のように答えるサーチェに僕たちは唖然とする。
つくづくサーチェの凄まじさに驚かされてばかりだな。
そんな僕の気持ちを他所にサーチェは大きく笑う。
そして??サヤの手を取った。
「??へ？　いきなり何？」
「でも、試験は合格だ。お前の全力を持って俺に教えてみせろ」
戸惑うサヤにそう傲慢に言い放つのであった。

女の子部屋

「んじゃ。　そういう事で。　今日はセリカの部屋に泊めてもらえ」
「え？　ご主人様？　それは流石に??」
「うん！　ありがとう！　じゃあそうさせて貰うね！」
「ん。　んじゃそういう事で」
　嫌だ、と言おうとした僕の言葉を遮ったサヤに頷きで返したサーチェはそれっきり近くの大木に腰掛けて眠ってしまった。
　??こうなってしまってはそう簡単に起きないことを今までの生活で十分に理解した。
「えへへっ！　嬉しいなぁ～」
「??仕方ない。　ただし、絶対に変なことをするなよ」
「うんうん！　分かってるから早く連れて行ってよ～！」
「??分かった」
　全く話を聞いていない様子のサヤに内心で呆れながら、僕は地面に落ちてしまった買い物袋を拾って王城へと歩き出した。
「いや～。　本当にサーチェくんって人間なの？　強すぎるんだけど!?」
「サーチェが常識破りなのは今に始まったことではないがな。　ただ、明らかに異常な強さだ」
　周囲に人がいないことを把握した僕は、素の状態で会話をする。
　思えば素の言葉遣いでの会話は久しくしていなかった気がするな。
「勇者の血筋だからあんなに強いのかな？」
「それもあるかもしれないが??口ぶりから察するに、師匠がいたようだぞ。　恐らく血のにじむような努力を重ねたのだろうな」
　自分の過去についてあまり話したがらないサーチェだから、あくまで推測の域を超えないのだが。
「え～？　サーチェくんが修行??ねぇ？　まだ知り合って間もないけど、そういうタイプには見えないけどなぁ？」
　僕の言葉にサヤは首を傾げる。
　恐らくサーチェが真面目に修行する姿が思い浮かばないのだろう。

無理もない。　サーチェは精神的に幼いからか、極端に人前で努力することを嫌うからな。
「意外とそうでもないぞ。　サーチェはものすごく努力家だ。　毎晩こっそりと王城の庭園で修行しているからな」
「え！　意外だなぁ??」
目を丸くするサヤ。
僕も初めてそれを知った時は物凄く驚いたことを記憶している。
なかなか寝付けない夜に星でも眺めようかと、庭園に出た時に、偶然見かけたのだ。
そこから数日間、自室から庭園を眺めてみると毎晩サーチェが同じ場所で修行していたし、日課なのだろうな。
「ところで??サーチェくんのその師匠さん？　その人も多分、人並み外れた強さを持ってたんでしょうね～」
「あぁ。　それこそサーチェすらも相手にならない使い手かもな」
「もしかしたら??人間じゃなかったりして！」
「まさか。　そんなことはないだろう」
「だよね～」
冗談めいた声色でそう言ったサヤは、僕の返答に小さく舌を出して答えた。
「さて??ここが僕の部屋だ」
話題が切れたタイミングで区切りよく、自室の前に到達した。
それまで通った一般のメイドや庭師などの部屋とは明らかに別の絢爛な装飾が施された重厚な扉。
その扉には、僕の部屋であることを示す『セリカ』と書かれた立て札がかけられていた。
「わ～お。　でっかいねぇ??」
「まぁな。　僕は中々に高位の役職なんだ」
「サーチェくんがさっき言ってた国王直属ってやつだっけ？」
「あぁ。　その通りだ。　??ってサヤも僕と同じ立場になるのか」
「そ～だね。　私もこんな感じの部屋が貰えるのかな？」
「どうだろうな？　多分、今の国内にそこまで余裕がないとおもうぞ」

「え～！」
唇を尖らせるサヤ。
しかし、仕方ないことなのだ。
新体制となったマグノリアでは、改革に次ぐ改革が推し進められており、常に国家予算がギリギリの状態で運営されているのだから。
正直、個人的にはどこかと戦争でもして賠償金で儲けるべきだと思っている。
最も、人間兵器とも言えるサーチェが平和主義者だから実現しないと考えているのだが。
「??さて。　歓迎するぞ、入れ」
「わ～い！」
どうでもいいことを考えるのはやめにして、僕は胸ポケットから鍵を取り出して自室にサヤを招き入れる。
彼女は子どものようにはしゃぎながら部屋の中へと飛び込んで行った。
「??え？」
「ん？　どうしたんだサヤ？」
すっかり見えなくなったサヤの背中を追って僕も部屋の中に入ろうとしたところ、先程意気揚々と入っていったはずのサヤが不思議そうな顔をして戻ってきていることに気がついた。
「??ここって本当にヴァイスくんの部屋？」
「??あぁ。　そうだが??どうしたんだ？」
「うそ??とりあえず、ちょっとこっち来て！」
驚愕の色を見せたサヤが僕の腕を引っ張って部屋の中へと導いていく。
やがて開けたリビングにあったのは、愛用のソファと眠るためのベッド。
あと、エイリさんがくれた連絡機能を備えた熊のぬいぐるみであった。
サヤのただならぬ様子から何かあったのかと不安に思ったが、どうやら杞憂だったようだ。

しかし??何が問題なのだろうか？
「これがどうかしたのか？」
「どうかしたのか、って??本当に言ってるの？」
サヤは肩を震わせながら問いかけてくる。
??本当にサヤが何を言いたいのかが分からない。
「だから??何が言いたいんだ？」
「なんで??」
「ん？」
「なんでこんなに殺風景な部屋なの？　ヴァイスくん、今は仮にも女の子なんだからもう少し可愛らしい部屋にしなよ!!」
「??は？」
「こんな真っ白な壁じゃなくて、ピンクとかにして??あともっとリボンとかも巻こうよ！　あとは??」
「え？　おい、サヤ？」
「私に任せてヴァイスくん。　完璧な女の子の部屋を作ってあげるから」
戸惑う僕を他所に、自分の世界に入り込んでしまったサヤは、杖を取り出して何やら詠唱を始めるのであった。

魔王の狂信者

「おーい？　サヤ？」
「ん？　何かなヴァイスくん？」
「いや??その、僕はメイド長にこれを届けに行くからしばらく戻らないから。　まぁ好きに寛いどいてくれ」
「はいは～い」
　そう言い残して僕は荷物を持って部屋の外へと出る。
　サヤは何やら「女の子の部屋」というものを作るために奮起しているようだし、まぁ暴れないならそれでいいだろう。

――――

「遅くなってすいませんメイド長。　これが今回の買い出しの分です」
「いえいえセリカ様！　本当にお手伝い頂きありがとうございます！」
　腰を綺麗に折り曲げて例をするメイド長は、二十二歳とまだ若い年齢なのに敏腕で働き者である。
　感謝の時に見せる小さな笑顔が可愛らしく、王城内でも人気な人物なのだ。
　以前サーチェに『お前もあれくらい愛想よく振舞えよ。　顔は悪くないんだから』と言われる程の愛想の良さで正直思うところがない訳では無い。
「??その、セリカさん！」
「はい？　なんでしょうか？」
「えっと??その??」
　モジモジとしながら上目遣いで何かを言いたげに見つめてくるメイド長。
　やがて、意を決した様にじっとこちらを見つめてきた。
　その風貌に思わず身構える。
　何か問題を起こしてしまったのだろうか？
　いや??まさかそんなことはないはずだ??ろう。

もしかして??この間、仕事中に噂の喫茶店に寄り道したことが知られたのか??!?
「私とご飯に行ってくれませんか!?」
「??へ？」
「いやいや！　別に無理だったら大丈夫ですよ！　ただ、ちょっとどうかな～って聞いてみただけですから！」
「??え？　ちょっと??」
予想だにしないメイド長からのお願いに、思わず肩透かしを食らってしまう。
色々と考えてしまったが、とりあえず大丈夫だったようで一安心だ。
それはそうとして??早口で捲し立てるメイド長の剣幕に呆気となってしまったが??
「ご飯ですね。問題ありませんよ？　予定を開けておきましょう」
「別にセリカ様がお忙しければ私は全然??ってえ？　良いんですか!!」
「あっ??はい。　セリカ??様？」
「あ！　??いえ。　なんでもないです！　とりあえず、ありがとうございます！　ありがとうございますセリカさん！」
「??えぇ」
「それでは三日後のお昼によろしくお願い致します！」
そう言い残して、メイド長は足早に立ち去ってしまった。
??一体なんだったんだ？
僕はメイド長の豹変の理由を考えながら、自分の部屋に戻っていく。
思えば人と外食をするなど、サーチェ以外でこの身体になって初めてのことのように思える。
何だかんだで僕も楽しみなようで、自然と足取りが軽くなったのだった。

女神様のぬいぐるみ

「戻ったぞー??って、なんだこれは!?」
先程のメイド長の言動を不思議に思いながら、僕は部屋のドアを開いた??のだが。
見慣れた玄関が、ピンクを基調としたデザインのものへと変わっていて、思わず扉を閉じた。
どういうことだ？　ここは僕の部屋なはず??
部屋に立てかけられた立て札を見ても『セリカ』と書いてあるし??ここは僕の部屋で間違いない。
僕が思案していたその時、部屋の中から「あれ？　ヴァイスくんどこに行ったの？」と脳天気な声と共に扉が開いた。
「あ！　いた！　何してるの？　早く中に入ってよ～」
「おい!?　サヤ!?」
見慣れた自分の部屋の変わりように困惑する僕の気持ちなど知らずに、サヤはグイグイと引っ張って部屋の中へと僕を連行する。
「ねぇねぇ！　これとかどうかな～？　可愛くて自信があるんだけど～」
「あっ??あ??」
長い時を生きてきた僕であるが、過去最大級に驚いていた。
白と黒を基調として、綺麗にまとめた室内は無惨にも玄関同様にピンクとフリルで装飾されたメルヘンチックな内装へと変化していた。
「あっ！　そ～だ！　部屋に置いてあったお花は、邪魔だったからあっちに置いといたよ～」
「ええ??」
サヤの言うお花、通称『魔力花』というのは以前エイリさんに貰った魔力回復薬。　それを作る原料となる薬草である。
人間という種族は昔ほどではないが、魔力を多く所有している数が少ないから広まっていないのは仕方ないのだが??人間ではなく、女神であるサヤには知っていて欲しかった。
結構高いやつなんだから??。

だが『魔力花』事態はそのまま特に触れられていないようで良かった。
まぁそれ以上の問題が目の前にあるのだが??
「おいサヤ？　」
「う～ん？　どうしたのヴァイスくん？　お礼は結構だよ～」
「選べ。　ここで死ぬか部屋を片付けるか」
「ふぇ?!」
僕は災厄（ディザスター）を抜いてサヤへと突きつけた。
サーチェから貰った不可視の鞘からの行動を予想もしていなかったであろうサヤは、奇怪な声を上げて目を丸くした。
「えぇぇぇ!?　なんでヴァイスくん怒ってるのさ!?」
「黙れ。　さっさと選ぶんだ」
「む～！　別にいいじゃん！」
サヤの発言を斬り捨て、剣を更に前へと突き出すことで圧をかける。
別にサヤを本気で殺そうとしている訳ではないし、ただ部屋を元のように戻してくれさえすれば僕はそれでいいのだ。
少しきついやり方になってしまったが、まぁサヤだから少しくらい良いだろう。
そんなことを考えていた僕だが、次の瞬間サヤは予想外の行動をとった。
「だったらこっちだって??それ！」
「??!」
サヤは指先を僕へと突き出し、無詠唱魔法を放った。
煌めく紫電が僕の頬を掠めて背後の壁へと着弾する。
??サーチェとの戦いで、先程見ていたから反応できたものの、初見なら絶対に反応できなかった。
「ふふん！　やるんだったら容赦しないよ？　??それっ！」
「クソッ??!」
完全にやる気になってしまったサヤはもう一発、僕に向けて魔法を放った。

それを何とか回避したが、その回避先に予見していたかのように放たれていた攻撃には回避が間に合わず、剣を盾にして迎撃した。
「ちょっと待つんだサヤ！　これ以上は冗談にならない。　一度話し合おう??っと！」
「え～どうしよっかな～？　それっ！」
間髪なく放たれる攻撃を躱すのが精一杯な僕とは対照的に、笑みを深めるサヤは愉しそうに魔法を放ち続けた。
最もその魔法のせいで、先程自分で整理した部屋を荒らしているのだが??本人は特に気にしていない様子だ。
「そこだっ！」
「しまっ??!」
攻撃を捌き続けること数分。
ついに、サヤの足元を狙った攻撃によって体勢を崩されてしまった。
「貰った！　それっ！」
しまった、と思った時にはもう遅かった。
大きな声とともに、魔法を放ったサヤ。
その攻撃は今までの最速で僕に迫ってきた。
完全に体勢の崩れた今の状態では躱すことは不可能であった。
「まだだ！」
「え!?」
僕はいつの間にか近くに置かれていたぬいぐるみを何とか掴み取り、盾として攻撃を防いだ。
凄まじい電圧によって黒焦げとなったぬいぐるみを捨てて、僕は呆けているサヤへと駆け出した。
「とった！」
何故か微塵も動かないサヤへと剣を振りかぶる僕。
そのまま振り下ろそうとしたのだが??
「うっ??」というサヤの声で動きを止めた。
まだ何かあるのかもしれない??。
僕は一度落ち着いて周囲を油断なく確認する。

今度こそサヤを無力化しようと試みた僕だが、サヤの姿を見て思わず手を止めてしまった。
「うぇぇぇん！　ヴァイスくんが??私の大切なシノブちゃんを壊したぁ！」
「??は?」
サヤは泣いていた。
美しく長い黒髪を揺らしながら、ビービーと子どものように泣いていたのだった。

種明かし

「うぅ??私のぬいぐるみ??」
「いやいや。　確かに僕も悪かったが、サヤにだって非はある。　お互い様だって言ってるだろ?」
「でも??あれは私の大切なやつで??」
　黒焦げとなったものの、何とか原型を留めているぬいぐるみを胸に抱きながら、サヤは元気なく呟いた。
　宥め続けた結果、泣き止ませることには成功したものの今度はいじけだしてしまった。
　現在はその対応に追われているのだが、正直言って物凄く面倒くさい。
　しかし、一応は協力関係にある僕たちの関係を、ここで無理に悪化させることを防ぎたいため、真面目に対応しているのだ。
　サヤの大事そうに抱えるぬいぐるみは、部屋に散見される他のものと比べて、特段すごい様には見えないのだが??どうやら特別な思い出があるらしい。
「これはね??お姉さんに貰った大事なぬいぐるみなんだ??」
「??そう、なのか??」
　しょんぼりと俯きながら、寂しげに言い放ったサヤに釣られて僕も俯く。
　そのお姉さん、というのがどのような存在なのかは分からないが、口ぶりから察するにもう戻ってこない一過性のものなのかもしれない。
　うーん??そう考えると、何だか罪悪感が??
「なぁサヤ。　そのぬいぐるみ、直せるのかもしれないんだが??」
「??ほんと?　ヴァイスくんが?」
「あ??あぁ。　その??直せる人に心当たりがあるんだ」
　ダメ元で切り出してみたのだが、思いの外いい反応が得られたのでその方向で話を進める。
　ちなみに、直せるかもしれない人というのはメイド長だ。

確か彼女は先代のメイド長??というか彼女の母親から裁縫の技を叩き込まれたから、それだけは自信がある、と自嘲気味に話していたような記憶がある。
ちょうど三日後に共に昼食を食べに行くのだから、その時にでも聞いてみるとしよう。
性格の良い彼女ならきっと引き受けてくれるはず??というか引き受けてくれないと本当に困ったことになる。
「その人に頼んでみようかな??」
「あ??あぁ。　お、おぉ??大船にに??の、乗ったつもりでいてく、れ」
もしもしくじった時のことを想像してしまい萎縮しながらも、この任務は失敗できないと肝に銘じるのであった。

――――――

「ねぇねぇヴァイスくん！　見てこれ！　可愛いでしょ!?」
色々とあったものの、とりあえず落ち着いたサヤはいつものように暴れ回っていた。
虚空から手品のように、数々のぬいぐるみを取り出しては僕に見せてくるので鬱陶しいことこの上ない。
どうやってぬいぐるみを取り出しているのかと聞くと、魔法を使って収納しているのだと当たり前のことの様に答えられた。
非常識な魔法ではあるのだが、それなら僕が目を外した時間の間に部屋を変貌させたことに合点がいく。
おおよそ、虚空から取り出した物を、魔法を使って配置したのだろう。
「まぁ??それは分かったんだが??ひとついいか？」
「ん？　どうしたのヴァイスくん？　真面目な顔して？」
サヤの動きが止まったタイミングを見計らって、僕はずっと気になっていたことを問いかける。
「どうして僕の前に現れた？」
「??うん？　ちょ～っと、どういう意味か分からないな～」
「そうか。　だったら言い方を変えよう。　どうして僕とサーチェが偽の国王を暗殺したタイミングを見計らったかのように現れたんだ

？」
別に僕はサヤを疑っている訳では無い。
ただ、それに何も思惑がないのだとはどうしても考えられないのだ。
それに??
「あともうひとつ。　サヤは知っていたんだろう？　当時のマグノリアの国王が勇者の末裔ではないことを。　それを伏せて、僕とサーチェとを出会わせたのはどうしてだ？」
「それは??」
「よく考えてみれば、そもそもどうして僕をマグノリアからじゃなくて、森の中から行動を開始させたんだ？　それこそエイリさんやドラゴンに出会わせたかのように??ましてや偽物の地図を渡してまで」
考えれば考える程、サヤに対する不信感は募っていった。
明らかに何かを意図してこれまでの行動は行われていたと考えるべきだろう。
そして??一体何を思って今、現れたのか。
サヤははっきりと動揺の色を浮かべ、視線を泳がせていた。
しかし、やがて観念したかのようにひとつ、ため息をついた。
「あ～あ。　流石はヴァイスくん。　頭良いねぇ～」
パチパチと手を叩きながらそう言い放つサヤの声色は、どこか投げやりで先程までの能天気さとはまた違った雰囲気を醸し出していた。
その変わりように思わず身構える僕を見て「あぁ。　大丈夫だよ」と肩を竦めて笑うサヤ。
「まぁ??ここまで悟られてたらしょうがないねぇ??。　素直に認めるよ。　私は意図的に情報を伏せてサーチェくんとヴァイスくんを巡り合わせた」
??そうか。　エイリさんやドラゴンとも？」
「エイリさんって言う商人さんは、セリカちゃんを補佐させるために、ドラゴンは本線の前にセリカちゃんに戦いの感を取り戻してもらうために、ね」
「なるほど。　??それは分かった」

「うん。　分かってるよ。　どうして今現れたのか、でしょ？」
　僕の言葉を先取りしたサヤは「あ～あ～」と頭を掻きながら面倒くさげに呟いた。
「最初に会った時??言ったでしょ？　このままじゃ世界は滅びるって」
「あぁ。　言っていたな」
　サヤとの出会いを思い出す。
　確か、その滅びの未来を変えるために僕がサーチェを殺す必要があるのだとか。
「それで??私はその滅びの未来への道を知っているの」
「ふむ??」
　未来を知っている。
　あまり信じられないことではあるが、一応筋は通っている。　サヤは当代の女神でもあるから、その程度できても不思議ではない。
「でさ。　カイナくん??だっけ？　あの偽物の王様。　本当の歴史ならサーチェくんが彼を一人で倒して王権を取り戻すんだけど??」
「けど？」
「その歴史では??カイナくんは悪魔と契約なんてしていなかったの。
　それで??その後サーチェくんと和解して一緒に国を作ってたんだ」
「??!」
「つまり??歴史が大きく変わってるんだよ。　私がヴァイスくんを送り込んだことによって、ね」
　自嘲気味に呟くサヤは何とも言えない表情を浮かべていた。
　確かにカイナは和解するどころか死んでいるし、本来の歴史では悪魔と契約などしていなかったようだ。
　??歴史が大きく変わっている。
「それで???」
「うん。　それで??私が知っているのは滅びの未来だけだから、これからどうなるかは全く分からないんだよね。　それで、これからはより近くで当事者として歴史を監視することで少しでも滅びの未来に向かおうとしていたら力ずくでも修正しよう、ってね。　今の私は本

来の女神の力の、十分の一位しかない分身みたいな存在なんだけどね」
「??なるほどな」
サヤの言葉からは強い覚悟が伺えた。
それほど真摯にこの世界のことを思っているのだろう。
「??分かった。　乗りかかった船だ。　僕も出来ることが手伝おう」
「え？　??いいの？」
「ただ。　約束しろ。　今後、そういう事は一人で考えこまずに僕に話してくれ。　上に立つものの苦しみは??分かるから。　力になれないかもしれないが??話し相手にはなれる」
「うん??ありがとう??」
サヤは素直にそう頷いた。
そんな彼女に僕は黙って右手を差し出して握手を求める。
サヤはそれを見て「え？　ヴァイスくんと握手!?　やったー！」とはにかみながら、固い握手を交わしたのだった。
「さて??それで？　本来の歴史ならここからどんな事件が起こるんだ？」
「え～っと??直近だったらねぇ??」
サヤは口元に手を当てて考える素振りを見せる。
しばらくして「あ！」と思い出したように手を叩きこちらを勢いよく向いた。
「同盟を組もうとした国との交渉に失敗して??戦争になる！」
「??は？」
壮大すぎるその内容に呆気とされながら僕は思い出した。
「そろそろ同盟とかも考えないとな??」と珍しく真面目に仕事に取り組んでいたサーチェの姿を。

目標再確認

色々と疲れた昨日から一日が経過し、新たに出てきた問題に頭が痛い思いをしながらの昼下がり。
僕は王城の中にある図書館へと赴いていた。
「ふむ??ここにはない、か」
重厚な本棚同士の間に出来たスペースを覗き込みながら呟く。
ここにやって来たは『過去に戻る魔法』というのを探しに来たからだ。
サヤは「前も言ったけど、王様じゃないとダメなんだって！」と言っていたが、然るべき時のために場所を把握しておくべきだし、もしかしたら??なんてこともあるかもしれないしな。
それに、色々と忙しくて来れていなかった図書館、とやらを見てみたかったから、というのも理由の一つだ。
「う～ん？　あ！　あれじゃない！」
とぼとぼと歩き出したその時、同じようにそれを探していた声色を明るくしてサヤが叫び一点を指さした。
僕の背後にあるであろうサヤの指さすものを見るべく、振り返ってみるとそこには明らかに材質の違う豪華絢爛中に本があった。
僕はそれに向けて手を伸ばす??が。
「??ふっ！　はっ！」
精一杯手を伸ばすのだが??届かない。
クソッ！　こんなところで転生の弊害が??
サヤはそんな僕の姿を見てクスクスと笑い始める。
一応護衛ということは機密事項でもあるから、ここで本気で跳ぶ訳にも行かないし??
「あれ？　諦めちゃったのヴァイスくん？」
「??れ」
「ん？　何て言ったの？」
「僕は届かないから??取って??くれ」
悔しいが僕ではどうしても届かない??だから遥かに高い身長を誇

るサヤへと頭を下げた。
サヤは「え？　きゃあ！　可愛いよヴァイスくん！」と、上機嫌になって快く本を取ってくれた。
その身長が羨ましい??。
「ところで??サヤは何か身長を伸ばすために訓練でもしているのか？」
「??え？　ないない！　そんなこと全くしてないよ！　というか身長なんてあっても邪魔なだけだから！」
「ぐっ??」
言われてみると、僕も昔は意識せずとも背が高かったな??クソッ！
そんな事を話しているうちに、サヤは本をとって僕へと渡してくれた。
その本の題名は『時間転移魔術について』と明らかに当たりだと伺えるものであった。
「お！　やっぱりこれっぽいね～！」
「早速見てみ??ッ！」
「え？　ヴァイスくん大丈夫？　??痛っ！」
本を開こうとした瞬間、雷に打たれたかのような衝撃が身体中を駆け巡り、思わず本を落としてしまった。
サヤが落とした本を拾い上げ、同じように開こうとしたのだが??すぐさま地面に落としてしまった。
「あらら??やっぱり王様じゃないとダメなんだねぇ～残念」
「まぁ??仕方ない。　とりあえずは一歩前進したんだ」
「お！　良いねぇ～そのポジティブ思考」
元からそこまで期待していない事だったから、精神的なダメージもさして大きくない。
僕はサヤに本を手渡し、元に戻して置くよう頼んだ。
しかしサヤは悪戯な笑みを浮かべ「ど～せ誰も見ないんだから私たちが貰っちゃおう！」と言い出した。
「そこに持ち出し禁止と書かれているが??」
「大丈夫大丈夫！　まさか私たちが持ってるなんて思わないでしょ

！」
「まぁ??いいか」
もしかしたら、何かしらの方法で解決法が見つかるかもしれないしな。
サヤが収納魔法で本を虚空に入れた事を見届けて、僕は次の目標へと向かう。
「さて??サヤ。　ここからが本番だぞ？」
「うん！　??ってヴァイスくんも素直じゃないよね～。　何だかんだ言ってサーチェくんの事大好き何だから！」
「うっ??うるさい！」
茶化すサヤを睨み付けつつ、僕たちは図書館の出口へと向かう。
これからが本当の任務。
「マグノリアの同盟に関するいざこざ」をどうにかして解決するのだ。

行動開始

「ん？　サーチェくんに会いに行くんでしょ？　早く行こうよ！」
「いや??何と言うか」
　次の目標に向けて、大きく一歩を踏み出した僕であったが、ある目標に気がついてすぐに歩みを止めた。
　不思議そうに首を傾げるサヤは「早くしよ～よ！」と催促するが??彼女は知らないのだ。
「サーチェが何処にいるか分からない??」
「??え？」
　僕の呟きにサヤはよく分からないと言わんばかりに問い返すサヤ。
「え？　だってサーチェくんって王様でしょ？　忙しいだろうからさっと会えないのは分かるけど??居場所が分からないってどういう事？」
　サヤの考えていることはごもっともで、普通の王様なら現在も国務に励んでいることだろう。
　そう、普通の王様なら。
　サーチェが真面目に仕事をすると思うか、その答えは否。
　常に監視の目を抜けてはどこかで気ままに過ごしているのだ。
　用がある時は自分から会いに来てくれるのだが、こちらから探すのは至難の業でしかない。
「考えてみろサヤ。　サーチェが真面目に働く国王なら、どうして昨日の昼間にあんなところで昼寝していたんだ？」
「あ??え？　??うそっ」
「あぁ。　残念だが事実だ」
「えぇ??」
　サヤは僕と同じ考えに至ったようで、苦笑を浮かべていた。
　ふーむ??しかしどうするか。
　サーチェの事だからどこかで休んでいることは確信が持てるのだが??うーん。
　僕が頭を悩ませていると「あ！　そうだ！」と呟いたサヤが何かを

思い出したように手を叩く。
　そして収納魔法を発動させて綺麗に光り輝く透明な水晶玉を取りだした。
「何をするんだ？」
「ん？　まぁ見てて～！」
　サヤはウインクをした後に水晶玉に向けて何やらブツブツと呟き始める。
　やがてハッと顔を上げたその時、透明な水晶玉が曇りそこに何かが浮かんでいた。
「えーっと???　ここは??セリカちゃん分かる？」
「ちょっと見せてくれ??」
　どうやら水晶玉はサーチェの居場所を表しているようで、そこには珍しく真面目な顔で書類を読み込むサーチェの姿が映し出されていた。
「ここは??資料室??か？」
「資料室？　どこにあるの、それ？」
「図書館の中にある。　何だ??以外に近くにいたんだな」
「灯台モトクロスだね！」
「??もと暗し、な」
　堂々と間違えるサヤに水晶玉を返しつつ、僕たちは図書館内地図に明記されていた資料室へと歩みを進めていく。
　しかし??どうして資料室に？
　あそこにあるのは、過去に起こった事件の概要と被害者の名前が書かれた書類のみで??お世辞にもサーチェが喜んで行くような場所ではないように思えるし??。
　ふむ??分からない。
「ヴァイスくん～？　早く行くよ！」
「あっ??!　あぁ。　すぐに行くさ。　あと??サーチェの前では絶対に『セリカちゃん』だからな！」
「はいは～い！　分かってるって！　というか、ヴァイスくんは私が付けてあげた名前を気に入ってくれてるんだね！」

「何を言っているんだ！　まだ許してないからな！」
「ふふっ！　なんで怒ってるのか、私にはよく分からないな～！」
そうしらばってくれて走り出したサヤを追っていく。
まぁ??その事はあとでサーチェに聞くとしよう。
まずは目標達成が先決だ。

魔王の伴侶？

資料室の扉の前に辿り着いた僕は、その重厚な雰囲気に息を飲んだ。

何と言うか??物凄くしっかりとした場所で、この中にサーチェがいるとは思えない程だ。

「いいかサヤ？　この中にはサーチェ以外にも人がいるんだから??下手な真似はしてくれるなよ？」

はっきりと見えたわけではないが、水晶玉を覗き込んだ時にサーチェ以外の人の身体が映り込んでいた。

サヤがうっかり口を滑らしてサーチェだけならまだしも、他の人にまで僕の正体が割れてしまっては目も当てられない。

サヤは「分かってるって！」と明らかに分かってなさそうな動作で豊満な胸を張って扉の前にやって来た。

豊満な胸を張りながら。

??クソッ。

「おい～っす！　サーチェく～ん？　遊びに来たよ～！」

「??!?」

思わず自分の目を疑った。

先程の言葉が嘘であったかのように、サヤは資料室の扉を蹴って開けたのだ。

それに加えて一応は一国の主であるサーチェを「サーチェくん」呼ばわりとは??やってくれたものだ。

「??。　誰だお前は？」

中から出てきたのは、サーチェではなく黒い服で身を包んだ青髪の美男子であった。

初めて見るその男は怪訝そうな顔を浮かべてサヤを睨みつける。

一体彼は何者なのだろうか？

少なくともこの王城の人物でないことは明らかだが??。

少し離れた場所でも分かる圧倒的な威圧感。

正体は分からないが??目の前の彼が強者であることは火を見るよ

り明らかである。
「おや？　お兄さんこそ誰？　見ない顔だね??って言っても私も来たばかりなんだけど???　まぁいいや！　私はサヤだよ～！　よろしくぅ～！」
　そんな相手を前にしてもいつものように能天気な態度を貫き通すサヤは、大物なのかそれともただのバカなのか。
　しかし、サヤの態度はこの状況では明らかに悪手であることに間違いない。
　男は明らかに不機嫌な表情を浮かべてサヤを睨みつけていた。
「それで～？　お兄さん誰？　というかなんでここにいるの？　というか私たちサーチェくんに用があるんだけど～？」
「??質問は一つ一つしろ。　まぁいい。　俺の名前はカムラ。　サーチェのアホとは古い知り合いでな。　訳あってここにやって来たんだ」
「へ～？　それでさ??そこどいてくんない？　私たちサーチェくんに早く伝えたいことがあるんだけど～」
「それは聞けないな。　サーチェは今集中して作業に取り組んでいるからな」
　サヤの願いをバッサリと切り捨てたカムラに「え～」と不満そうに答えるサヤ。
　しかし納得していない様子で「お願いだよ～！」としつこくカムラに噛み付いていた。
　先程まで明らかに不機嫌そうな彼であったが、そのあまりの執着具合に、現在は観念したかのように諦めた様子で対応していた。
　何と言うか??面倒くさいという気持ちが全面に現れている。
「はぁ??分かったよ。　伝言だけしといてやる。　それで良いだろ？　そこの女もそれで良いか？」
「え？　私??ですか？」
　サーチェとよく似た動作で頭を掻いたカムラは心底面倒くさそうに僕の方を向いた。
「あぁ。　お前はこいつよりはまともに話が出来そうだからな」

「はぁ??まぁサヤさんよりはまともな自信はありますが??」
「お前、名前は？」
「はい。　セリカと、申します」
　僕はカムラに向けて一礼する。
　きっちり綺麗に身体を折っての礼。
　練習した甲斐あって、我ながらなかなかに様になっているように思えた。
「セリカ？　おお！　お前がセリカか！」
　カムラは先程までの気だるげな雰囲気を一転させ、明らかに興奮した様子で僕の肩を掴んだ。
　その変わりように驚きつつ、僕は念の為すぐに行動できるように身構える。
「えっと??私をご存知なのですか？」
「おうよ！　さっきサーチェから聞いたぜ？　なんでもめちゃくちゃ強いメイドがいるんだってな。　俺は強い奴が好きだから、一度お前にあってみたいと思ってたんだ！」
「??はぁ、なるほど???」
　喋りながら僕の身体をまさぐるカムラは??一体何をしているのだろうか？
　もしかしてだが??普通の女性的に考えると男性に身体を触られることは駄目なことなのでは？
「えーっと??その??カムラさん？　そろそろ手を離していただきたく??」
「へ？　??おぉ！　悪かった！　そうだよな??俺ってば何やってんだか??強い奴を見ると自制がきかなくてな」
「いぇ。　次から気をつけていただければ大丈夫です。　その時は容赦なく抵抗しますが??」
　そう言って僕は、常に潜ませているナイフをチラリとカムラに見せた。
　予防線を張っておくことは何事においても大切だからな。
「おぉ怖い怖い！　安心しろ、サーチェはお前の事をたいそう気に

入ってたようだし、人の女に手を出すほど俺は落ちぶれてねぇよ」
「え？　いや？　??え？」
「さて??それはいいとして、お詫びも含めて伝言を聞いておこうか。
??一体どうしたんだ？」
「あっ??はい。　その??」
そうして僕はカムラに向けて、同盟を辞めるべきだという進言を伝えるよう頼んだ。
カムラは「うーん。　それはちょっと難しいかもな。　サーチェの野郎は完全に同盟を結ぶ気でいるぜ？」と芳しくない返答をしていたが、それについては後日サーチェと面と向かって話すとしよう。
とりあえず、今日のやるべきことは全て終了したのだ。
「そういえば??先程別れる時にカムラに『アンタとサーチェはよく似合ってるよ。　大事にしてもらえ』と耳元で囁かれたんだが??あれはどういうことだ？」
僕は途中から完全に無視されていた事を、若干気にしているサヤへと問いかけた。
「え？　嘘???　ヴァイスくん気がついてなかったの？」
「??何がだ？」
サヤの言いたいことに検討もつかない僕は首を傾げるが、サヤはそれを見てますます顔を青くして「え～っと??だねぇ」とはっきりしない様子でいた。
「一体どうしたんだ？　いいぞ、言ってくれ」
なんだかモヤモヤとして気持ち悪いので、若干の覚悟を決めながら僕はサヤに発言を促した。
サヤは「本当にいいんだね？」と聞いた後、決意を固めたように頷いて、僕の方を向いた。
「多分だけど??カムラくんは、ヴァイスくんとサーチェくんが??両思いなんだと思ってる??のかな～なんて？」
「??は？」
サヤの言葉が上手く理解できない。
僕とサーチェが両思い？

それはつまり??僕とサーチェが男女の関係ということで??つまり??その??

「あぁぁぁ！　何てことだ！　まずいぞ??早く誤解を払拭しないとぉぉぉ！」

「えちょ？　ヴァイスくん？　どこに行くのぉぉぉ？」

僕は急いでカムラの元へと戻り、そういう関係ではないことを何度も訴えたが「ハハッいいって！　隠さなくても誰にも言わねぇからよ」と笑ってロクに相手にしてくれないのであった。

勇者のお仕事

「??っと。　こんなもんか」
作業を初めてからどれくらいの時間が経過したのだろうか？
日が当たることの無い資料室ではどうにも時間感覚が狂うな??。
「おーいカムラ？　もう入っていいぜ？」
いつの間に忍び込んだのかは知らないが、今朝一番に俺の前に現れた旧友の名を呼ぶ。
暫くしてガチャガチャと個室のドアを弄る音が聞こえ始めた。
「??引き戸だぞ」
「え？　??あぁ。　分かっていたさ」
数分ほど経過しても一向にドアを開ける様子のないカムラに痺れを切らし、俺は自分からドアを開けてやった。
どうやら本気で考えていたようで、額に汗を浮かべていたカムラは一瞬顔を赤くしたが、すぐに取り繕ってすまし顔を浮かべた。
ちなみにだが全く誤魔化せてはいない。
「??うわっ。　汚ぇ」
「開口一番がそれかよ??。　仕方ねぇだろ？　ずっと作業してたんだから」
資料の山となった机を見つめて呟いたカムラにそう反論するが、その汚さは俺でも少し驚く程であった。
資料室の更に中にある個室であるのにも関わらず掃除が行き届いていて、充分綺麗であった部屋を一日も立たずにここまで汚せるとは??自分のポテンシャルが恐ろしいぜ。
「まぁ座れよ。　わざわざやって来たってことは、何か話したい事でもあるんだろ？」
「座れって言われても??どこにだ？」
「あ？　そんなんどこでも良いんだよ。　ほら、さっさと座れ」
床にドサリと座り込んだ俺を訝しげに見つめていたカムラであったのだが、やがて観念したかのようにため息をついて座り込んだ。
つくづく几帳面なやつだな??

「お前??なんだか生きづらそうだな??。　もっと肩の力抜けよな」
「サーチェ??。　お前は良いよな、何と言うか生きやすそうだ」
「おうよ！　毎日が楽しいぜ？」
「??馬鹿か。　皮肉で言ってんだよ」
　再びのため息。
　イライラしてるんならもっと小魚でも食ってろ。
「それは良いとして??だ。　お前はここで何をしていたんだ？　正直な話、長い間お前を見てきたが、余程の目的がない限りこんなところに自発的にやって来る性格ではないだろ？」
　何やら酷い認識をされていることを少し気になったが、カムラの言っていることはごもっともだ。
　俺だってこんな紙しかない場所なんか、何にも楽しくない。
　しかし、俺にはどうしても知りたいことがあったのだ。
「??お前には昔話しただろ？　俺が国を追い出されたって話について」
「??あぁ。　カイナ??だったか？　そいつがいきなり狂い出して??国を乗っ取った」
「そうだ。俺が調べていたのは、その理由についてだ」
「??その理由？　確か父親が何者かに殺されたことがきっかけだ、そう言っていなかったか？」
「あぁ。　俺もそう思っていた。　でも理由はそれだけじゃなかったんだ」
　カムラの言う通り、カイナが狂い始めた一番の理由は父親が殺されたことだ。
　訳あって若くして国王となった俺であるが、カイナの父親は、政治の面で大いに働いてくれた忠臣だったことを覚えている。
　部下からも慕われていたそいつがどうして殺されたのか？
　その疑問をどうしても確かめたかったのだ。
　そして??その理由について、ある程度の憶測がついた。
「実はだな??カイナは悪魔に乗っ取られていたんだ」
「悪魔に??だと？」

「あぁ。　それでアイツの父親の死体分析を読み返してみたんだが??悪魔に殺されたとなると不思議な箇所についても全て説明がついた。
　つまり??」
「父親を殺した悪魔に身体を乗っ取られた。　??そういう事か！」
「その通り。　そうしたらカイナが行っていた明らかに愚かすぎる政策にも説明がつくんだ」
　悪魔が好むのは人々の負の感情。
　国王という立場を利用し、奪う立場と奪われる立場を作ることによって人為的にそれを作り出していたのだ。
「そんな画策をするなんて??やはり悪魔とは末恐ろしいな」
「同感だ。　んで??もし今日この場にあいつがいたらそれを聞きたかったんだが??どこにいるんだよ？」
「あいつ？」
「??分かるだろ？　ほら??俺たちのクソ師匠のことだよ。　あの性悪女??一体どこで油を売ってんだ？」
「レータの事か。　レータは《十戒》の仕事があるとか言ってどこかに消えたぞ？　マグノリアに着くまでは一緒だったんだがな??」
「ほーお。　お前の紋章でどうにか呼び出せないのか？」
「そんな事したら目も当てられない事態になるぞ？　ただでさえ気分屋なんだから??」
「そうだよな??あいつのそういう所には困らされるぜ」
「??その部分に関しては師弟そっくりだがな」
「あ？　どういう意味だよ」
「そのままの意味だ」
　カムラの発言についてしっかり問い詰めようとした俺だったが
「あ。　ひとつ忘れていた。　セリカと言うメイドが先程やって来てな！」という言葉でそれを辞めた。
　セリカが来ただと？
　基本的に自分から来ることのないアイツがわざわざ俺に会いに来るとは一体??惚れたか？
　セリカの事を話題に出した途端、ギラギラと目を輝かせたカムラを

見て、カムラの戦闘好きを再確認した。
「それで？　なんだって？」
「何でもお前がこれから結ぼうとしている国交をやめるべきなんだと」
「??は？」
　予想だにしないその言葉に驚いた。
　確かに国交を結ぼうと考えているし、それについてセリカの前で呟いたことも覚えている。
　ただ、その時は「そうですか」と、いつものように興味なさげに返されたから??てっきりどうでもいいのかと思い込んでいた。
　どうやら伝言はそれだけのようだし、詳しくは後で本人の口から聞くとしよう。
「ところで??どうだった？　セリカのやつ」
「??あぁ。聞いていた通り、異質だったな。　黒髪に黒目というだけでもまず珍しい容姿だが??なんだよあの魔力の『質』は。　あんな奴がいるとはな??」
「そうだろ？　まだ本人は自覚していないようだが??本当に理解したらどれだけ化けるのやら」
「本当に??どれだけ強くなるかが楽しみだ」
　互いに見つめ合いながら不敵な笑みを浮かべる俺とカムラであった。

――――

「??さてと。　今日は色々あったな。　カムラに会って、気になっていた事も解決して、それと??痛ぇ」
　天蓋付きのベッドの上で、サーチェは頬に出来た真っ赤な腫れをさする。
　伝言の件についてセリカに聞きに行こうと以前と大きく内装の変わっていたセリカの部屋に忍び込んだら、ちょうど入浴前だったようで下着姿のセリカと鉢合わせてしまったのだ。
　結局、その内容について聞くことは出来なかったのだが??眼福だったと、以外にもサーチェは満足している。

「あとは??あれか」
サーチェは資料室から抜き取ってきた一枚の資料に再び目を通す。
《報告書》
◎犠牲者：ナーリア＝マグノリア、ターニャ＝マグノリア
◎概要・突如としてマグノリアを襲った『魔皇』と名乗る悪魔によって、いち早く迎え撃った国王と后が死亡。
◎備考：犠牲者二名の懸命な抵抗により市民全員に被害なし。　王都への被害は甚大。
「親父??お袋??見ていてくれ」
カイナに取り憑いていた悪魔も口にしていた『魔皇』という存在。
それに対する復讐神を燃やしながらサーチェは眠りにつくのであった。

新たな魔法（？）

「さて??それじゃあまずは魔法の理論説明から始めま～す！」
「うーい」
いつものように元気いっぱいに言い放ったサヤに帰ってくるやる気のない二つの男声。
それは教壇に立ったサヤの前で着席するサーチェとカムラのものであった。
本来は魔法顧問としてサーチェに授業をする予定だったのだが、ふらっと現れたカムラも興味を持って参加することになったのだ。
ちなみに僕はそんな三人のお目付け役として一人離れたところでその様子を見守っていた。
それに、少しばかり講義の内容にも興味があったしな。
「さて??まず大前提としてなんだけど、一口に魔法って言ってもそれには魔力を使う魔法と、聖法気を使う聖魔法ってのに分けられるんだ！」
そう言いながら、サヤは黒板に向けてチョークで人の絵を描き、そこから二つの矢印を伸ばして『魔力』『聖法気』とそれぞれに書き込んだ。
サヤの字は結構癖字のようで少し読みにくいのだが、サーチェらは頷いているようだし問題ないだろう。
「それで～それぞれの力を使って魔法と聖魔法を発動させるんだけど??実は基本的な魔法の効果は同じなんだよね～」
「え？」
サヤの発言にカムラとサーチェは顔を見合せた。
どうやら二人は知らなかったようでたいそう驚いた様子を見せていた。
僕も驚いていたが、以前からもしかしたら??と思っていた内容だったのでそこまでは驚かない。
最も、僕自身聖法気が殆どないから予想の範疇だったのだが??同じように魔力が殆どないのに確信を持っているサヤは、流石は女神と

言ったところだな。
もしかしたら全盛期は魔力を持っていたのかもしれないな。
そんな事を考えていた折、おもむろにカムラが手を挙げた。
サヤはそれを見て「お！　カムラくんどうぞ！」と何やら嬉しそうに発言を促した。
当てられたカムラは律儀にも立ち上がり、サヤをまっすぐと見つめながら口を開く。
「それはつまり??なんだ。　魔法も聖魔法も大元は同じで、結局名前が違うだけってことか？」
「あ～。　それはねぇ??半分は正解で半分は不正解かな～？」
口元に手を当てて、少し考えるような素振りを見せた後に再び黒板に向き直って大樹のような絵を描いた。
「え～っと??これをイメージで持って欲しいんだけど、確かに魔法も聖魔法も大元は同じだよ～。　でも??こんな感じで途中で枝分かれしていって、やがて唯一無二の魔法??俗に言う『上級魔法』とか『固有魔法（オリジナル）』になるってこと～」
「「ほぉ??」」
物凄く分かり易い説明に、思わず僕までもが感嘆の声を漏らしてしまった。
要点を纏めてそれを図式化するのが本当に上手い、これはサヤの才能では無いのだろうか？
絶対に本人の前では言わないが。
「さて??まぁこんなことはねぇ??どうでもいい！」
サヤがパチンと指を鳴らすとひとりでに黒板消しが動き出し、先程の図を綺麗さっぱりに消してしまった。
欠伸をするサーチェとは対照的に、真面目にノートを取っていたカイナは唖然としていたが、そんな事を気にする様子もなくチョークをポイと投げ捨てた。
「どうでもいい??か。　教科書通りの内容は意味が無いってことか？」
「お！　そうだよサーチェくん！　確かに基本は大事だけど??一般的

な強さなんか意味がないからね～！」
先程までの内容も、なかなかに基本から逸脱したものだったのだが??サヤからしたら『基本』の範疇のようだ。
サーチェもサヤもつくづく規格外だな??本当に。
「あ！　先に言っておくけど、今から話す内容はあくまでも私が実践出来ないから、本当にできるかどうか分からないものだからね～！」
うーん？
サヤの言葉に僕はひとつの疑問を感じた。
一体どうしてそんな事を教えようとしているんだ？
いくら自由奔放なサヤと言えど、そんなに無駄なことはしないはず??。
「??と言っても、さっきの内容の延長線上だから、八割くらいの確信は持ってるけどね～。　ちょっとビックリしたでしょ～」
「ほぉ？　そういう事なら聞こうじゃねぇか！」
ニヤっと悪戯な笑みを浮かべたサヤに、笑い返したサーチェ。
??少しだけイラっとしたが、まぁいいだろう。
「さて。　まぁさっき言ったみたいに二つの魔法は根本的には一緒なんだ～。　じゃあセリカちゃんに質問！　この二つの端的な違いは？」
「え？　セリカが来ているのか？」
一応は目のつかないところでこっそりと観察していた僕だったが??どうやらサヤには気づかれていたようだ。
男二人は全然のようだが??。
「なんだよセリカ??いたんならこっちで見てもいいんだぜ？　なぁカムラ？」
「おう。　強い奴の上にサーチェの信頼する奴なら同席を拒否する理由はねぇ！」
「??いえ結構です。　私が近くによったらご主人様が私へのちょっかいで講義に集中しないではありませんか」
「ははっ！　確かに！　セリカちゃんやる～！　それで？　質問の答えは～？」

「??二つの魔法の違い。　それは魔力と聖法気。　つまり、使う力の違いですか？」
「お！　せいか～い！」
パチンと指を鳴らしてサヤはウインクをする。
どうやら正解だったようだ。
サーチェは「え？　??名前の違いじゃねぇの？」と馬鹿げた事をほざいていたが、聞かなかった事にしてやろう。
名前って??屁理屈にも程があるだろう。
??と思っていたのだが「俺もそれだと思ってたぜ??」とのカムラの呟きで物凄く残念さを感じたのも、胸に秘めておこう。
「さて??それでさっきセリカちゃんが言ったみたいに、二つの違いはその源にあるんだ。　もし聖法気も魔力も沢山あれば、魔法を同時に使えるかも？　つまり、同じ効果の魔法を一度に二回使えるかな～な～んて思ってるんだよね～」
「なるほど??」
サヤの考えは確かに一考の余地があるものだ。
ただ??聖法気も魔力も沢山持っている人なんてそうそう??あ。
「なるほどな??それがこれからの目標か。　悪くねぇな」
「そ。　まぁ私が気になるってのが主な理由なんだけどね～。　嫌だったら変えるけど」
「いや。　いいじゃねぇか。　俺はやってみたいぜ？」
「お！　だったらそれでいこっか！」
再びパチンと指を鳴らしたサヤは嬉しそうに笑う。
大量の魔力と聖法気を持つ現代の化け物。
サーチェ＝マグノリアをその漆黒の双眸で見つめながら。

メイドの嗜み

「セリカー。　もうちょっと力込めて??あともっと奥をやってくれー」
「注文が多いですね??鼓膜突き破りますよ?」
「やっちゃえセリカちゃん！」
「え?　お前??やめろよ！　マジでだからな！」
ちょっと強めに力を込めてやった途端、わーわーと喚き出したサーチェを鬱陶しく思いながらも僕は忙しなく手を動かし続ける。
僕が今行っているのは耳かきでの耳掃除だ。
サーチェ曰く「メイドとしての基本教養」らしいのだが??真偽は分からない。
「??というか、どうして私が耳掃除をしないといけないんですか」
「ん?　カムラから説明されたんだろ?　なぁカムラ?」
「あぁ。　確かにセリカには伝えておいたぞ」
「伝えられましたけど??あんな説明で納得いくと思っているのですか！」
僕だって別に自分から望んでサーチェに耳掃除を行っているのではない。
朝っぱらから魔法の特訓に励んでいたサーチェとサヤとカムラ。

その三人に、わざわざ朝食の差し入れを持ってきてやったのだが??それが間違いだった。
いきなりカムラに耳かきと綿棒を渡されて「あれの勝者に耳掃除してやることになったんだ」と、目の前で勃発していたサヤとサーチェの勝負を指さしながら、告げられたのだ。
なんでそのような状況に陥ったのかも僕は知らない。
「まぁたまには素直にご主人様の命令に従っとけよ」
「??む。　それは横暴では?」
「知るかよってんだ。　まぁ気持ちいいからそのまま頼むわ」
「??今回だけですよ」

よく考えたら、当たり前のように膝枕をしているのもおかしいな??
??まぁ今回だけ??今回だけだから許してやろう。
カリカリ??カリカリと音を立てながら僕は耳かきを動かし続ける。
「あれ？　ヴァ??セリカちゃん結構耳かきにハマってる？」
「確かに??なんというか一心不乱だな??」
「??ハッ！　いっ??いえ。　全くしょうがないですね??」
「痛っ！　おいセリカ??痛いって！」
サヤとカムラの声で、意識を取り戻した僕は何とか取り繕おうと変に力を込めてしまった。
そのせいで耳かきが突き刺さってしまったが、まぁいいだろう。
以外に奥が深くてのめり込んでしまったな??耳掃除恐るべし。
コホンと咳払いをした後、没頭し過ぎないように気を払いながら耳掃除を続行した。
「そういえば??進捗はどうですか？　朝っぱらから魔法を練習していたようですが??」
「あーん？　まぁ??そこそこだな」
「はいサーチェくん。　嘘つかない！」
「その通りだ。　まず魔法を作るところすらロクにできていなかっただろう！」
何気なく問いかけた質問だったが、やはりなかなかに難しいようだな。
サーチェが魔法をあまり得意ではないことは、なんとなく察しがついていたが、サヤ達の話を聞くに基本中の防御魔法と身体強化魔法しかまともに使えなかったらしい。
酷いな??確かにサーチェのスタイルに魔法はあまり必要ないのだが??そこまで割り切るのか。
「もう少し成長しているものだと思ってたがな??あの時と魔法は変化なし、少し残念だ」
「あ？　うるせぇよ！　つーか魔法なんかなくてもお前なんか余裕だし？」
「ほぉ？　言うじゃないかサーチェ。　後で一戦交えるか」

「おうよ！　望むところ??っておい！　なんで頭抑えるんだよセリカ！」
「動かないでください！　鼓膜破られたいんですか!?」
　耳掃除をしているこちらの気持ちなど知らないとばかりに、頭を動かしてカムラに反論しようとするサーチェが暴れないように抑えつける。
　本当に心臓に悪いからやめて欲しいものだ。
「つーか。　レータが魔法をロクに教えてくれなかったんだろ！」
「それは??まぁそうだが??」
「ん？　レータって誰？」
　唇を尖らせてのサーチェの反論に食い付いたのはサヤであった。
「レータ」??今まで会ったことのない人物だな。
「もしかして、ご主人様のお師匠様ですか？」
「??おおよ。　俺とカムラの師匠だ。　よく分かったなセリカ。　話したことあったか？」
「いえ。　なんとなくそう思っただけです。　どんな方なのですか？」
「そうだな??まぁ??自分勝手な奴だな」
「同感だ。　レータの自由奔放さにはいつも苦労させられる」
「へ～。　なんかダメ人間っぽいね～」
「「??」」
「??え？　何その顔？　??ねぇ？」
　自分もそれに当てはまっていることに、気がついていないサヤは、じとーっと自分を見つめられていることに気がつき、少し語調を強めた。
　まぁ??本人が良いのなら別に問題ないのだが??
「??はい。　これでおしまいです」
「??おぉ。　お疲れさん。　気持ちよかったぜ？　また頼むわ」
「??まぁ気が向いたらやりますよ」
　以外にも楽しかったので、やらないとは断言せずに僕は立ち上がった。

「??あれ？　もう行っちゃうの？　これから訓練再開するんだけど??セリカちゃんも一緒にやらない？」
「そうだぜセリカ？　一緒にどうだ？」
「あぁ??申し訳ございません。　この後、少し予定がありまして??」
「予定？」
「ええ。　メイド長と食事に行って参ります」
「へー。　何と言うか意外だな。　まぁいいや。　しっかり愛想よく振る舞う方法を教えてもらえよ？」
「??それでは」
　軽く一礼して、僕はメイド服から着替えるべく自室へと向かうのであった。

侍女のお茶会

「ふぅ??これでいい??のか？」

僕は一度自室へと戻り、クローゼットから私服を引っ張り出して着替えていた。

別にメイド服で行ってもいいのだが、サーチェ曰く流石に目立つからやめてくれとの事だ。

それを予見してかどうかは知らないが、サヤが勝手に僕の私服を見繕ってベッドの上に置いてくれていたのだが??フリルが沢山使われた痛々しいデザインだったので速攻でサヤのベッドの上へとお返ししておいた。

実際にサヤはあんな服を普段着るのだろうか？

ふむ??全く想像がつかないな。

というより、あの服のサイズはサヤには少し厳しいだろう。　その??胸囲的な意味で。

「??まぁいい。　邪魔なだけだ。　そう、邪魔なだけ??」

チラリと自分のそれを見下ろして残念な気分に浸りつつ、僕はテキパキと準備を進める。

以前、エイリさんに買って貰ったお気に入りのサイフを鞄の中に入れ念の為護身用のナイフをいつも通り足の辺りに忍ばせておく。

まぁ??こんなもんだろう。

「これは??悪くないな」

準備が完了し、鏡の前で自分の姿を確認する。

悪くない??というかなかなかに可愛らしい町娘ではないか。

男を惹き付けたい訳では無いが、容姿は良いに越したことはない。

それが自分ならば尚更だ。

最後に以前の騒動で黒焦げとなったサヤのぬいぐるみを丁寧に袋の中へと入れ、僕はこれからの時間に胸躍らせて勢いよく飛び出していくのであった。

――――

「??おや？　セリカちゃん！　今日は仕事は休みかい？」

「あ！　エイリさん！　お久しぶりです。　ええ。　今日は少しばかり用事がありまして??」
少し早く着いてしまい、待ち合わせ場所でメイド長を待っていたところ、何やら大きな袋を抱えたエイリさんと偶然に出会った。
僕の返答を聞いて「おや？　セリカちゃんにも男ができたのかな？」なんて冗談を飛ばしてくるあたり、もうすっかり慣れたようだ。
あちらがセリカとして接してくるのなら、僕だってセリカとしていつものように返答をした。
「さて。　私はここら辺でお暇するよ。　何やら待ち合わせをしているみたいだしね。　また暇があったら私の店にでも顔を覗かせてくれ」
「はい。　その時はお安くしておいて下さいね」
「はは。　セリカちゃん相手なら幾らでも安くしてしまうかもね。それじゃあまた！」
そう言い残してエイリさんは去っていく。
安くして貰えるという言質はとったので、近いうちに王城で不足している薬草やらを買いに行くとしよう。
ふふっ。　エイリさんが驚く顔を見るのが今から楽しみだ。
「あ！　セリカさん！　申し訳ないです、おまたせしましたか？」
僕がそんな思考に耽っていた折、メイド長が慌ただしくこちらに走ってきた。
ふむ??やはりメイド長はスタイルがいい。
その美しい身体を包み込む服も、地味すぎず派手すぎず。　絶妙な塩梅でメイド長の美しさを際立たせていた。
「いえ。　私も今来たところですので。　それでは参りましょうか」
「あ！　その??ちょっと待ってください??」
「??何か？」
「その??手を握って頂いてもよろしいでしょうか？」
「ええ。　構いませんが？」
何やら頬を赤らめてモジモジとするメイド長を不思議に思いながら、僕はメイド長の手を取る。

沢山水仕事をこなしているはずなのに、よく手入れしてあるのか綺麗な掌であった。
「??顔が赤いですけど体調が優れないのですか？　」
「あ！　いえ！　そんなことは無いです！　さぁ行きましょう！」
「???　はい。　分かりました」
いきなり声を大きくして歩き出したメイド長に歩幅を合わせつつ、僕達は予約した店へと向かっていく。
今日食事をとる予定の店は、メイド長のお気に入りらしい。
曰く「ここ以上に美味しい料理屋さんはありません！」との事だ。
実に楽しみである。
商業施設が立ち並ぶ活気のある大通りを少し抜けたところに、その店はあった。
「ここ??ですか？」
「ここです！　入りましょう！」
グイグイと手を引かれて半ば無理やりに入店させられたのだが、その店は普段の僕ならば絶対に行かないような場所であった。
ピンクを貴重とした外壁に、所狭しと並べられたぬいぐるみの数々。
その外装は明らかにサヤが好きそうな「可愛いもの」を集めてそのまま貼り付けたようなものであった。
「さて??何を食べましょうか！」
「その??本当にここで間違いないのですよね？」
「？　ええ。　ここが一番です！」
「??はぁ。　なるほど」
胸を張ってまで断言されてしまった以上、間違いは無さそうだ。
店内は同年代と見受けられる女性達で意外と賑わっており、各々の場所で会話が盛り上がっていた。
「いらっしゃいませ！　ご注文は何に致しましょうか？」
「そうですね??マグノリアパンケーキと??パフェをお願いします！」
「かしこまりました！　そちらの方は何にいたしましょうか？」
着席した僕たちの元に、メニューをじっくりと見る暇もなく注文が

始まってしまった。
　メイド長は慣れたようでスラスラと答えていたが、ここに来るのが初めての僕には到底不可能なことである。
「えっと??。　同じものでお願いします！」
「かしこまりました～！　少々お待ちくださいませ～！」
　そう言い残して足早に去っていった店員。
　まぁ??慣れている様子のメイド長と同じものなら、多分間違いは無いだろう。
「??さて。　メイド長。　少しお願いしたいことがあるのですが??」
「はっ！　はいいぃ！　なんでございましょうか！」
「???」
　同じテーブルで向き合った途端に、どこかを見つめて口数が少なくなったメイド長は声をかけるとビクッと肩を震わせながら、珍妙な返答をした。
「あっ！　いや！　??コホン。　なんでございましょうか？　セリカさん」
「??その。　このぬいぐるみを直していただきたいのですが??」
　そう言って僕は、黒焦げのぬいぐるみであるリチャード（サヤ命名）をテーブルの上に取り出す。
　それを見た途端、メイド長は「触ってもよろしいでしょうか？」と訪ね、許可を出すと目付きを変えてリチャードを観察する。
　店員によって給仕されたコーヒーを口に含みながら、その様子を見守っていたところ「むむむ??」とメイド長が唸り始めた。
　やがてゆっくりと顔を上げてこちらを見据えるメイド長。
「このぬいぐるみ??直すことはできそうなのですが??」
「何か問題が？」
「その??私なんかが手を加えるのがおこがましいほど素晴らしい一品で??」
「??はぁ。　素晴らしい??一品？」
　僕には全くもってその価値が理解できないのだが、強く頷くメイド長を見るに本当のことのようだ。

「ちなみにですが??これはセリカさんの？」
「違います。　私の知人のものです」
「なるほど??どうしてこのような事に??本来なら美術館にでも飾られていそうなものなのに??」
「ええ??ちなみにどうしてですか？」
「これは??全てが天界の衣と呼ばれる希少な繊維が使われているのです。　その価値は計り知れません??」
「なっ??!」
　まさかそんなに大事なものだったとは思いもしなかった。
　そういえばサヤも「お姉さんから貰った」と言っていたし、恐らく天界で作られたものなのだろう。
　??なんてことだ。
「直せる??んですよね？　一応本人から許可も貰ってますし??」
「善処する??としか言えません。　ぬいぐるみ自体直すのは簡単ですが??何せ恐れ多くて??手元が狂うかもしれません」
「??そうですか。　申し訳ないですが、よろしくお願いします」
「??はい」
　そんな具合に僕達が現状に意気消沈していたその時、店員が注文した料理を持ってきた。
　砂糖とクリームがふんだんに使われた、見るだけで虫歯になりそうな甘そうな料理が運ばれてきた。
「??おぉ。　??これは」
「さて！　話は終わりですね！　それでは食べましょうか！」
　その全貌に気圧された僕とは対照的に、メイド長は生き生きとしてフォークを手渡してきた。
　それを僕が受け取るやいなや「食べろ」とはっきりと分かるほどの視線を感じた。
　その視線に促されて、比較的甘そうなパンケーキから先に口に??運ぶ。
「あ。　??美味しい」
「ふふん。　この国で??いや、世界一と言っても過言ではない美味し

さですよ！　ささ。　こちらのパフェも！」
　得意気な顔をうかべるメイド長に促されて、パフェを口に運ぶ。
「これは??ちょっと甘すぎますが??美味しいですね」
「そうでしょうそうでしょう！　これをコーヒーと食べると格別に美味しいのですよ！」
　促されるがままに僕はコーヒーとパフェを口に含む。
　うん。　甘さがいい具合に中和されてすごく美味しいな。
「これは??手が止まりませんね！」
「ふふっ。　少し気が早いですが、おかわりを頼んでおきましょうか。
　今日は私の奢りですよ！」
「ありがとうございます。　それではお言葉に甘えて??もう少しだけ」
「ふふっ！　お好きなだけどうぞ！」
　調子に乗って僕はパフェとパンケーキをもうひとつずつ注文し、あっという間にそれを平らげた。
　とても美味しく、充実した時間だったといえよう。
　後日砂糖の過剰摂取によって体重が増加することを、今の二人は知らないのであった。

『真実』との出会い

いつものように、小鳥のさえずりと共に目を覚ました僕は、勢いよくカーテンを開けて朝日を浴びる。
これが朝の慣習なのだが??実に気持ちいい。
僕が小さく伸びをしていた折、近くから「ウーン」というサヤの呻き声が聞こえた。
しまった??起こしてしまったか？
サーチェから部屋を与えられているはずなのに、サヤは僕の部屋に住み着いている。
お陰様で僕の部屋はぬいぐるみやアロマで飾られたとても可愛らしい部屋となっている??本当に迷惑でしかない。
「ふぁわー！　って??ヴァイスくんもう行くの？」
「あぁ。　今日はエイリさんの店に用があってな」
「エイリさん??。　あ！　ヴァイスくんを助けてくれたあの人ね～！　取って食われないように注意しなよ～」
「はは。　まさか。　それに??もしもの時はちゃんと倒すさ。　不安ならサヤも一緒に来るか？」
「い～や。　折角のお誘いだけど私はい～かな～。　また後で会おうね～」
そう言ってサヤは再び夢の世界へと旅立っていく。
今日はサーチェへの魔法訓練は休みらしい。
折角の休みだから早く起きて好きな事に時間を費やせばいいのに??なんだかこのまま昼くらいまで寝ていそうな体たらくである。
「??まぁいい。　僕には関係の無いことだ」
いつものようにメイド服へと着替えた僕は、最低限の身だしなみを整えて足早に部屋を出た。
テクテクと廊下を歩いていくと、同じように朝から仕事のある大臣やメイド達も忙しなく動いていた。
本当に皆よく働いてくれている。
ちなみにそれを統括する身分にあるサーチェは今現在夢の中であ

る。
　そんなところからか、もう少し国王としての自覚を持ってください、といつもライラに口うるさく注意されている。
　実際のところ、それで国が上手く回っているのだから、現状維持が一番望ましいところなのだが。
「いち??に??さん??!」
「??おや?」
　王城の玄関へと辿り着き、いよいよ外に出ようかとしたその時、カムラの大きな声が中庭の方から聞こえてきた。
　素振りでもしているのだろうか？
　邪魔をしないようにこっそりと声のした方を覗いてみると、やはりカムラが何やら見慣れぬ長い棒のような物を構えて、掛け声とともにその先を虚空へと向けていた。
「あれは??一体?」
　もう少し見ていたいとも思ったのだが、エイリさんを待たせすぎるのも良くないので、僕は後ろ髪を引かれる思いでその場から立ち去っていく。
　そういえば、カムラも強い奴が好きだと以前口にしていた。
　機会があれば、ぜひ一戦交えたいものだ。
　そんなことを考えながら、僕は王都へと足を踏み入れていく。
「安いよ安いよー！」
「お！　そこのお姉さん！　少しうちでアクセサリーを見て行きませんか？」
　王都内は朝から盛んに商売が行われていた。
　朝にも関わらず往来をゆく人々は多く、活気づいている。
　皆が笑顔を浮かべて商売を楽しんでいる様子を見ると、平和のすばらしさを感じざるを得ない。
　仮に僕が最終決戦に買っていたとして、このような世の中を作れていたのだろうか？
「??さて。　ここを右に曲がって??」
　大通りから少し外れたところに、エイリさんの店はあった。

流石と言うべきか、何度見ても大きな店舗である。
「失礼します。　セリカで??」
「ふむ??そこを何とか??できないかい？」
「申し訳ございません。　こちらにあるものが最高品質のもので??」
おや？　何やらエイリさんが客と揉めているようだ。
美しい金髪をサイドテールにして肩へとかけているその女性は、豊かな胸のある懐に手を入れて、いくつかの金塊を取り出し「これでもかい？」と問いかけてくる。
「これはセリカさん！　ようこそいらっしゃいました！」
「あぁ。　??おはようございますジーナさん。　何やら揉めている様子ですが??」
その様子に呆気に取られていた僕に声をかけてきたのは、ひょこひょこと動く獣耳が可愛らしい女性。
エイリさんの妻であるジーナさんだ。
正直容姿はあまり宜しくないエイリさんが、どうやって射止めたのかが実に気になる程に美しい女性である。
「あのお客さんがね、簡単に壊れない武器が欲しいって来店されてね。あの人も蔵から最高品質の骨董品とかを持ってきたんだけど??あのお客さんは満足していないらしいのよ」
「ここの武器で、ですか？　まさか??」
マグノリアの大商人であるエイリさんはなかなかの目利きである。

そんな彼が仕入れる骨董品も勿論一流のものばかりだ。
対ドラゴンの時は、咄嗟のことでメンテナンスをする時間がなかったが、しっかりと鍛冶屋でメンテナンスしてもらえば、十二分に使うことが出来る一品だ。
「何か目安があればもう少し良いものが提供出来るやも知れぬのですが??」
「??なるほど。　そうだな??これでどうだい？」
そう言って女性が取り出したのは、ひとつの扇。
とても武器には見えぬその代物だが、エイリさんはそれを受け取っ

た途端、驚愕の表情を浮かべてすぐさまそれを落としてしまう。
すぐさま拾い上げようとするが、余程の重量があるのだろうか、なかなか持ち上がらない様子であった。
「おや？　すまない。　普通の人には少々重すぎたかもしれないね」
苦しむエイリさんを見て、女性はすぐさまその扇を何事も無いように軽く持ち上げてみせた。
先程エイリさんが落とした場所には大きなへこみができていた。
「あの人は??一体」
「まぁ??端的に言えばこれくらい、重いものが欲しいのだが??無いというのならしょうがない。　他のお客さんが来てしまったようだし、私はここでお暇するとしよう」
扇をしまい込んだ女性は立ち去る前に、一つだけ金塊を置いて「迷惑をかけたね。　謝礼だと思って受け取って欲しい」と言って出口へと向かっていく??
「そこの君。　少しばかり質問に答えてくれないかな？」
その途中で、僕の前に立ってそう問いかけた。
「な??なんでしょうか？」
「いやなに。　そう怖がることもない。　本当にただの質問さ。　この国の国王の名前を知っているかい？　あとはそれに面会する方法も」
「??国王様は、サーチェ＝マグノリア。　面会する方法は??知りません」
「おや？　嘘は感心しない。　本当のことを答えるんだ。　どうやら君は、サーチェと縁があるようだしね。　国王直属の配下のセリカ？」
「??!」
女性の言葉に驚愕する。
嘘かどうかならともかくとして??どうして??名前まで分かったんだ!?
目の前の女性は??一体？
僕が混乱して思考を巡らせていたところ、女性はクスリと笑いだし

た。
「はは。　いやすまない。　君を見ていると、昔の彼を思い出してね。
少しばかりからかわせて貰っただけさ。　サーチェへの面会の仕方も分かっている。　それでは私は、私はここで失礼しよう。　これは遊んでくれたお礼さ」
女性が投げた何かを、僕は受け取る。
それは、九本の剣が組み合わさった不思議な紋章が描かれた髪であった。
「さて??それでは失礼。　近いうちにまた会おう」
ぺこり、と。
最後に優雅に一礼をして、女性は店を後にする。
僕は何も言えないまま、その姿を見送るのであった。

エイリは苦労が止まらない！

「大丈夫ですか？　エイリさん？」
僕は女性が去ってすぐさま、エイリさんの元へと駆け寄った。
見たところ外傷はないようだが??何やら奇妙な目つきで僕のほうを見つめていた。
「??何か？」
「??いや。　先程渡されたものを見せてもらってもいいかい？」
「ええ。　どうぞ」
右手に持つ先程の紙をエイリさんに手渡した途端、エイリさんは神妙そうな顔向きで頷いた後、ジーナさんにもそれを見せて何かを確信したようにこちらを見つめてくる。
あの良く分からない紋章は、何か有名なものなのだろうか？
「??十戒」
「??え？」
「これは十戒と呼ばれる武人たちの使う身分の証明書だ」
「??はぁ。　??十戒？」
聞き慣れない言葉に、オウム返しをするしかない。
十戒とは??一体？
「その十戒という人たちは何者なのですか？」
「この世界の頂に立つ者。　最強の武人を示す称号のことです」
エイリさんに代わって僕の質問に答えたのはジーナさん。
ジーナさんは何やら奥の方から古めかしい本を持って来て、とあるページを指さした。
「その名の通り、十戒に当てはまるのは十人の武人です。　そして??この紋章で表されるのは??十戒の九。　『真実』です」
「??真実？」
「はい。　表舞台にあまり顔を出さない十戒の中でも『真実』は特に関わりを持たないことで有名です」
「それがどうしてエイリさんの店なんかに???」
「はは。　何かとは言ってくれるねぇセリカちゃん」

ジト目で見つめてくるエイリさんだが、まるまると太ったおじさんにやられたところで何も嬉しくない。
「まさかとは思いますけど??王都を強襲しよう??とか？」
「まさか??。　ありえない??と断言は出来ませんが??」
ジーナさんの呟きが一瞬嫌なことを想起させるが??もし王都を襲う気だとしたらなおさら、わざわざエイリさんの店に寄るなんて事は無いだろう。
「まぁ仮にご主人様が襲われたとしても??結構強い護衛がいるから大丈夫だと思います」
「それなら大丈夫だけど??。　まぁ何事も無いことを祈るしかないね」
有事の時の責任をサヤへと丸投げしたことだし??気を取り直して本来の目的を遂行するとしよう。
「エイリさん。　武器を作り直す方法をご存知ないですか？」
「武器を作り直す？」
「具体的に言うと剣を槍に作り替えるみたいな事は可能なのか、ということです」
「なるほど??」
「ちなみにですが??どうしてセリカさんは武器を作り直したいのですか？」
「??自分の身体に合わない武器がありまして??でも、その武器は捨てるには惜しい代物でして??」
ジーナさんの問いかけに素直に回答したところ、彼女はコクリと頷いて微笑んだ。
「分かりました。　後日再びこちらに来てください。　一つ確かめたいことがありますので」
「了解です。　ありがとうございます」
これで目的を果たしたことだし??早く戻るとするか。
「??っと！　これを忘れるところでした。　エイリさん！」
「ん？　何だいこの紙ぃぃぃ!?」
ポケットから投げ飛ばしたメモを見て、エイリさんは大きく目を見

開いて驚くような素振りを見せる。
当然だろう。
何せそこに書いてあるのは王城で使う薬草から調味料まで。
とにかく必要なものを全て書いてあるのだから。
「ちょっ!?　セリカちゃん?　これは流石に??」
「安くしてくださるとのことでしたので??。　少々張り切ってしまいました。　それではよろしくお願いします」
「え?　ねえ?　ちょっと!?」
往生際悪く話しかけてくるエイリさんを無視して、僕は足早に店を出ていくのであった。

プレゼントはあなたに??

「っしゃー！　お前ら！　聖夜祭開幕だー！」
「「「おー！」」」
サーチェの大きな掛け声と共に、王都内の人々が各々のグラスを合わせて乾杯を交わす。
サーチェの思い付きで突如復活となった行事、聖夜祭が開始された瞬間であった。
聖夜祭。
かつて魔王を倒した勇者ヴァーチェのこの世への誕生を祝って、王都マグノリアで毎年執り行われていた行事である。
カイナに王国を乗っ取られて以来は一度も開催されていなかったようだが「なぁ？　今年はやらねぇのか、聖夜祭」というサーチェの呟きによって開催される次第となった。
当初は皆、あまり乗り気では無かったのだが「各国の住人からも注目されるマグノリアの一大行事なんだ。　商業活動が活発になるから是非とも執り行って欲しいね」という、王国内でそこそこの発言力のあるエイリさんの協力の結果、円滑に事が進んでいった。
今は何とかなっているが、カイナのクーデター後の復興よってマグノリアの国家財産にはあまり余裕が無い。
しかし、この祭りによって大きな収入が望めるのだとか。
「おーいセリカ？　何やってんだよ。　早くお前も楽しもうぜ？」
「そ～だよセリカちゃん。　タダ飯は喰らうがよし！　これは大事な事だからね！」
「え？　??ちょっと!?」
そう言って両脇を固めたサーチェとサヤによって半ば無理やりに食事が用意されたテーブルへと連行された。
肉やら魚やら、思わずこの短期間でよく用意できたものだと感心する程の料理がテーブルの上へと並べられていた。
「ご主人様？　あまりお酒は飲まれない方がよろしいのでは??」
「え？　なーに言ってんだよセリカ！　俺が酔いつぶれる訳ねぇだろ

？」
そう言ってサーチェは、グラス一杯についだワインを勢いよく飲み干した。
祭りが始まってから大して時間が経っていないはずなのに、その顔は既に少し赤みを帯びている??これは二日酔い確定だな。
「サヤさんも。　あまり食べ過ぎないようにしてくださいね？　太りますよ？」
そんなサーチェは放っておいて、頬いっぱいに食事を詰め込んで恍惚の表情を浮かべるサヤにも釘をさしておく。
「ん？　あ～それは大丈夫！　私って太らない体質なんだよね～。不思議～」
「本当に??どこに脂肪がいくんでしょうかね？　??チッ」
スタイルのいいサヤの身体の中で大きく存在を放つそれを睨みつけるが??サヤは意に返した様子もなく、再び食事を頬張り続けるのであった。

――――

「確かここに??いた！」
「おや？　セリカ様。どうしてこのような場所に？」
「祭りの方はよろしいのでしょうか？」
僕がやって来たのは、マグノリアへの入り口となる大きな門の前。
到着した途端に、そこで勤めを果たしていた衛兵たちがワラワラと集まりだした。
「こんな日まで??お勤めご苦労様です」
「いえいえ。　国王様やセリカ様のおかげでこの国は成り立っているのですから。　私たちが働くのは当然のことです」
「そうかもしれませんが??働きすぎはダメですよ。　こんな日くらいサボったところで、だれも怒ったりしませんから。　少しばかり私が代わりましょう」
祭りとは皆が公平に楽しむべきである。
僕はむしろこの祭りに興味が無い方だったし、彼らなら僕の代わりに存分に楽しんでくれるであろう。

「それは??いけません」とか頭の固いことをグダグダと言い続ける彼らを、半ば無理やりに押し返して僕は城門の管理を引き受けるのであった。

――――

「ありがとうございました！　お陰様で存分に楽しむことが出来ました！」
「いえいえ。　大丈夫ですよ。それでは??私はこれで」
しばらく時間が経過した後、戻ってきた衛兵たちに再び警備を任せて、影移動を駆使しながら僕は城下町へと再び戻ってくる。
祭りは大分佳境に入っているようで、ところどころで酔いつぶれて倒れている人が散見された。
「ありゃ!?　ヴァイスくーん！　探したよ！　こんな所にいたんだね！」
「ん？　サヤか。　てっきりもう倒れているかと思っていたが??」
「ふふん！　私を甘く見ない方がいいよ～！　アレをするまでは絶対に眠れない！」
「はぁ??。　覚えていたのか」
「モチのロンだよ！　私は準備してきてるからね！」
そう言ってサヤは小さな小包を取り出す。
それに習って僕も、ずっとポケットに忍ばせておいた小包を取り出した。
そして??サヤと見つめあった後にお互いにその袋を交換する。
聖夜祭のメインディッシュのプレゼント交換だ。
サヤは僕の送った小包を胸に抱きかかえて恍惚の笑みを浮かべる。
「ふふふ??!　ヴァイスくんからのプレゼント～！　聖夜祭さまさまだね～！　開けてもいい？」
「あぁ。　勿論だ。　ただ??あまり期待するなよ？」
「またまた～！」
そう言って勢いよく小包を開封したサヤは、その中に入っていたペンダントを見て「わおっ！」と分かりやすい反応をして見せた。
特段珍しいものでは無いのだが??サヤに似合う雰囲気の綺麗なペ

ンダントだ。
女神様のお目に叶うかは少し気がかりだったが??嬉しそうなその顔をみるに悪くはなかったのだろう。
「ありがとう！　ず～っと大切にするね！」
「あぁ。　そうしてくれると嬉しいよ。　このプレゼントは??」
「あ！　それは是非とも一人になった時に見てね！」
「??分かった」
その言葉に一抹の不安を覚えながらも、僕は続いての目標地点へと向かうべく足早にサヤと別れる。
ちなみに、後に開いた小包の中身は結構キワドイ女物の下着であった。
全く何を送り付けているのだか??。

「失礼します??ってもう大丈夫か」
そろりそろりと忍び込んだサーチェと乾杯した場所では、案の定酔いつぶれたサーチェが眠りこけていた。
??だから飲みすぎるなと言ったのに。
「まぁいい??。　今なら人目もないし??」
そう呟きながら、僕は常備しているナイフを抜く。
そして??大きく振り上げたそれを、床で爆睡しているサーチェへと??勢いよく振り下ろしたのだった。

「んぬ??もう朝か??体いてぇ」
チュンチュンと騒ぐ小鳥の声に促されて、サーチェはその目を開く。
石造りの道の上で眠りこけたことに加えて、二日酔いも合わさり、全身が物凄い痛みを訴えていた。
（しっかし??昨夜騒ぎすぎたから眠いな??もう少しだけ??????!!!）
そんなことを考えながら、再び眠りにつこうとしたサーチェは??近くに刺さるナイフの存在に気がついた。
「落ち着け??俺。　こんな事をするのは一人だけだ」

敵襲かと思って少しばかり焦ったサーチェであったが、セリカの仕業だと検討がつき、落ち着いた様子でそのナイフを抜く。
「ん？　なんだこれ??」
その時、ナイフの先に括り付けられたペンダントに気がついた。
白と黒の色が上手く混ざりあったそのペンダントは??王都のそこそこ高いアクセサリー店で人気となっていたもので??
「ハッ！　素直じゃねぇな。　セリカのやつは」
そのペンダントがここにある意味に気がついたサーチェは、笑みを浮かべながらそれを首にかける。
「さーて。　どんな仕返(おかえし)しをしてやろうかねぇ。　俺を驚かした罪は重いぞぉ??」
身体を起こしたサーチェは、セリカへプレゼントを送り返す方法を模索するのであった。